

日本風景地誌

谷口政德編



東京 松榮堂發行

明治三十六年四月改訂

改訂 松井地誌 風景

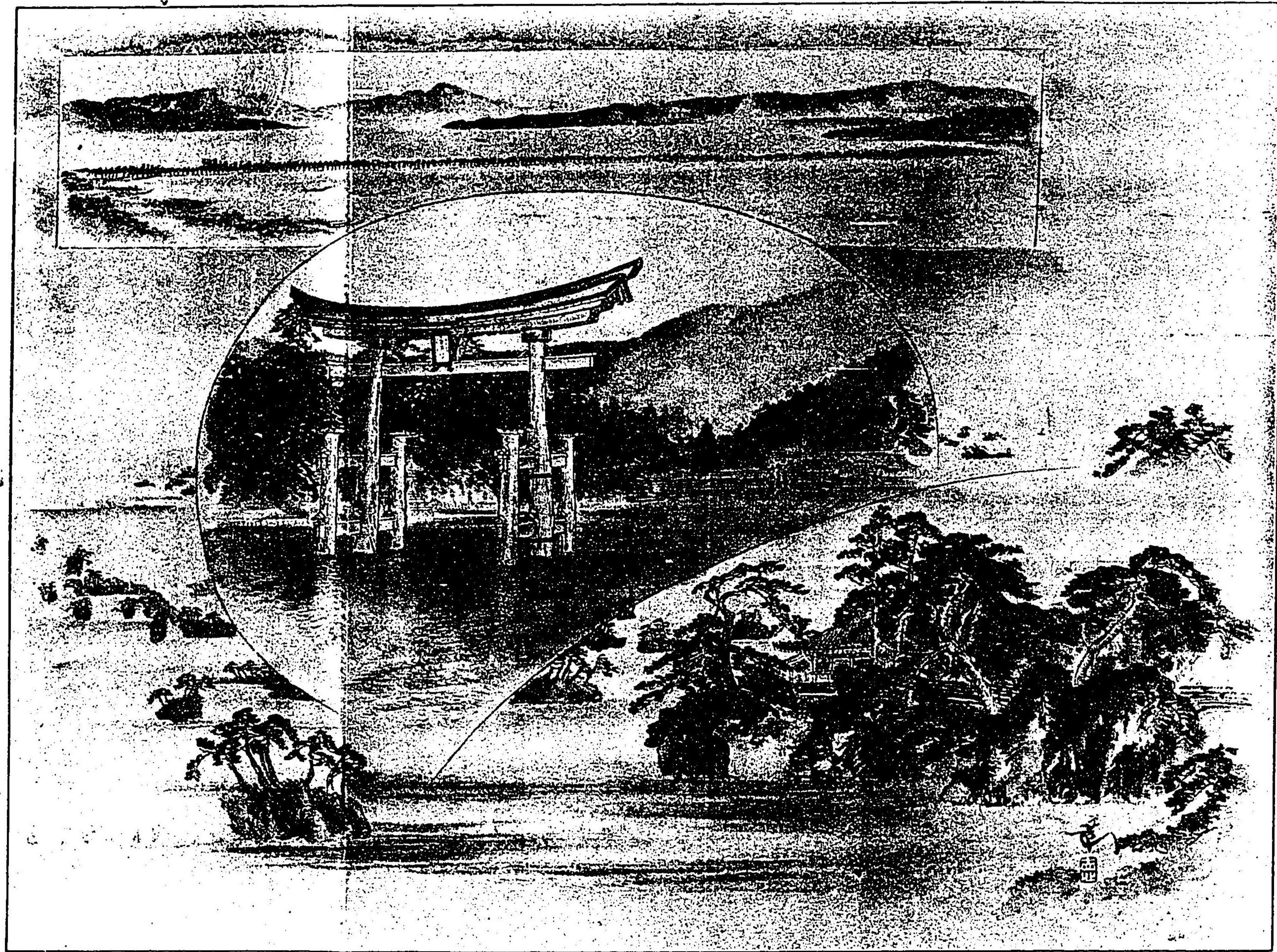


✿ 作文の好資料 ✿

✿ 旅行の好同伴 ✿

東京 松榮堂 發行





緒言

一本書は普通の地誌に簡短なる風光景色の記事文を勝地の條下に挿入したるものなりその目的は地理を學習する傍ら紀行文を綴る者の参考に充んと欲するに在り

一上欄には名家の作に係る和文体漢文体の紀行文を載せて摸範を示しその原作漢文なるものは假名交り文に書き直して讀み易からしめたり

一本書曾て僥倖にして公私諸學校の賞與品に採用せられて忽ち數万部を賣盡し鉛版磨滅したるを以て更ニ校讐し盡

を挿みて出版したるものなり請ふ倍舊の愛讀を玉へば書
肆の幸ひのみならず編者の本懐なり

明治三十六年四月初旬

編者識

日本風景地誌目次

第一篇 地文地理

◎總 說

○位置、五大島及屬島、面積區劃、地勢、海岸線、海流、海峽、湖
汐、氣候、風雨、

第二篇 地方誌

◎畿内地方

○山城、京都市、逢坂關の舊跡、伏見、淀、○大和、奈良市、○河
内、○和泉、○攝津、大阪市、箕面の瀧、神戸市、須磨浦、明石、
布引の瀧、有馬温泉、西の宮、

◎東海道地方

○伊賀、上野、月の瀨、○伊勢、桑名、四日市、津市、久居桃林、

目次

阿波浦、宇治、山田、二見ヶ浦、○志摩、鳥羽、的矢、○尾張、名古屋、熱田、半田、武豊、鳴海、桶狭間、○三河、豊橋、矢矧川、岡崎、○遠江、濱名湖、濱松、○駿河、静岡市、焼津、富士山、田子の浦、清見瀉、三保の松原、清水港、○甲斐、鍛冶、甲府市、○伊豆、熱海、○武藏、東京市、王子村、品川、横濱市、浦和、大宮、八王子、小金井、○相模、大船、鎌倉、江之島、横須賀、浦賀港、大磯、小田原、箱根嶺、蘆の湖、○安房、館山、北條、○上總、國府臺、銚子、○常陸、筑波山、水戸市、湊、

◎東山道地方.....五七

○近江、大津、近江八景、彦根、○美濃、大垣、岐阜市、○飛騨、高山、○信濃、長野市、戸隠山、上田、姨捨山、松本市、飯田、○上野、前橋市、高崎市、赤城山、榛名山、妙義山、○下野、足利、宇都宮、日光、○岩代、若松、福島、安達太郎山、紅葉山、福島八景、○磐城、白河の關跡、南湖、勿來關跡、○陸前、仙臺市、宮城野、多賀城、遠望浦、仙臺灣、鹽竈、松島、石の巻、金華山、○陸中、盛岡、○陸奥、青森、外ヶ濱、○羽後、秋田市、能代港、土崎港、羽前、山形、

◎北陸道地方.....九二

○越後、新潟、高田、直江津、○佐渡、相川、○越中、富山、伏木、高岡、○加賀、金澤、○能登、輪島、○越前、福井、足羽山、敦賀、○若狹、小浜、

◎山陰道地方.....一〇五

○丹波、龜岡、保津川、○丹後、宮津、天の橋立、○但島、豊岡、○因幡、鳥取、○伯耆、米子、倉吉、船上山、○出雲、中海、松江、○石見、浜田、○隠岐、

◎山陽道地方.....一一六

○播磨、姫路、舞子の濱、高御位山、○美作、津山、天神山、○備前、岡山、後樂園、○備中、玉島港、○備後、福山、西野梅林、○安藝、廣島、宇品港、嚴島、○周防、○長門、山口、岩國、錦帯橋、長門、

◎南海道地方……………一二九

○紀伊、和歌山、和歌の浦、那智瀑布、○淡路、○阿波、徳島、○讃岐、高松、丸龜、○筑後、久留米、岩ヶ崎の奇勝、○豊前、門司、速戸の瀬戸、○豊後、大分、○肥前、長崎、佐賀、○肥後、熊本、岩戸山、○伊豫、松山、○土佐、高知、

◎西海道地方……………一四〇

○筑前、福岡、名島、天拜山、刈萱の關、竈門山、水善寺、花岡山、○日向、○大隅、○薩摩、鹿兒島、○壹岐、○對馬、○琉球、首里、

◎北海道地方……………一五九

○函館、福山、○室蘭、○札幌、○小樽、○釧路、○根室、○天塩、宗谷、○千島諸島、

◎臺灣……………一六八

○北部地方、○臺北府、艋舺、淡水港、基隆港、宜蘭、新竹、大姑陷、○西部地方、新高山、○臺灣府、彰化、埔里社、龍湖、鹿港、○南部地方、○臺南府、安平港、鳳山、垣春、○東部地方、○澎湖諸島、

第三篇 人文地理

◎結 論……………一八一

* * * * *

上欄目次

◎名家紀行文

○嵐山	石津灌園	一
○十津川	藤澤南岳	二
○貞法院の苦梅	淵澤馬琴	一六
○遊箕面山遂入京	齊藤拙堂	二〇
○東海道	淺井了意	二六
○鼓浦	中村栗園	三三
○天龍峽の記	阪谷朗蘆	三七
○紀行	大田南畝	四四
○駿河路	香川景樹	四九
○富士賦	嵐 關	六四

○熱海紀行	榎井也有	六九
○蘆湖	日下与木	八〇
○書島	川田壘江	八六
○武藏野紀行	北條氏康	九二
○武藏古戰場記	洪 園	九九
○記澁提花夕之遊	高 雲 外	一〇三
○鹿島紀行	芭 蕉	一〇四
○御嶽新道	中村敬宇	一一一
○城捨山賦	樽 良	一一五
○日光街道	佐藤一齊	一二六
○大 瀧	齊藤竹堂	一三五
○しらぬ火	橋 南 谿	一四二
○耶馬溪圖卷記	瀨 山 陽	一五九

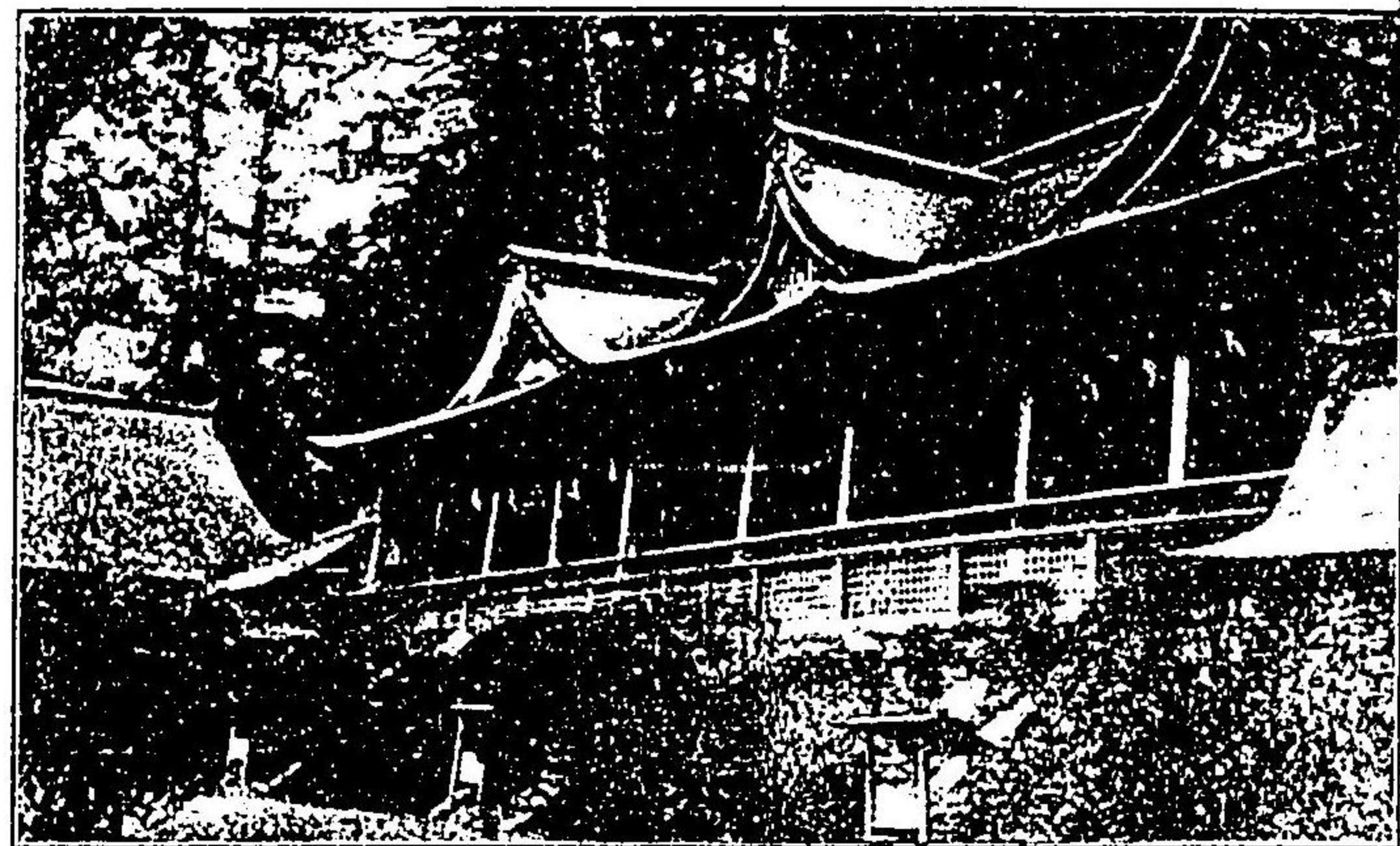


日本風景地誌目次 終

○ 霧島山 安積良齊 一八三

○ 嵐山に花を見る記 室鳩巢 一七九

○ 鶯と河鹿 矢野龍溪 一七三



◎各家紀行文

嵐山

石津灌園

丙子晴明後七日府儀松北

中村君支察頼君柴溪立北

君及び余皆な暑に在て事を辨す是日天晴れて氣暄かに春光盎然たり松北乃ち颯言して曰く良辰は得難く花候は失ひ易し今日放衙直ちに嵐峽に赴ん諸

○嵐山

日本風景地誌

第一篇

總説 (地文地理)

(位置) 風景明媚にして世界の公國と稱せられたる日本帝國は亞細亞大陸に近く太平洋の西北隅に在りて四境皆海なり其北あるをオコック海といひ西北なるを日本海といひ西あるを東海といふ是等の海を隔て北は露西亞の領地西伯利亞に向ひ西は朝鮮支那の二國に隣りす南は遙かに西班牙領フイリッピン群島に對し東は渺茫たる太平洋を隔て、遠く北亞米利加と

○地文地理

君蓋ぞ借に來らざると支
 峰欣然余も亦魂飛ぶ獨り
 柴溪未だ應せず之れを叩
 けば乃ち云ふ今夕別約有
 り吾意恐ふ焉と衆乃ち馳
 して曰く紅樓解語の花青
 山天然の美人に執若ぞと
 柴溪晒ふて曰く宛ある哉
 然りと雖も請ふ從はんと
 約途に定まる既にして而
 して鼓柝鏘然逼く退廳を
 報す衆乃ち曰く可あり矣
 と杖を投じて而して起ち

相對す
 (五大島及屬島)我國は五大島と屬島とより成る其最大にして中央に位するものを本州とし地形狹長にして恰も弓形をあせり之に次ぐは北海道九州四國及び臺灣なり其他本州と四國との間に淡路あり日本海には佐波及び隱岐あり九州の西に壹岐あり又其西に對馬あり北海道の東北に在るを千島諸島と云ふ本州の南に連るる島嶼を豆南諸島と云ひ其南に在るものを小笠原群島といふ而して九州の西南には琉球諸島ありて臺灣及び澎湖列島に連る

(面積區劃)我國の全面積は實に二万七千餘方里あり國內を大別して畿内八道とし又之れを小別して八十四國とあす之に臺灣及び琉球を合して八十六ヶ國とな

總 説

車を買ふて路に上り城北
 よりして行く未だ數十帳
 ちらず而して郊村に入る
 彌望方頃極目際無く而し
 て菜花方に盛に開き麥莖
 稍長じ花黄葉翠區劃井然
 犁然として綵甍を舖く若
 し眸を放ては則ち群樹四
 圍倚伏綸互して皆煙霞の
 中に在り淡粧濃抹媽々ど
 して笑はんと欲す獨り愛
 宕の一峰巍然として乾隅
 に聳へ稜威人に逼る衆遙

畿内 五國 山城、大和、河内、和泉、攝津、
 東海道十五國 伊賀、伊勢、志摩、尾張、三河、遠江、駿河、甲斐、伊豆、相模、武藏、安房、上總、下總、常陸、
 東山道十三國 近江、美濃、飛騨、信濃、上野、下野、磐城、岩代、陸前、陸中、陸奥、羽前、羽後、
 北陸道七國 若狹、越前、加賀、能登、越中、越後、佐渡、
 山陰道八國 丹波、丹後、但馬、因幡、伯耆、出雲、石見、隱岐、
 山陽道八國 播磨、美作、備前、備中、備後、安藝、周防、長門、
 南海道六國 紀伊、淡路、阿波、讃岐、伊豫、土佐、
 西海道十二國 筑前、筑後、豊前、豊後、肥前、肥後、日向、大隅、薩摩、壹岐、對馬、
 北海道十二國 渡島、後志、石狩、天鹽、北見、膽振、日高、十勝、釧路

總 説

説

○鳳山

○地文地理

路、根室、千島、

揖して而して去る徑漸く
 低昂或は接せず險焉而
 して徒し夷焉而して軒す
 忽ち榮忽ち辱畧ぼ世途と
 相似たり既にして而して
 一村落に入る右に一大祠
 有り花簇木叢中に隠見す
 乃ち太秦神社也謁せし
 て而して過ぐ驛折して西
 に出づれば則ち人影較稀
 く往來旁午たり衆相顧み
 て曰く近し矣々々と呼
 聲未だ畢らざるに車已に

(地勢)本邦の地勢は蜻蛉の如し而して其地勢を構成する主要なるものは二大山系の方向に因るものあり北より南にわたる山系は樺太山系と稱し西南より東北にわたるものは西南山系又は支那山系と稱す本州の中央部は最も高山多く水流は是等山脈の地勢によりて分れオコック海と太平洋と日本海に入る
 (海岸線)海岸は日本海に向ふ所は屈曲少くして岬灣に乏しく太平洋に向ふ所は之れに反し岬灣多く又島嶼に富みて航海に便あり日本海に向ふ所は秋冬の頭風波頗る暴く又夏季には本州の東北岸より北海道の海岸にわたり時々霧多くして航海に艱む所あり又臺灣近海は風濤殊に荒く航行危険なり

總

説

總

説

渡月橋に抵る矣極下一帯
 の水尾れを大堰川と爲す
 川の東涯は酒肆櫛比し綺
 羅填咽殆んど立錐の地無
 し衆將に車を下らんとす
 車夫矯健にして力挽して
 已ます左喝右叱臂を掉ふ
 て馳突す行人皆之れが爲
 めに辟易す亦今日の樊舞
 陽也既にして一亭を得た
 り廬席にして人無く吾輩
 の爲めに設くる者の如し
 衆乃ち駕を税して而して

(海流)我國の近海には種々の名あり本州の南岸に在るものを鹿島灘遠州灘熊野浦とし北岸に在るものを豊灘石見瀧能登海とす又九州には北に玄海灘あり南に七島灘あり東南に日向灘あり瀬戸内海にも播磨灘碓黄灘周防灘等ありろの内海は四時波穏かにして航行に安きを以て古へ浦安と稱せり又北方オコック海は冬に至れば氷を結ぶ海中にも陸地の川の如く常に流るゝ所ありこれ即ち海流にしてその温なるを暖流と稱し冷かざるを寒流と稱すわが近海にも二種の海流ありて寒流は北部の海岸を洗ひ暖流は南部の岸を流る暖流は黒潮又は日本海流と稱すこの黒潮に接する地は冬時も雪を見ざることあり
 (海峡)海峡の主なるものは北に宗谷津輕あり中央に浦

○風 山

○地文地理

憩ふ焉亭西北に面し正に
 風峽と相角對し宇高く軒
 潤く最も眺に適せり時
 に花候微しく早く後先一
 雨日を争ふ然れども爛開
 已に七八分に至り簾々ど
 して峽に溢れ乍にして而
 して白雲施曳し乍にして
 而して降霧堆壘す翠松其
 隙を縹緲して滯潭其影を
 蕩漾し千姿万態名狀し易
 からず衆意躍然掌を拍て
 妙と稱し急に盃を呼ひ饌

賀由良鳴門明石あり西に赤間關豊後海峡等あり就中
 浦賀海峡は東京灣の入口にして富津洲と觀音崎と東
 西より斜めに相出づその間凡一里半要害の地あるを
 以て堅牢なる砲臺の設けあり由良海峡は紀伊淡路の
 間にありろの幅凡一里赤間關の海峡は本州と九州と
 相對しろの幅五六町に過ぎず
 (潮汐)潮汐とは凡六時間毎に海水の満干をなすものを
 いふろの原因は月の引力にあり本邦太平洋の沿岸は
 外洋に面するを以て潮汐の高低あれども日本海は四
 面殆んど陸地を以て圍まれたるにより潮汐の高低甚
 だ少し又九州の有明海は潮汐の満干最も大にして佐
 波の海は最も小なり
 (氣候)我國は地勢南北に長さ故氣候一様ならず然れど

を命す亭婢供する所を請
 ふ衆問ふて曰く香魚あり
 乎曰く有り曰く足れり矣
 と命じて而して之れを羹
 にす香清くして味淡く尤
 も好下物たり酒己に酣衆
 皆醺然、膝を抱て唫哦し翻
 々として相倡和す偶々一
 老人有り白髮丹顏衆を率
 て亭下を過ぎ呼んで曰く
 支峰先生々々々と揖し
 て而して過く即ち草場船
 山也社友市村強堂亦亭後

も概して北地は寒く南地は暖かあり本州四國は寒暖
 中和あれども琉球列島臺灣諸島及小笠原島の如きは
 暖熱にして年中霜雪を見ず又北海道は互寒にして千
 島の如きは夏短くして年中氷雪の中に在り
 (風雨)風は西風若くは西北風常に多く夏のみは南風を
 多しとす夏時は雨多し六月の頃特に甚し之れを梅雨
 といふ又例年八九月頃支那海より暴風の吹き來るこ
 とあり所謂二百十日(稻の花吹く頃)前後に當ること
 節は農家に於て大切の時とす
 臺灣の東北部は冬時雨量多く西南部は極めて鮮し面
 して夏季に至れば西南部に屢は驟雨あり北部は却て
 降雨鮮なし

○嵐山

○地文地理

地 方 誌

より出つ亦勿々手を刃つ
 二人皆な邂逅し同賞する
 ことを得ず衆以て憾と爲
 す焉妓數輩有り客を擁し
 て而して過ぐ柴溪目逆ひ
 て而して之れを送る余問
 ふ美にして艶ある耶柴溪
 大息して曰く亦天然の美
 人に及ばずと一坐哄然た
 り時に殘陽漸く低れ暮色
 蒼然として山黔く花品か
 一人散じて境靜か一口の
 指反つて此際在り衆

第二篇

(地方誌)

畿内地方

畿内は本土の中央に位し東南北の三面は山嶺を以て
 圍まれ山城及び大和は其東部に在りて地形南北に長
 し殊に大和は南の方紀伊區に向て突出し國中連峯起
 伏し大峯山上大台ヶ原の諸山最も名あり攝津及び和
 泉は西に茅渚の海を控へ河内は大和の間にありて地
 形狭長あり
 琵琶湖畔の大津より大阪灣頭に至るの間は所謂淀川
 の沿岸地方にして殊に風景に富み畿内交通の主線た
 り地味は肥沃にして人文風氣に開けたり

山城

内 渡

意留連愛を割くに難し支
 峰は坐中の著宿乃ち鐸を
 振ふて曰く花は半開に在
 り酒は微醉に在りと松北
 も亦戒めて曰く亭の楣に
 遍して時鳥と曰ふ是れ不
 如歸也と一人聲に應じて
 曰く洵に然りと遂に束裝
 して亭を出づ時に舞陽尙
 ほ在り車を擁して歸るを
 待つ衆乃ち分かれて二輛
 に乗り松北と支峰と余は
 柴溪と每輛一雙先後相馳

山城は畿内の最北に在り北部は連山起伏し淀川の近
 傍は最も廣き低地あり
 (京都市)京都市は桓武天皇皇居を此地に奠め給ひしより
 千七十餘年間の帝都たりしを以て此名あり明治遷都
 以來東京に對して又西京と稱す街路は縱横直線にし
 て端正あり其最も般賑なるは三條通りにして市の中
 央に在り之より以北を上京と稱し以南を下京と云ふ
 京都府廳京都帝國大學第三高等學校博物館同志社大
 學あり市の北部に舊御所あり二條城は豊太閤の築く
 所にして今離宮たり加茂川は市を貫流し其水の清き
 を以て名あり昔は之れより以西を洛中と稱し以東を
 洛外と稱せり近年琵琶湖を疏通し水を市の東部に通
 じ工業運輸の便に供せり

嵐山

京都市

地方地

す路漸く昏黒にして余亦坐睡す俄にして而して覺むれば則ち已に城北に至る此れ従り兩嶺南北し各自家を指す柴溪と余とは仍は一車に在り柴溪曰ふ今日の游何ぞ樂しきやと余問ふ解語の花と如何答へて曰く既に大半に飽く矣復た其他を思はずと一睡して而して別れ即夜筆を走らせ此れを記して以て柴溪に示す

此地は三方普山を以て圍まる東山西山北山の通稱あり比叡愛宕鞍馬等の名殊に世に著はる山水の景に富み嵐山の櫻花高尾の紅葉は殊に名あり又神社佛閣極めて多く八坂神社北野天満宮東西兩本願寺知恩院清水寺の如きは人の能く知る所なり就中史上に有名な金閣寺銀閣寺及び祇園加茂の社を最とす京都は工藝に秀で織物を以て名高し産物は西陣織清水焼鴨川染粟田焼等あり瀛車は七條停車場より東京へは十五時間大坂へは一時間餘にして達するを得べし

内幾

十津川

藤澤南岳

五日(八月)熊野に赴んと欲す諸子議して舟を装ふ已に舟に至りて乃ち發す高久導たり舟下ること里餘兩嶺愈よ峻く愈よ逼る此溪長殿に至りて十津川と呼ぶ折立に至れば頗る大なり蓋し小溪の東注する者曰く大股長殿に會す曰く雄宇宮原に會す曰く寒

○十津川

○京都市

に走井あり昔し清原元輔が走井のはを知らばや逢坂の關引こゆる夕かげの駒と咏せしより起る又山科には大石良雄閑居の跡あり今は寺となれり(伏見)は京都の南方に在り京都及び奈良に通する要路にして舊時より淀川に依りて大坂灣に出づるの要津たり豊臣秀吉の舊城地にして今猶ほ東端にその跡あり數百株の桃樹を植ゆ(淀)は木津川と宇治川の左岸伏見の上にあり應神天皇の皇子菟道稚郎子の閑居し給ひし地あるにより此の名あり我國第一の茶所とす其東に平等院あり源頼政の自刃せし地にして今猶ほ扇の芝を存す八幡は淀川の左岸淀の下に在り山崎と相對して京に入るの口を扼す大山崎は天王山の麓に在り羽柴秀吉

地 方 誌

野、川津に會す曰く瀧、風屋に會す曰く芦瀨小原に會す故に鴨綠太だ漲れば儼然たる一の巨川也其両山の間に廻る者坂本より皆然り只身崖上に在り是を以て峽中の奇を盡す能はず今は身を小舟に托し上下一碧の間を穿ち始めて奇勝を帯にすることを得たり峽中は怪岩奇石交互參錯舟槎の下る者岩石の間を縫ふ舟子棹を手にし

明智光秀を亡ぼせし地あり又明治の初年會桑二藩の兵が薩長の兵と接戦せし地あり離宮八幡宮は停車場の前にあり寶寺はその北にあり伏見の南に巨椋池あり宇治川の分流此に入り水量を調和し洪水の害を少なからしむ山吹の名勝ある井手の玉水の古跡は池邊にあり

大 和

大和は五畿内中最大の國あり國中山岳頗る多きを以て人口少し然れども神武天皇以來歴代の天皇多くは和を爰に奠め給ひし地なるを以て古來舊蹟の存するもの多し

(奈良市)は元明天皇より七代八十餘年間の帝都にして

畿 内

て舟首に立ち石に逢へは則ち撞て以て避く左邊右轉其巧なること人を驚かす時に淺灘あり灘石水を激し水咽んで白を醸すと百十頭舟底石に觸れ輾轉聲有る又巨岩の下盤渦して潭と成る乃ち恐る舟隨つて而して輪旋するを舟子隨處手を着け易々に經過す而して兩嶂皆數十仞杉松十丈濃翠滴る如く間に山脚躡有り猶ほ残紅を

南都とも稱す奈良縣廳の所在地たり又博物館の設あり奈良晒及奈良漬を産す瀛車時間凡そ二時間餘にして大坂に達するを得べし東大寺は大佛を以て名高く春日社は神鹿を以て著名あり又三笠山は西郡仲麻呂歌を以て人知らざるものあり其他神社佛閣は千年以上の建物ありて有名ある佛像少なからず

河 内

吉野川に沿ふて吉野山あり滿山皆櫻樹にして花時の風景殊に絶佳あり此地南朝三世五十餘年の皇居たり吉野紙吉野葛を産す是より以南は十津川の幽谷ありて紀伊に通せり

○十津川

○奈良市

地 方 誌

留めて頗ふる風致有り而して舟矢より駛く山轉じ岩邊げ走馬燈を看るが如し前日余保津川に遊びて太だ之れを奇とせしが此峽に比すれば則ち兒にして而して將に孫あらんとする耳未だ知らず巫峽の艶預ど如何ぞ也今歳雨少さくして水溜る而して猶ほ此くの如し水漲るの時想ふ可き也眼を轉する匆々忽ち七色に至る舟行蓋

和 泉

大和川と共に灌漑の便を資く金剛山は國の東南隅に聳へ千早城趾及び四條堰は何れも楠公父子の事蹟を以て名高しこの地は木綿の産出を以て有名あり又故方よりは多く煙草を産す高槻の北に神峯山あり山上に五水瀧等の名勝及遊近山あり山麓を淺茅ヶ原といふ能因法師の歌に淺茅原まどふ黒髪さのみまで誰か手枕の上に置きけんどあり

内 陸

し已に三里和州盡き焉紀州續く焉兩崖即ち低く川身漸く濶く而して水勢頗ぶる緩し舟子事有りて岸に上る會々雷雨大に作り六人者或は蓬を以て身を纏ひ或は踞して而して頭を蓋ふ余は舩に倚り傘を手にして而して立ち四望して輿を遣る川の西に長嶺蜿蜒たる者は無終山なり半は烟雲の畫斷する所となる東南は則ち翠嶂碧

攝 津

攝津は南大坂灣に瀕するの地は殊に平坦なり然れども北に進むに従ひて漸く高く人煙頗る稠密なり(大坂市)は畿内第一の大都にして淀川に沿ひて大坂灣に臨む溝渠縱横に通じ運輸極めて便あり淀川の分流ある安治川口は諸國の商船輻輳其東に居留地あり市を東西南北の四區に分つ市の東には豊臣秀吉の録し大坂城ありて今は唯だ墟址を存し中部都督部及び第四師團司令部此中に在り大坂府廳は淀川に臨む造幣局は我國現今の通貨を鑄造す其他控訴院紡績織物會社等あり

○大坂市

此の地は元と難波津(浪華とも云ふ)と稱し仁徳天皇の

地方誌

橋模糊一帯の間に元立す
皆奇紀の山也良や久ふし
て舟子来らず余乃ち周詩
を浪吟す水鳴り山答へ雨
和して雲舞ひ魚龍も亦波
底に踊躍すると疑はる長
歌方に了り舟子来りて緩
を解き雨を衝て以て下る
清涼骨に徹す將に本宮に
達せんとして雨歇み乃ち
岸に上る

貞法院の苔梅

瀧澤馬琴

都し給ひし所あり豊臣氏築城以來市況頗に盛大に起
き徳川氏の世に至り最も繁榮を極め諸大名の金庫と
稱せられし處なりしが明治の遷都以來一時其の繁勢
を減じたり然れども現今市況又大に振ひ商工業最も
盛んなるに至れり市街は橋梁多く殆んど二百餘に達
す心齋橋前高麗橋通り淀屋橋筋本町通を殷賑の地と
す一閑張貞田織綿布等を産出す
大坂は水運の便あるのみならず鐵道四通し汽車にて
十七時間を経れば東京に達するを得べし東區には兩
本願寺あり北區には天淵入祠中の島公園あり此の他
風景の見るべきものは難波橋中の島の眺望櫻の宮の
櫻花天保山の海水浴高津神社の雪景生魂神社の春景
天王寺の高塔川口の連橋等ありとす

幾

内

和泉より四里ばかり更に
梅津といふ村ありこゝに
貞法院といふ寺ありこの
寺の庭に一株の老梅あり
て苔梅と名づけたり傳へ
て云ふ昔順徳天皇此とて
にみゆきありしときもた
せたまひ梅の枝を土中に
さゝせたまひしが枝葉年
々にしげり五百餘年の後
までも春毎に花吹けるお
りと云ふ其の樹の幹は四
尺あまりあるべし四方に

○貞法院の苔梅

笑面の瀧は流川の分流たる神崎川の北岸吹田の
北三里笑の中に在り高さ十一丈二尺幅三間餘満
山楓樹にして秋時は錦を敷くが如し瀧安寺唐人辰
り岩龍穴等の名稱あり

(神戸市)は大坂の西流車里程一時間の所にあり南は大
坂灣に臨み北は山を負ふ港内水深く大船の碇泊に適
し内外の商船輻輳せり本邦第二の互市場にして兵庫
縣廳のある所あり此地は元と神戸兵庫の二市街に分
れ湊川によりて之れが境界を合せしが今は合して一
市を成せり其最も繁盛あるは元町通榮町通多門通等
とす
湊川は楠公討死の處あるを以て其名高く傍に湊川神
社あり楠公を祀る福原は平清盛の舊址あり紙を以て

○笑面の瀧 ○神戸市

地 方 誌

石垣したり幹の半ばまで
青甍をもて包めるが如く
いとあつく苦むしたれば
幹ども見えす苦より上赤
る枝は四方に開きて花笠
に似たり花は白くまた薄
紅あり梢の花のうつらふ
ころ苦の中處々に苔を生
してさながら苔に花さく
如くよりてこれを苦梅と
名づく又二見村ある農夫
の庭に老梅あり名づけて
懸宿梅といふ花は八重に

名産とす又中國の牛は此地を経て四方に出ず鐵道は
西には山陽鐵道ありて山陽諸國に通じ東は東海鐵道
ありて大坂以東に通せり
神戸の西方播磨の境に接して鶴越及び一の谷あり共
に源平の古戰場にして名所舊蹟多く一の谷に敦盛塚
あり名物敦盛蕎麥を商ふ又生田神社には笹の梅梶原
の井等今猶ほ境内に存せり
須摩浦 は國の西隅に在り前は海を隔て、淡路に
對し後は鐵拐峰伏山鶴越等の諸山を負ひ海濱は
白沙青松相照映し西播磨の舞子濱と相連る風光佳
絶一幅の畫圖の如し古より觀月の勝地として詩歌
に吟咏せらる
明石 は舞子と相連り共に海眺觀月を以て名あり

幾

内

て勾ひきはめて高しこの
梅もおかし帝の植えさせ
たまひしといふたゞ餘木
にことなることは花一輪
に實は必ず三ツ四ツとま
れり頗る奇とすべし他處
より其穂を乞ひとりて接
木にし或は實植えさす
るものあれどもたえて花
咲き榮ゆることなし帝の
植えさせ給ひしといふこ
と懸ふべからず

○貞松院の苦梅

此の地の名所を人丸神社とあす社は丘山に在り海
を隔て、淡路島と相對し紀伊讃岐の諸山を雲煙模
糊の間に見る眺望の佳絶言ふべからずその西に腕
塚あり平忠度の腕を埋めし所といふ其他舊蹟尙ほ
多し
布引の瀧 は神戸の北布引山の麓にありて雄瀑雌
瀑の二瀑あり又其の北方に有馬温泉あり三方山を
負北一面僅かに開け但馬に通す此地名勝多く所謂
六景なるものあり即ち鼓ヶ瀧の松風、落葉山の夕照
温泉寺の晚鐘、功池山の秋月、有馬富士の暮雪、有明樓
の春望是れなり其他鳥地獄、落葉山古城跡等の名所
あり
伊丹池田は古より清酒の醸造を以て名高く西の宮亦

○須摩浦 ○明石 ○布引の瀧有馬温泉 十九

遊箕面山遂入京

齋藤拙堂

余攝に在ること既に、洗辰
途に將に京に入らんとす
久しく笑面の勝幾句に冠
たるを聞き迂路して過ぎ
り觀んと謀り二十七日下
午大坂を發し東北長柄川
を渡り行くこと五里にし
て山下に至る盤廻して而
して上れば則ち淨境別に
開け清溪奔馳し紅欄橋架

酒を以て有名あり兜山は西に連り武庫六甲の二山西
に聳え武庫山の南麓蘆屋村は古へ蘆屋の里と稱し猿
丸太夫の墓あり其打出の濱は神功皇后出産の地と稱
せらる有名ある住吉神社は皇后の創建に係る東北に
岡本梅林あり御影石は此の地の名産あり
西の宮の西北三里中山の南麓に中山寺あり厩戸皇
子の開基に係り登臨の風色頗る佳なり摩耶山も亦
山上に天上寺あり夏季避暑の爲り登山するもの多
し又諏訪山温泉は神戸の北にあり山腹に諏訪神社
あり故に山の名とす其後に弘法大師の二度登りし
再度山あり登臨佳絶あり

○東海道地方

東 海 道

焉此間竹經松緯一往幽折
心甚だ之を樂む但だ日昏
黒寺門閉せり矣投して門
前の茶店に宿す背は即溪
終夜聲有り琅然として枕
に到る明旦門開く觀音堂
に至る稍前ひ左右礎有り
左を行者堂と爲し右を辨
天宮と爲す並に宏麗にし
て之を合せ名づけて瀧安
寺と曰ふ滿山皆楓爛然と
して霜に飽き色渥丹の如
し水岩の間に綺錯し時に

○游箕面山遂入京

東海道は畿内の東に連りて太平洋に臨める一帯の地
なり北部は山岳相連り南方海邊に至るに従ひ次第に
低下す故に河流(伊勢常陸等を除く)は西北に發して東
南に流る海岸は出入甚しく東京灣駿河灣及び伊勢灣
の三大灣深く北方に灣入し房總三浦伊豆及び志摩の
四半島遠く海中に斗出す
伊豆半島の北部に箱根嶺あり古來海道無双の天險と
稱せられ維新以前は此處に關門を設けたり故に之れ
より東を關東と云ひ西を關西と稱す又往昔逢坂關を
境として關東關西に別ちたることあり

伊 賀

伊賀は四面山を繞らし其地伊賀川の流域地方は稍平

地 方 誌

堅錦有りて波に點じ杳然
として流れ去る談者多く
言ふ其勝高雄の上に在り
と意ふに然らん後門に出
で徑に沿ふて而して行く
楓盡きて松來り水究りて
石出づ巨岩疎峙し大さ厦
屋の如き有り唐人戻りと
曰ふ戻りの言たる反る也
相傳ふ昔外國の人有り來
遊して此に至り險を畏れ
て戻り去る故に名づく
更に進む大層嵯野山谷に

垣あり國中僅かに二郡東西七里南北凡九里の一小區
あり

(上野)は伊賀川の流域にあり伊賀焼を産す上野町には
邊野馬復仇の舊跡鎌屋の辻芭蕉翁の宅址あり藤堂
氏分城の地にして今猶は白鳳城の跡あり野馬餅野馬
餅を名物とす

月の瀬 上野より西南三里餘の處にあり梅林を以
て其名高し此地齋藤拙堂翁が月勝記勝の著ありし
より星巖山陽の諸士皆遊びて其勝を讚賞せしより
遂に海内第一の梅林と稱するに至る月の瀬は獨り
梅花を以て名高きのみならず山水の景亦絶美にし
て松竹は溪山山峰を綴りて花は経となり松竹は緯
とあり疎影横斜絶崖清潭に相映するの光景殆んど

東 海 道

雲ふを聞く徑轉じて瀑布
の絶壁に掛るを望見す長
サ二百尺可り浪沫空に飛
び跳擲して下り潭底に至
て後た逆上し輒ち轟然と
して雷動す一佛堂有りて
瀑に面す登り觀る焉凜然
魄悸し久しく留まること
能はず而して去る聞く近
畿の瀑布那智を以て第一
と爲し此瀑之れに亞ぐと
想ふに當さに然るべし且
つ此瀑は直下して略ぼ遅

喬歌の盡くす所にあらず所謂月瀬十勝は古來詩家
歌人の嘆賞して已まざる所あり

伊 勢

伊勢は西は大臺ヶ原岨見及び鈴鹿の諸山並列し地勢
頗る峻嶮なり鈴鹿山は即ち鈴鹿關の在りし所にして
山中に有名なる八百八谷あり木曾川流域の地は地勢
次第に東方に低下するを以て河流は皆東流す而して
中央雲出川を限りて北伊勢南伊勢に分つ地味米穀に
宜しく伊勢米を産す

(桑名)は木曾川口の南に在り舊城址春日神社等の遊覽
所あり時雨蛤白魚を名産とす關西鐵道に依り四日市
に通ず

○游笑山途入京

○月の瀬

回せず之を布曳深の曲折して而して下る者に比するに其勝各異かれり曲れる者は委蛇として態を著く小品の文也直ある者は奔放して勢に駕す大篇の文也或ひと謂ふ文は曲を貴ひ而して直を賤しひと通論に非る也余二深を觀而して之に大小の別有るを知る矣堂の右より燈を躡んで而して登る深頂に出づ頂凸蓄碧方三丈上流

(四日市)は桑名の南方三里にあり港内水深くして大船を泊すべし横濱との定期航海船あり又熱田に渡る要津あり且つ東海道鐵道に通ずる便あるを以て交通極めて昌なり市中又製造業盛にして洋紙及び綿絲の産額多し此近傍より万古焼を出す此地關西鐵道の便に依り高宮龜山を経て津に達するを得べし
(津市)は安濃津の畧稱にして東阿漕浦に臨む舊と藤堂氏の城址にして三重縣廳の在る所あり津公園は市の北部にあり高川神社を祭る其他結城神社八幡神社等甚だ多し物産は絹子織蒲子團扇杓子餅等ありとす參宮鐵道は津に起り南松枝を経て宇治山田に至る
久居桃林 是津の西南二里許に在り七千餘株の桃林一眸霞を敷くが如し又其北に新家桃林ありて三

灌注し底深測られず蓋し深の源也後門より此に至るまで凡ろ十八町なり又一里許りにして勝尾寺に至る中堂に觀音大士を安す西國三十三所の一たり前門に出で坂を下ること五十町郡山に至り遂に北上して京に入り數日住まり高雄及び東福寺に遊ぶ兩地の楓都下に冠たり號して勝區とあす然れども余終に笑面の勝を忘るゝ

万株の多きに及ぶ共に春時秋を曳くもの多し
阿漕浦 是興津海濱の名にして青松白砂相點綴して絶勝の地なり近傍に辛州海水浴あり亦風光佳絶の地とす阿漕神社には芭蕉翁の名碑あり月の夜の何を阿古木に啼く千鳥の句を刻す
(宇治、山田)南伊勢の大都會にして宮川の東畔に位し尾部坂以西を宇治と稱し以東を山田といふ志摩大和紀伊の各街道に當り東北に大湊神社港を擁し繁盛の地なり外宮(豊受大神)は山田に在り内宮は宇治町の南端五十餘川の上流に在り我邦の總廟にして天照大神を祭る兩宮に參拜するもの世俗之れを伊勢參宮といふ
二見ヶ浦 是有名の勝區にして山田の東北二里許

○遊笑面山途入京

○四日市 ○久居桃林 ○阿漕浦

能はず矣

東海道

淺井了意

勢田の大橋九十六間に小橋の長さ三十六間あり昔し孝謙天皇の御時に惠美の押勝むほんを起して軍に打ち負けこゝまで落ちければも橋絶えて渡ることも能はず高島にて自害せらる又天智天皇の皇子大友は淨見原の天皇を殺し

の處にあり海岸數間を隔て、奇石二あり相距ること三間許形關門をさし大なるもの二十九尺小なるもの十二尺旭日拜見の名所なり二見浦の南に朝熊山あり志摩との堺をさし國中の名山あり

志摩

志摩は山田の東南海中に斗出する小國あれども地勢平坦ならず海岸の屈曲出入極めて多く海産物亦夥し(鳥羽的矢)は共に港内水深くして船舶の碇泊に便あり國の東南端安乘崎に燈臺あり

尾張

尾張の西南部は濃尾平原の一部にして木曾河以東

東海道

奉つらんとしたまふ處に淨見原は和州芳野の宮にみはしましけるが密かに忍び出で伊賀伊勢を廻りたまひ東國の兵を催し美濃の國不破の關にて軍ありしに大友打負けて勢田まで落させたまふ淨見原の兵勝に乗りて返ひかけ責め付け奉りしかば皇子の兵皆落ち失せたり皇子力あく竹林の内に入り給ひて自から縊れ給ひぬ其

○東海道

○名古屋市

の流域にあり土地極めて肥沃あり南方一帶海洋に斗出するものを知多半島といふ(名古屋)は濃尾平原の東南に在りて本邦第四の大都會とす本市は徳川三家の一ある尾張侯の舊城下にして名古屋城は市の北部に在り現今第三師團司令部を此所に置く其天主閣には黄金の雙鯉あり又此の地に愛知縣廳控訴院あり七寶燒名古屋扇及び一閑張を産す東海道鐵道にて東西兩京に通じ十二時間にて東京に達す名古屋の正北四里に小牧山あり家康秀吉と戦ひし有名のお古戰場あり又西一里にして秀吉の出生地中村あり又清正の舊宅址なるもの今猶ほ存す(熱田)は名古屋の南方に接近する市街あり伊勢内海に臨み伊勢に渡るの要津あり通稱を宮といふ蓋し街の

地 方 誌

時皇子の陣の跡竹の林の
所は久しき事にて知る事
なくなりたり古へより東
國の軍兵の都に攻め上る
を防ぐは必らず宇治と勢
田との橋を引きて相待つ
とは申せ先陣しけるこ
とも度々ありとかや
大橋の上より左の方に石
山寺の塔見ゆ此寺は東大
寺の良辨僧都の草創なり
其かみ聖武天皇東大寺の
大伽藍を御建立ありける

東部に熱田神社(日本武尊外四神並草薙劍を祭れる四
神)白鳥の御陵あるを以てなり名古屋の熱田に於るは
恰も東京の横濱に於けるが如し
(半田、武豊)は熱田の南即ち三河灣と伊勢内海とを分つ
所の知多半島の東岸にあり陶器に有名なる常滑あり
武豊の後山を鳳翔山といひ山中に養生館あり保養及
び避暑に充つ又半田は衣浦に臨み港内水深くして船
船の出入多し流車は武豊より大府に至りて東海道鐵
道と連絡す此の國は地肥沃あるが故に且良質の陶
器に富む故に尾張米瀬戸焼の名産あり
鳴海 は熱田の南方數里にあり昔しは鳴海濱と稱
し太田道灌が遠くなり近く鳴海の濱千鳥鳴く音に
潮の満引をぞ知る」と詠みし所なり鳴海は多く隣

東 海 道

に金銅十六丈ひ盧遮那佛
を鑄たまひ其箔の料にと
て黄金を求め給ふ良辨は
舟に乗りて湖海に浮びて
こゝかしこを廻りたまふ
所に一人の翁ありて岩に
尻懸けて魚を釣る良辨に
語りけるは此の山はこれ
觀音の靈地として金あり
こゝに留まりし持念した
まへとてかき消すやうに
失せにけり翁は比良の明
神なりき良辨こゝにして

○東海道

村有松にて製す
有松の南ある桶狭間は織田信長の今川義元を亡ぼ
せし古戰場にして今猶は草繁き荒涼たる中に義元
の墓あり菜を以て有名なる大高には義元の據りた
る鷺津城趾あり而して信長の居城たりし清州は名
古屋の北方一里北の地にあり

三 河

三河は山岳丘陵所々に起伏すれども地勢概ね險から
ず殊に矢矧川四近の地及び豊川下流の地は最も平坦
なり以上二川の外更に矢矧川の支流太平川參尾の境
界を流るゝを以て三河の名あり
(豊橋)は豊川の下流に在り三河第二の都邑あり豊橋以

○鳴海

持念し給ふに此の山の金は
は観音惜み給ふゆゑに取
るべからずと其間に始り
て奥州より金を奉る此に
依りし大佛皆箔をちし奉
りたまふとあり是れ偏に
此の観音の御力なりとて
石山寺を草創し給へり又
上東門院の紫式部は石山
に籠り観音に祈をかけ奉
り八月十五夜の月湖水に
うつりたるを見て水想觀
を成就し自然智を得て源

南の地は所謂渥美半島にして西南に斗出し志摩半島
と相對し伊勢内海の門口をあす
矢矧川は源を美濃、阿賀、瀨山に發し岡崎の西を過
ぎて海に入る橋の西畔矢作村の田中に竹林あり古
矢矧の長者が住居せし宅趾ありといふ又淨瑠璃姫
は此長者の女にして義經を慕ひ陸奥に赴かんとし
浦原驛に至りて死せりといへり又御油の北牛窪村
に山本勘介居宅の跡あり今は田園とされり
(岡崎)は豊橋より瀛車一時間程の地にあり矢矧川に臨
む徳川氏の起りたる地にして城址は公園とあり園内
東照宮を祭る此の地漆器を産す又知立には八ッ橋の
古跡あり葉平の燕子花を詠めし地あり

氏物語を作り須磨明石の
巻よりも書き出し侍りと
かや、かは良辨の事に付さ
ては哀れある物語りあり
小橋より右に向ひ北の方
を見れば湖水の西の方幸
崎の松に續きて片田の浦
浮御堂も幽かに思ひやる
彼の浮御堂は恵心僧都の
造りたまふ一千体の彌陀
佛あり中頭皆散りくゝに
取り行きて退轉に及びし
を或聖亦りて江州を觀め

○東海道

○濱名湖

遠 江

遠江は天龍川國の中央を貫流す水淺くして運漕の便
を缺くといへども灌溉の便極めて大あり下流兩岸の
地は平原遠く連り東方に磐田原あり西方に三方原あ
り武田信玄の敵兵に敗れし古戰場あり大井川の下流
は其南方に牧野原ありて遠く南方に延長し其尖端御
前崎は遙に伊豆の石廊崎と相對して駿河灣の門口を
成す其極端に燈臺あり
濱名湖は舊猪牙湖と呼び東海道有名の勝地あり
灣内水深く小涼船を往來し遙に秋葉黒法師の諸山
を望み風光頗る佳あり其海に通ずる處を今切と稱
す東海道鐵道の貫通する鐵橋を架す此灣往昔大湖

地

方

誌

て再興し侍りかの恵心の御作の彌陀は片田千休とて尋みもてはやすとしかや片田の末は白鬚比良小松なり又幽かに沖中へ突き出でたる尾崎は大溝と云ふ所なり今津海津は遙かなれば見えす湖水の東右の方に押し入りたるは長面寺の観音なり音根の観音は澤山の中にあり沖に見ゆるは是れ沖の島なり其あなたに竹生島あり此

ありしが今より四百年前海嘯の爲りに湖口を決して海とされり

(濱松)は濱名灣の東三里に在り東海道鐵道の要路に當る東西兩京の間に位するの地たるを以て繁盛あり市の北端に濱松城址あり茶の産出多し

駿河

駿河は箱根以西駿河灣に面する地にして地勢急斜面を成す灣内に注ぐ所の富士、安倍及び大井の三大河は皆急駁あり故に駿河の稱あり(静岡市)は元と駿府又は府中と稱し西方に安倍川あり此地は往昔徳川家康退隱の地にして其東方海岸に近き所に久能山あり其の久能神社は家康を祀る後山に

東

海

道

の島は古へ景行天皇の御時に水の表に浮び出でたり島の中に辨才天おはします行基ぼさつの御作あり島は是れ水精輪縁の木末枝垂れて水にうつろふ影しげく鱗峰に集まれば魚木に登る心地せり壘らぬ空や久方の月海中に浮んでゑも波を走るとかや賊に類あき名所なり

鼓浦

〇鼓浦

日本平といふあり駿遠甲の風色一眸に萃まり駿州第一の絶景とす又淺間神社は美觀日光に次ぐ崇神天皇御宇の建立にして境内を公園となせり此地静岡縣廳の在る所にして東京名古屋の中間に位し地方商業の中心たり漆器竹器製紙の業盛にして又茶の栽培に適す

●焼津 は静岡の西に在り日本武尊の叢雲の劍を揮ひ草を薙ぎ賊の火攻を免れたまひし地にして史上に著る大井川は天龍川に亞く大河にして駿遠の境をあす平時は殆んど河礫のみあれども霖雨の頃には時々氾濫の恐れあり昔日の蓮臺越は話のみ残りて今は橋梁を架す

●富士山 は甲駿の境上にある本邦第一の名山に

〇矢矧川 〇燒津 〇静岡市

中村栗園

海有れば則ち波無き能はず又聲無き能はず但だ其聲の鼓を撃つと相似たる者は伊勢の白子浦と爲す浦の鼓を以て名づくるは之れが爲めの故也余其名を聞くこと久しく未だ其地に遊び而して其聲を聞くを得ざるを憾む宮原生白子より來り贊を余が門に執る乃ち携ひて同行し其家に宿す時に三月一竟

地方誌

て海表に直立すること一万二千四百尺餘其圓錐形の山姿は遠く白扇を倒に望むが如し頂上には噴火口あり其周邊は斷崖削立して奇怪名狀し難し其最高峰を劍ヶ峰と云ふ磐澗には盛夏と雖も千古の雪を埋め清泉湧出す金水銀水と稱するもの是れなり裾野には川口山中精進及び本栖等の諸湖あり是等は箱根の蘆湖と合せ所謂八湖の稱あり此の裾野は曾我の復讐を以て殊に名高し富士の西麓に沿ひて南流する所の富士川は日本三急流の一にして屏風岩俵石釣橋等の奇觀あり平家敗軍の蹟を以て史上有名なり其河口は田子の浦にして本道第一の勝地なり古來詩歌多し「田子のあまの宿まで埋むふとの根の雪もひとつに

道海東

也翌日生に導を命じて其浦に至り松に倚て耳を傾け以て鼓聲を聴く是日露雨始めて霽れ而して陰雲未だ霽らず海色冥々舟帆影無く風浪怒號し絶た鼓と類せず余意樂しまざる也生を促して乃ち歸る已にして夜に入て寢に就く夢に波聲を聞く始にして而して舒終にして而して疾、舒ある者は條暢す吉行の疊也疾なる者は礁殺す

○鼓浦

冬は來にけり

信實朝臣

「白波の見る目をそへて植へわたす早苗になひく田子の浦波」 雅成卿

清見瀉 是瀉を以て有名なる興津の海濱を云ふ古清見關の古跡なり東は田子の浦に枕み西は三保の松原清水港及び久能山を眺め北は愛鷹山を隔て、八采の芙蓉を仰瞻す光行が歌に

「清見瀉關とはしらで行人も心ばかりはどいゆをくらん」

とあり

三保の松原 是有波郡の東端に斗出する長洲一帯にして清水港より海上僅か十餘町に過ぎず青松白砂點綴して山海の風景相映し宛も美人亂舞の俤わ

○田子の浦 ○清見瀉 ○三保の松原 三十五

地 方 誌

軍行の櫓也少焉にして温
變して疊と爲り疊變して
搗と爲る珠玉盤に落つる
如く鐵騎の往來する如く
鞞鏑鏑鏑沙清越或は繁
く或は稀に錯雜して而し
て出づ又弦匏笙簧以て其
曲調を助くる如き者有り
而して皆亦濤聲之れをし
て然らしむる也俄然とし
て覺む餘音猶ほ耳に在り
奇と謂ふ可し矣嗚呼余此
聲を聞く也寤に於てせず

三十六
り後鳥羽院の歌に清見瀉ふとの煙や消へぬらん月
影みがく三保の浦松藤原冬隆朝臣の歌に清見瀉
山寺は暮初めて入日残れる三保の松原の古歌あり
松林中に御穂神社ありろの東南に一老松あり高サ
凡九丈餘樹下羽衣松の一碑あり夫の漁翁伯良の爲
に秘曲を演じたる天女が羽衣を掛し松ありと傳ふ
能因法師の歌に有波濱に天の羽衣昔しきて振けん
袖やけふのはふり子とあり
(清水港)は清見瀉の南方にあり船舶の出入多く駿河第
一の良港なり沼津は國の東方にあり海濱を千本濱と
いふ青松白砂相映じて風光明媚なり條内に沼津城址
あり

東 海 道

而して夢に於てし畫に在
らず而して夜に在りしは
何ぞ耶蓋し海若陽侯余が
文を得て之れを記せんと
欲し夜間人定まり睡中心
静まりし時に當りて故
らに波濤を鼓して以て之
れを聞かしむる歟抑も亦
偶然歟記して以て海若に
問ふ

天龍峽の記

阪谷朗廬

○天龍峽の記

甲 斐

甲斐は四面皆山を繞らし國內亦山多し地勢頗る峻峻
にして東西に分る東方一帯を郡内といふ河水皆流れ
て相摸に入る西方は稍平坦ある地にして河水皆富士
川に注入す

(鵜澤)は富士川の岸にあり駿河の岩淵に下るの要津あり
(甲府市)は笛吹川の流域にありて國の中部に位す山梨
縣廳の所在地あり甲府の東甲州街道に勝沼あり其北
東に天目山あり武田勝頼滅亡の故事を以て知らる勝
沼を下り馬入川の谷に有名なる猿橋あり兩岸は斷崖
絶壁にして溪谷の深さ數十丈昔時は此の橋を架する

○甲府市

余諏訪湖の明秀を愛し天龍河の南に沿ふて下る阿山堵壁の如く峯然天を摩し中間は阻夷にして、邑居田圃高底相接す、心甚だ其形勢を異とす既に飯田に入る、故人丸山仲肅の家に宿る、席間傍近の山水を叩く仲肅曰く、子何そ一勞を憚つて佳山水に負くに忍びんやと、乃ち勉めて其勝を探る、行くこと二里ばかり郷醫關島氏を訪ふ主人

に一柱を携へざりしが今は三柱を支ふ甲府の西南に身延あり日蓮宗の本山なり國中一体養蠶織の業盛にして地味又最も葡萄の栽培に適し甲斐絹甲州葡萄の名夙に高し又水晶は此の國の特産にして他に比類あり

伊豆

伊豆は箱根以南に當り遠く洋中に斗出して相模灘と駿河灣とを東西に分つ所の半島をいふ國中に火山脈蟠屈して南方豆南諸島を起す故に國中平坦の地極めて樹く温泉の湧出する所極めて多し國の中央に聳ゆる天城山は半島第一の大岳にして良材薪炭に富み又建築用の石材を産す天城山の南麓を過ぎ殆んど國の

眞率喜ふべし、導いて峽口に至る、百丈の斷崖折逕して斧劈の如し平遠の水、此に至り、巖に巖岩の爲めに窄めらる奮騰湍湫銳鋒、ふ所石皆辟易す猶怒りに勝へざれば往々倒に流る主人延いて大石上に踞す須臾にして童見四五輩喧吼して來る瓢を負ふものあり、壺を提ぐる者あり、釣具を持する者あり、火を扇ぎ水を汲み茶臼興を興く

○天龍峽の記

南端に下田港あり米國の使館ペルリの渡來せし地にしてその名史上に著はる

國中の大河を狩野川とす其邊傍に歴史上有名なる菰山修善寺等あり南端石廊崎に燈臺の設けあり熱海は相州小田原より凡七里餘の海岸にある浴場にして三方山を環らし東一面は海に瀕し半月形の港をなす左を横磯と云ひ右を魚見崎と云ふ前面に和島の一嶼を含んで山水の風景殊に趣を添へ奇景名勝少からず所謂熱海八景なる者古來詩家歌人の吟咏して嘆賞せしものあり(八景とは梅園の春曉、來宮の杜鵑、温泉寺の古松、横磯の晚涼、初島の漁火、錦浦の秋月、魚見崎の歸帆、和田山の暮雪)にして就中奇景あるは錦浦とす

○熱海

余試に綸を垂る底深くして流急なり釣を受けず遂に竿を投じ、攀援して進む崖益高く岩益偉あり、峽勢又益逼仄し、緑樹横に生じ、緋ふるに松竹を以てす、鬚として影を水中に倒す水受けて之を蕩かし、潭とあり瀬と爲り、鞆と鼓奏す、水碧に岸碧に草樹皆碧あり仰いで頭上を望めば天亦蜿蜒として一碧流とある、時に躑躅花盛に開く

豆南諸島及び小笠原群島は本道の屬島にして東京市の管轄に屬す、豆南諸島は伊豆半島の南方太平洋に現出したるものにして海岸より南方百哩の間に碁布す、其最も大なるものを大島といふ、其西南には利島新島三宅島及び御倉島あり、又其南方には八丈島を以て有名ある、八丈島あり、豆南諸島の南方に當り、死んば熱帯地方に近き所に小笠原群島あり、凡そ三百年前小笠原貞頼の發見せしものにして、就中父島母島を大ありとす

武 藏

武藏は北東は利根川及び其支流江戸川南は多摩川(又は六郷川)を界として中央は荒川隅田川の諸流之れを貫通し、關東平野の大部を占め、東南の一部東京灣に面す、地味沃饒頗る運輸交通の便あり

瀧峽亂點、混朱を著くるか如し、景一も盡くべからざる、さく、而して盡も亦及ばざるものあり、會々老翁あり岩下に漁す、斑白偏儂亦畫圖中の物あり呼んで籃を窺へば小魚僅に二三尾乞へば、輒ち之を與ふ乃ち崖上の最高處を指し、童兒に命じ、地を掃ひ席を設けしめ、更に椀茶を開き勝を求む、峽已に幾轉し、變態百出、氣象も亦蕭條前崖の一

貫通し、關東平野の大部を占め、東南の一部東京灣に面す、地味沃饒頗る運輸交通の便あり (東京市)は關東八州の中央にありて隅田川其東部を貫流し、南東京灣に臨む地勢最も平坦あり、此の地舊と江戸と稱し、昔武藏野原と稱し、所謂草より出で、草に入る武藏野の月と咏まれし、茫々たる荒原に過ぎざりしが、凡そ三百年前徳川家康覇府を此地に開きてより以來昔の像を留めず、明治元年始めて車駕を此地に駐め給ひしより東京と改稱し、帝國第一の都會とあり、商工業の一大中心たり、皇居は市の中央に在り、繞らすに溝渠を以てし、内廓外廓に分つ、鬱蒼たる老松宮城を護り、翠色滴たらんとす、諸官衙帝國議事堂等其附近にあり、市は地勢に従て更

○天龍峽の記

○東京市

地方誌

巨岩潭底より拔起し、直立數十丈、高く崖上に出づ古松を築り翠壁を帯び、筋骨倒に張り、勢雲を穿たんと欲す、我依る所の岩壁も亦葉穉猗たり、而して目睫の觀轉じて全形を窮むる能はず殊に惜むべしと爲す下流を回瞻すれば、峽勢宛轉窮つて亦通す又奇盡すべからざるなり、再び崖上に登れば、童兒待つこと久し、魚を炙り杯を傳ふ且眺

に之を山の手下町に大別す山の手は市の西北部に位し稍高燥の地にして廻町赤坂小石川本郷等の諸區之れに屬し下町は市の東南部に在る低地にして京橋日本橋神田等の諸區之れに屬す而して商業の最も繁盛なるは下町とす殊に新橋より京橋日本橋を経て万世橋に至る間は肆店櫛比して往來織るが如し隅田川以東の平地は本所深川の兩區にして永代兩國吾妻厩橋等によりて其西部と相連る

東京はまた我國學藝の中心にして東京帝國大學第一高等學校及び高等師範學校は此所に在り其他各種の專門學校圖書館博物館等一も備らざるなし殊に私立學校は枚舉に遑まらず産物は織物マツチ錦給龍甲細工淺草海苔等あり

東海道

め且飲む主人日影を願て歸るを促す余猶戀々回顧す其家に歸れば日は全く没せり、夜話峽に及ぶ主人曰く、地秋葉山を距る二十餘里、峽勢連亘其奇往々今日觀る所の如し但危險絶特已むを得ざるにあらざれば舟楫を通せず古來數々々々鑿開の説あり、而して竟に行ふ能はざるあり是より先き、峽名未だ定まらず余以爲く川既に天龍と名

○天龍挾の記

公園の名高きものは淺草上野芝及び九段とす其他遊覽の地には隅田川飛鳥山の櫻龜戸の梅瀧野川の紅葉等市の内外にありて最も著はる

驛路は四宿の地を経て四方に通す即ち東海道は品川を甲州街道は内藤新橋を奥羽街道は千住中仙道は板橋よりす然れども現今交通運輸は専ら鐵道の便に依る東海鐵道は新橋より起りて京坂に通じ甲武鐵道は飯田町より起りて八王寺川越等に通ず中仙道鐵道及び東北鐵道は上野を發して北陸及び奥羽に通じ總武鐵道は本所を發して銚子に至る故に四方の貨物殊に關八州中仙道及び奥羽地方の産物は一旦此地に輻輳し商賈交通最も盛んなり

王子村は東京の北にあり近郊の勝地にして土地

○東京近郊の勝地

づく、盛稱比あし別に名を
擇ふを用おす、且峽の魁奇
なる彼が如し、安子川の峽
に由つて名を得而して其
本を失ひしにあらざるを
知らんやと、因つて定めて
天龍峽と稱すといふ、弘化
丁未四月小盡日に遊ひ遊
後一日記す

紀行

太田南畝

長月未なりける頃、官務の

最も静閑あり瀧の川の楓樹不動の瀧名主の瀧あり
て四季の賞遊に富めり
品川は東京の西にあり有名なる泉岳寺は赤穂義
士の遺蹟を勒す又涌雲寺は紅葉の名所にして古へ
櫻花の勝地ありし御殿山等あり又其近傍に勝地抄
なからず大森には昔し八景坂の稱ありし八景園及
び行方彈正が花園の舊地たりし蒲田の梅林あり又
其西南池上には日蓮上人遷化の舊跡と稱して有名
ある本門寺あり世に名高き淺草海苔は實に此地よ
り産出す其他矢口の波は新田義興の故事を以て知
られ生麥村は薩藩の士英人を斬殺せしを以て聞ゆ
(横濱市)は東京の西南七里にあり本邦第一の開港場に
して東京より汽車は一時間にして達するを得べし本

東海道の

ために参河遠江の國大井
天龍川の堤普請の役に罷
りて彼二つの大川に沿ひ
ける村里をわひみて、中
も天龍川は東西深山にい
たりて見れば空おそろし
き禿山の崖に舟をろねて
終日落葉川を往來して夕
には霜を踏んで明る曉に
は有明の寒月を眺め漸々
二十日あまりをして、池田
といへる里に着して、しば
し此程のつかれをいとは

○紀行

○横濱市 ○大宮

牧師港の東南を擁し神奈川は本港の東北に接す背後
園むに丘陵を以てす北部は商家櫛比し西に伊勢山公
園あり又山の手一帯は幽趣にして風光に富めり
此地元と海濱の一小漁村に過ぎざりしが安政年間互
市場となし外人に居住を許せしより以來内外の船舶
常に出入し百般の貨物輻輳し今日の如き繁華を極む
るに至れり
(浦和)は東京の北に當れる驛路にして東京上野より瀧
車四十五分程の所にあり埼玉縣廳の所在地なり公園
は驛の南端にあり森林蒼鬱として頗る幽静なり又西
北に興野の公園あり地は一丘陵を爲して眺望佳絶な
り
大宮は東京近傍の勝地にして武蔵總鎮守と仰く

地 方 誌

すある夕暮のいとつれづれある頃、思はず筆とり案るに松吹く風のすげあく耳にさへぎりてまた明ぬれば山鳩の梢に啼けるさみしさに、我故郷も程遠く旅寝心もうつくと、寒き日すがをおくるこそ、誠に官務のためならむか、唯うきどもかきしども、もの哀れどもおもはれて、さあがらにひなびたる田家のさまもすこしは風流のはし

氷川神社は此地にあり今は境内を以て公園とす社の前面に古池ありみはらしの池と呼ぶ境内岡陵起伏し松杉繁茂す夏時納涼燈籠を以て其名高し
(八王子)は東京の西に當り甲州街道の一都會にして製絲及び機械の業盛んあり青梅には石灰を産し川越及び熊谷は武蔵の商區たり其他府中には多摩川と井の頭の池あり
●小金井 は多摩川上水堀兩岸の芝地に在りて櫻樹連亘す花時爛熳の時小金井橋より眺望すれば雲か雪かと疑はれ一目千里前後盡くる所を知らず千蔭翁の歌に聞わたる天の河原か咲花の雲の中行く水のひとすぢとあり此地昔し享保年間川崎定孝ある者台命を奉じ大和吉野山より移植せしといふ近傍

東 海 道

ともいふべけれ手敷島の道はしらねども、そゝろ心にうかみければ松風の音さくにだにもあちさきさうき世のたびに日かすかさねて弘仁の頃、後醍醐天皇にみし執權北條高時の咎によりて俊基朝臣關東へぞ下されしとき、警固の武士をかづけ、所の名を問ひたまふに、菊川と答へけるひかし承久の亂に、光近關

○紀 行

○小金井 ○鎌 倉

四十七

境の深大寺蕎麥は其名高し

相 摸

相摸は西方に箱根の諸山を控へ南は相摸灘に臨む(大船)は横濱を西に距ること瀛車半時間の地にあり東海道鐵道は是れより一支線を三浦半島に分派し南横須賀に至る
(鎌倉)は三浦半島の西北に在りて三面丘陵を以て圍繞し前には相摸灘を控へ其切通は舊時の要害たり昔源頼朝覇府を此地に開きしより以來源氏北條氏執政の地あるを以て名勝古跡頗る多く鶴ヶ岡八幡建長寺圓覺寺壽福寺等の有名なる社寺尙ほ存す其他著名あるものは頼朝館崎畠山重忠宅趾高時一門の滅亡せし葛

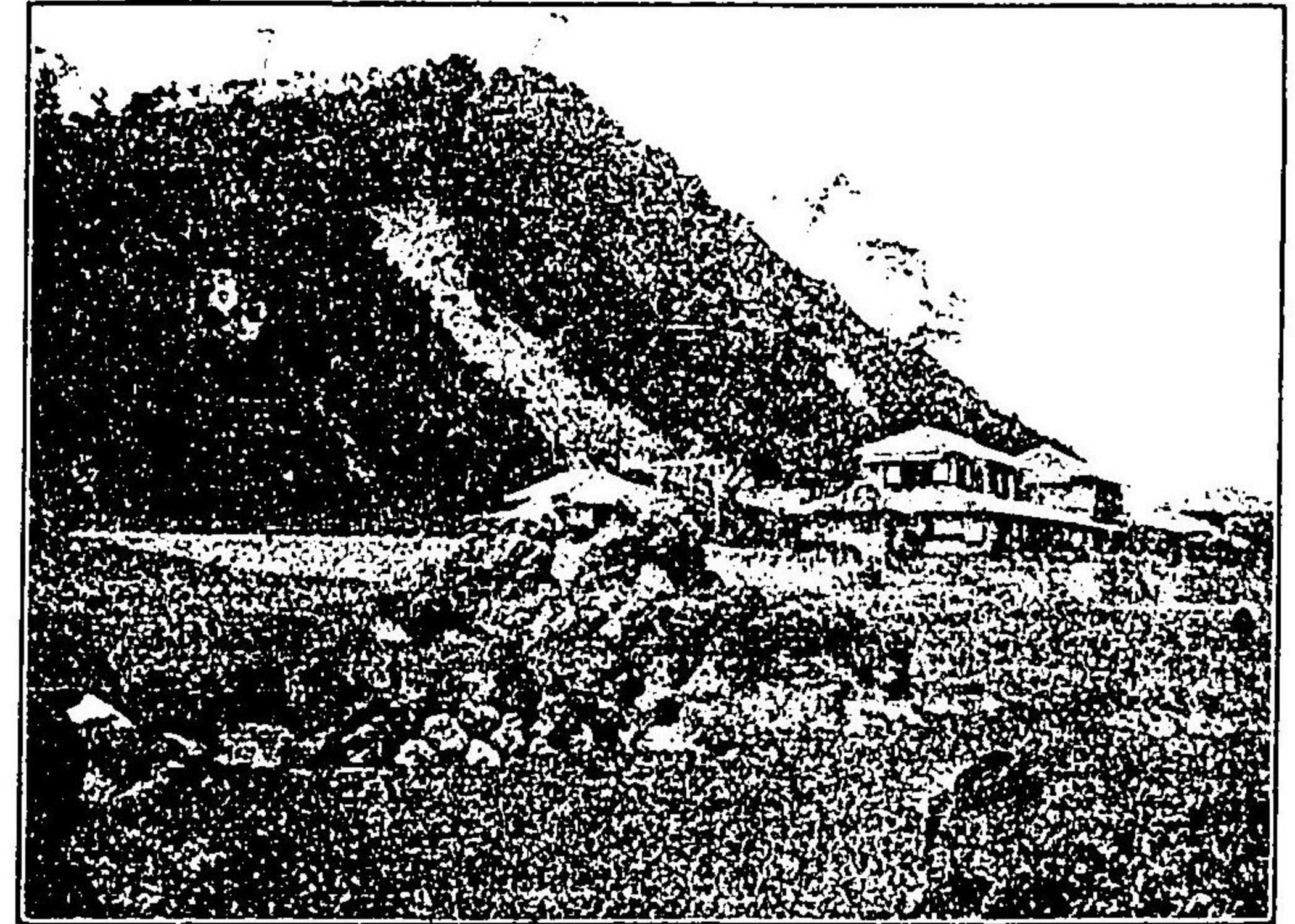
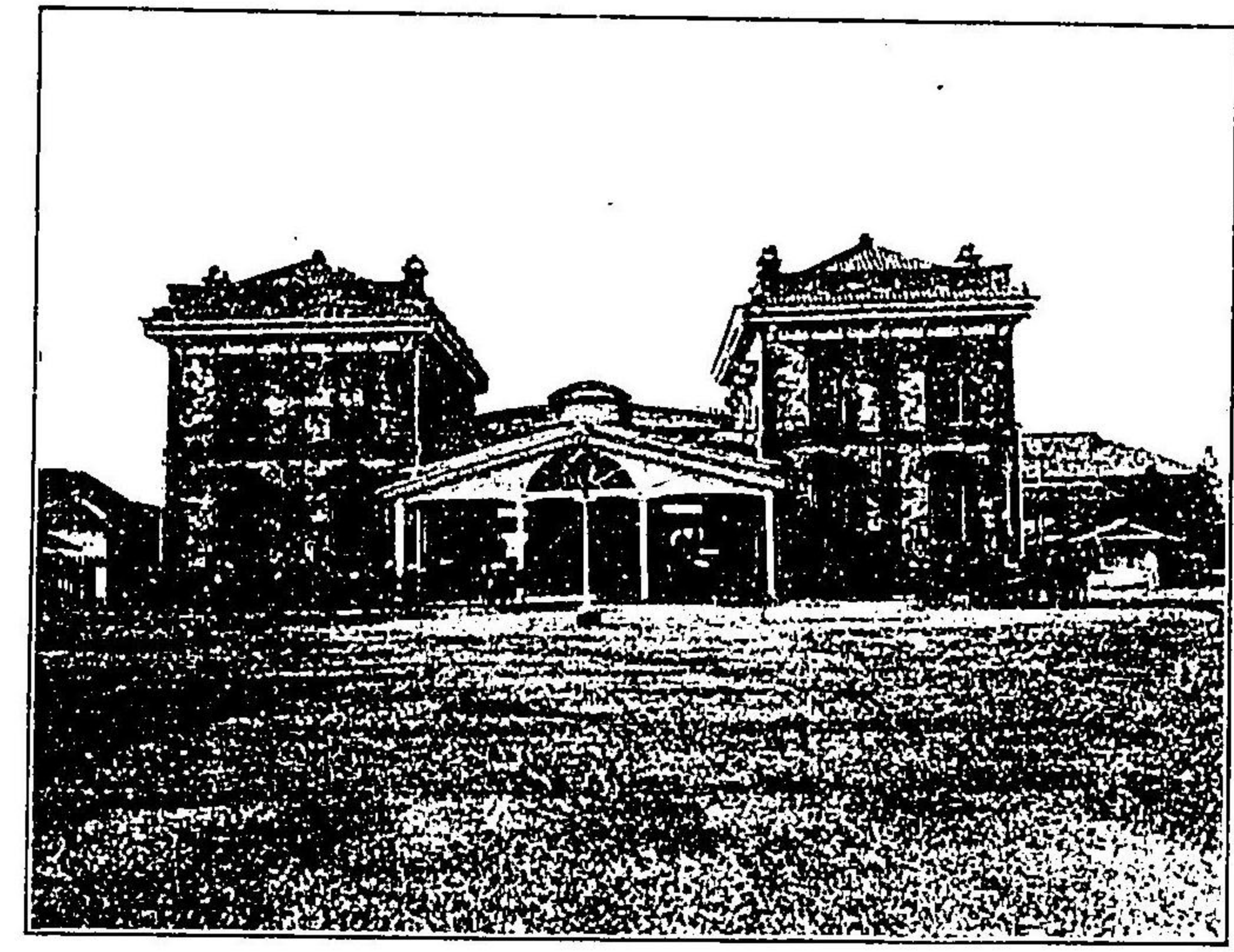
地 方 誌

東へぞ下されしが、此宿に
と討せられし事を思ひあ
はされてや、

いにしへもかゝるため
しを菊川のおきしなが
れに身をやしつめひ、
と矢立出し宿の柱に書れ
たりと聞けるが此程冬半
なりける頃、官務の爲に此
菊川を旅行し荒果まさる
暇が臥家を見るにつけて
むかしを思ひ出てければ
おもひさや名にろむか

西谷安國寺(日蓮上人の立正安國論を書せし所)新田義
貞の北條攻伐の時刀を海上に投せし稻村崎鎌倉五名
水足利直義が誠良親王を幽閉せし土窟あり山井ヶ濱
暇越亦史上に名高し

(江之島)は鎌倉の西凡二里の海岸にあり藤澤より一條
の沙路と通つて片瀬に至る巖巖絶壁の孤島にして中
に辨財天を安置す遙かに富士箱根天城の諸山を雲際
に望み風景佳絶なり産物は貝細工及び鮑とす
(横須賀)は鎌倉を距る南東汽車三分の所に在りて東
京灣に臨む東洋第一の造船場あり海軍鎮守府の所在
地たり驛中家康に厩ゐられたる英人アダムスの墓あり
(浦賀港)は横須賀の南方數里にあり亞米利加軍艦始め



東 海 道

しを菊川の冬枯れまさ
る夕暮の里、
又うつ山葛の細道は名
所ありければ
冬深き葛の細道踏わけ
て夢路たえざるうつの
山越

駿河路

香川景樹

十一日吉原を出づ河原宿
よりかへり見れば富士の
嶺曇りあしすべて山足東

○駿河路

て我國に來りし所あるを以て開國の史上に著名あり
其東端觀音崎は房總半島の富津崎と相對し東京灣の
咽喉を扼する要害の地にして殊に砲臺の設けあり。
大磯 は海水浴に宜し此地昔し鎌倉の盛時には歌
吹絃舞の繁華地にして亦古跡に富む其鳴立澤は西
行法師奥州へ赴く時此地を過ぎて心なき身にも
あはれはしられけり鳴立澤の秋の夕暮の古歌を殘
せし有名の地なり

(小田原)は北條九十五年間の金城にして今猶ほ太閤御
陣所は青松林立して其跡を殘せり有名なる産物は梅
干鹽辛砂糖漬とす西に箱根山あり山中温泉多し其重
あるものは湯本塔之澤、堂ヶ島、宮之下、底倉、木賀、蘆之湯
小涌谷湯之花澤姥子仙石原是れあり

○江の島

地方地誌

西に踏み開きうち靡きたる裾野まで端山繁山さばりあつく残るくまあく見えわたれば此わたりより中郷までの間なるべしさてうるひ川藜原とくるば又立ちかくしたり
大方は雪と雲とにうづもれぬあまりに高き富士の山かな
人もかくころあらめ吹上にくれば田子の浦見えわたる坂中の榜木に今朝散

箱根嶺 是東海道中の難處と稱せられ箱根驛は古來繁華ありしが今は寂寥となり唯内外人の避暑に來るものあるのみ山中名勝多く塔之澤の霧深堂ヶ島の白糸の瀧底倉の阿字ヶ池大涌谷の千條の瀧等殊に著名あり
蘆の湖 是東西二十町南北一里十三町周四里餘其水流溢れて早川とある湖中に一の半島あり塔ヶ島といふ今箱根離宮のある所あり名高き箱根の倒富士ありて風景畫圖の如し又早川の下流早川尻に細川幽齋のみろきせし袖ころ濡るれ老の浪移る月日も早川の瀬にと詠せし所紅葉の名勝たる長興山玉垂の瀧等あり

東海道

りし甲斐の落葉や田子の浦といへる芭蕉の句を書きつけたり其落葉とも見るばかり數の釣舟ちり亂れたるいはん方なし蒲原を過ぎて由比にとまるさて此家の庭さきなる汀の松あそよくよく見ればくだりつる時あまり破きは波騒がしとてやせりあへず立ち出でし宿なりさるはかたはらいたく面ふせなる心地すれどかれは

○紀行

○箱根嶺

安房

安房は所謂總房半島の南端に位する一小國なり北は鋸山清澄山等西より東に走りて國境を劃す其極端に野島崎の燈臺あり洲崎は相摸の三崎と相對して東京灣の門をなす富山は馬琴の八犬傳を以て其名殊に著はる
(館山、北條)は此國の名邑なり西に館山灣を控へ殊に海水浴に名あり此地は漁獵最も盛んにして鯉鮪鱸の水産物に富み毎日之れを館山近傍より東京に輸送す又房州砂石材及び木材を産出す

上總

地 方 誌

得見知らず
 契を或由比の濱松かへ
 り来て立ちよる陸の波
 を見るかき
 はたして今宵振られぬば
 ひる見れど飽かぬ田子の
 浦といひし古人の心をも
 思ひ出でられて、やをら起
 き出で、見るに、月はいつ
 くよりさすらん、波の上と
 ころくおぼるに白く、見
 かねぬけしきめづらしき
 物からいとすさき心地す

上総は總房半島の北部を占め東岸は所謂九十九里濱にして西方一帯東京灣を控ゆ其灣口に富津洲斗出し長サ三里餘に及ぶ此洲潮満れば隠れて見えす故に陸洲といふ浮標を置きて行舟に便す軍事上要害の處たるを以て砲臺を設く木更津は上総の要津なれども遠淺にして船舶の出入に便ならず

下 總

下總は北及び西は一帯利根川及江戸川を隔て國境を劃し關東平野の一部を占め頗る運輸漕漕の便に富む(千葉)は東京本所より瀛車一時間を経ずして達するを得べし千葉縣廳の所在地にして第一高等學校醫學部の設けあり又千葉神社猪の鼻台あり南端寒川に君待

東 海 道

れば引きたて、入りぬい
 よく目も合はす
 わらためていかに枕を
 由比の濱春より高き波
 の音かき
 十二月朝とく出で、由比
 川をわたり寺尾の松原を
 過ぎて薩摩山にかゝる、伊
 豆の海はるかに日影には
 ひわたれり、弓手の方を見
 れば磯山陸の上より
 さやかにあらはれそ
 めし富士の嶺にさしむ

○駿河路

橋あり藤原實方が陸奥へ流るゝ時寒川や思が浦にたつ煙り君をまつ橋身にぞ知らるゝと詠みしを以て其名世に高し又治承年間千葉介常胤源頼朝を此橋上に迎へたりといふ
 (佐倉)は國內屈指の名邑にして元と堀田氏の城邑なり現時師團の設けあり將門山には平將門の築きたる城址、公津村には宗吾の靈堂あり
 (成田)は佐倉及び千葉を経て東京に通ずる瀛車の便あり不動堂あるを以て市街頗る殷賑を極む
 (市川)は江戸川に臨める都會にして國府縣の下に在り東京を距る三里あり教導團の設けあり小金原あり其習志野は明治六年陸軍演習の際 主上の命名し玉一

○千葉

地 方 誌

かひたる朝づく日かな
おのれ麓を臨みていはく
關の昔もなつかしきに、い
ざ彼見ゆる磯邊におりて
岩根づたひの古道を行か
んはいかに荷負へる男が
いはく、さらばあどある倉
深よりこそおろし給ふべ
れ、目の下にこそ見え侍れ
此峠よりくだる事はいと
難かあるわざにてもとよ
りさる道も侍らず、よしや
おろし立ち給ふとも親知ら

五十四
●●●●● 國府臺 は江戸川東岸の岡陵をいふ斷崖直に水際
に壁立して古松之れを點綴し鐘ヶ淵羅漢井等の名
今尚ほ存す此地は太田道灌の陣して土寇を平らげ
又足利義明の北條氏と戦ひし有名の古戦場あり其
他真間の浦真原の織橋等ありて古歌多し万葉集に
歌あり、あのかとせず行かむ駒もか葛飾の真間の織
橋やす通はむ然れども今は唯その名のみ存せり
(銚子)は國の南端利根川口に在り總武鐵道に依りて東
京に達するを得べく利根及び其下流の湖沼に依りて
各地に通ずる便あるを以て船舶貨物輻輳し布況頗る
繁華なり銚子船は其名世に高し其極端犬吠ヶ岬に燈
臺あり西南九十九里濱は鰯を以て有名なり其他流山
は味淋を出し野田は醬油を産し行徳は鹽を以て利城

東 海 道

すのあたりは此ほここえ
入り侍りて、つたひ行くこ
どいとからく侍りおん、お
のれいはく、さてこそは關
もる波のかひはありけれ
いざやまづ分け試みんと
て荷おせ物せさせて孝一
をば先へ道はし、節は親民
二人をひきゐて、たうちに
踏みくだる、小松高がや、限
りもあく茂りあだりて更
に道あきものから、けはし
くもけはしければ、さるし

○駿河路

は袖を以て何れも有名あり殊に佐原は地學の泰斗伊
能忠敬翁の生地あるを以て世に知らる
印幡沼は國の北部にあり東西凡二里南北凡そ七里周
回四十有二里沿岸の風景佳絶なり
常 陸
常陸は東海道の東北端にして利根川以北に在り東一
帯鹿島灘に面す地勢一般に平坦されども北部は山岳
重疊す
筑波山 は平野の際に聳え男体女体の双峰あり此
山關東八州平遠の間に屹立するを以て大に名を知
らるその霞浦は一大湖にして東西七里南北七里其
周回三十六里に及べり是れ近江琵琶湖に亞くもの

○國府臺

地 方 誌

げみにさはりつゝも一人
ですべり行く、手も顔もか
きさきて、いとたへがたき
中に、うめき出でたる
岩木山まどへるかづら
とりすがり苦しき目に
もかゝる富士の嶽
また取りたる力草のさど
かそれを見れば藤袴あり
藤袴たれぬぎすてゝく
だりけん我のみと思ふ
山のとかげに、
くだるまに、何にやら

本邦第二の湖なり

(水戸市)は關東平野の北端にありて那珂川に臨み南に
千波沼を擁し湊磯濱を距る三里に位す徳川三家の一
ある水戸侯の舊城地にして市を上市下市の二に分つ
茨城縣廳の在る所なり常盤公園は元と借樂園と稱し
日本三公園の一なり西南常盤村に在り徳川齊昭の初
めて開きしものにして烈公の遊息所たりし樂壽樓好
文亭阿陋庵等あり第二公園は元と弘道館の在りし所
にして上市三の丸にあり大洗海水浴場は東三里に在
り後山に大洗磯崎神社あり白砂青松の間に鹿島灘を
望み縣下第一の勝區とす煙草葛藟砥石及び寒水石は
名産あり水戸鐵道は下野の小山に至り東北鐵道に接
續す

東 山 道

ん、針ある木のしもと原に
してあらゆる葛はひまと
ひ、しがらみかくる小男鹿
の胸わけするに似たり、節
さきにすゝみて刀もて切
り拂ふ、もとより踏みし跡
もなければ、おのがむきむ
きかりわかれて、をりく
に互に呼びかはすめり其
聲も聞えずあれ、ば、もし
麓の崖路を踏みおとして
波にもやおぼれつらん、お
と思ひすぐすに、いと恐る

○駿河路

○水戸市

○東山道地方

(湊)は那珂川口にあり汽船の便によりて水戸市と相通
ず久慈は久慈川口に在り土浦は霞ヶ浦の西北岸に臨
める都會にして水戸鐵道の途に當る其他笠間下館亦
名邑なり平瀧は國の最北に在る要港なり
東海道の氣候は概ね温和にして寒暖宜しきを得たり
極暑凡三十四度極寒零下四度(攝氏)にして伊勢遠江伊
豆の諸國は南に斗出するを以て稍暖なり

東山道は本州の中央部より長く東北に延び東海道の
背に當る至道山岳多くして土地高し大河は皆源を此
の地に發して四方に流る本道の南部に在りて東西に
横はり海に面せざる地方を中山道と稱し北部にあり

地 方 誌

しままでなりぬれば、さて止まんやとば、猶すゝみくたる麓より節呼ばひて、むげにけはしく侍れば、わづかにしておろさる事か、ない侍らずといふ聲、波と共に響きたり飛び下りんは、いかにく、いなやわづかといへど猶一二丈も侍るべし、太刀佩きながら、さはめてあやまち侍らんと云ふ、あかねたしや、何かは來りけん

て南北に横はるものは奥羽の地にして東西北の三面海に臨む北端は津輕海峡を経て北海道に對し北部の西方は日本海に面し其東方と渺茫たる太平洋に洗はる

近 江

近江は關ヶ原以西の地にして四圍山岳を以て繞れり中央琵琶湖畔は稍平野をさせり周圍六十餘里本邦第一の湖あり昔し孝靈天皇の御宇一夜にして開け同時に富士山を湧出すと湖水は風致に富み中に竹生島沖の島嶼、多景の四島ありて、漁船の往來繁く交通、便利なり此湖四周の水を集めて之れを西南に送る乃ち勢田川にして其水流れて山城に入り宇治川と稱せらる

東 海 道

磯ぎはにかりたちかねて白波のかへるう田子のうらみなりけるさらばとて踏みかへすも猶やすからず、今は草鞋の底もことごとくぬけて、いと踏みしめがたきを、ねんじつ、這ひのぼるに、岡めく處あり、皆そこにつとひふして息つきあへり、此日頃わがよむ歌を聞き、のまに、書いつけたりしを今のさわぎに落しけん見

○駿河路

五郎餅又紅葉餅と稱するもの此湖に生じて其名高し(大津)は後は逢坂山を負ひ前は琵琶湖に臨む名古屋敦賀及び大坂の殆んど中央に位し京都を距る儘に三里滋賀縣廳の所在地たり湖上漁船の往來繁く東海道鐵道の線路に當り且つ疏水の便に依り京都と相通するを以て水陸共に運輸の便に富む

近江八景 は大津の近傍に在り八景とは石山秋月 勢田長橋、粟津晴嵐、矢橋歸帆、三井寺晚鐘、堅田落雁、比良暮雪なり矢橋は草津の西一里程にあり晚帆霞にこめられて歸るさま美景あり故に入景の中に入る粟津ヶ原は膳所より勢田橋本に至る街道の松原を云ふ八景の一にして義仲の戦死したる有名古戰場あり此地翠松一帯道を挟み清漪輕く岸を打ち晴

○琵琶湖○大津○近江八景

地方誌

えすきりぬとて、もすその
たそりまで拂ひさがして
節

をしきか山邊海邊に
よみためし敷も白玉た
れか拾はん

あかねたしといへどもか
ひなしさてまみれたる血
をふき、汗かきのこひあゆ
ひ引きしめて、やうくも
どの道にのぼりくれば時
は午のさがりなり、わづか
の上り下りにあたら時を

嵐翔するに堪へたり藤原信尹の歌に雲はらふ嵐に
つれて百船千船も浪の粟津にぞよる」と以てその好
景を知るべし

瀬田長橋は瀬田川に架せる橋にして亦八景の一か
り藤原信尹の歌に露時雨もる山遠くすぎ来つゝ夕
日のわたる勢田の長橋又芭蕉の句に五月雨にかく
れぬものや瀬田の橋とありその風景の佳絶あるを
見るべし

石山寺は亦八景の一にして怪岩奇石名狀すべから
ず東に瀬田川を一瞰し山寺の幽邃真に仙境の如し
紫式部の源氏物語を書たる所なり寶塔の東に月見
堂あり秋霜觀月の處とす瀬田夕照矢橋歸帆眉睫の
間に映じ眺望頗る佳なり藤原信尹はまた石山や嶋

東山道

も過しにけりな、いとふぞ
かりしわさかき、孝一やい
かに待ちわびんいざと急
き下りて、興津川を渡りく
れば孝一待ちつけて、やか
てこゝある茶店に入りて
查飯さども、南面うち
ひらけて三保の松原前に
つらかり磯の巖に鶴の翅
ほせるなど、わざとならず
面白さわたりなり、鹿崎の
こぬみの濱とよゆりしも
此ほどりあるべし彌生三

○駿河路

の海こる月影は明石も須磨もほかならぬかはと詠
めり蓋し琵琶湖を嶋の海といへばなり
三井寺は八景の一にして園城寺と稱す大津の西に
在り寺に上れば近く湖中の景色を臨み遠く勝比
叡比良近江富士一眸の中に見ゆ藤原信尹の歌にお
もふろの曉ちぎる始めぞとまづさく三井の入相の
鐘又芭蕉の句に七景は霧にかくれて三井の鐘とわ
り
唐崎の松は八景の一にして湖の西岸辛崎にあり大
津より一里餘枝葉殆んど百坪の地上を蔽ふて湖面
に映じ頗る奇觀あり天正年間新庄直頼の裁へたる
ものありと藤原信尹はまた夜の雨に音をゆづりて
夕嵐をよりにそ立る唐崎の松と詠めり

地方誌

えすきりぬとて、もすその
たをりまで拂ひさがして
節
をしきかか山邊海邊に
よみためし數も白玉た
れか拾はん
あかねたしといへどもか
ひなしさてまみれたる血
をふき、汗かきのこひあゆ
ひ引きしめて、やうくも
どの道にのぼりくれば時
は午のさがりなり、わづか
の上り下りにあたら時を

嵐翔するに堪へたり藤原信尹の歌に雲はらふ嵐に
つれて百船千船も浪の粟津にぞよると以てうの好
景を知るべし
瀬田長橋は瀬田川に架せる橋にして亦八景の一か
り藤原信尹の歌に露時雨もる山遠くすぎ來つ夕
日のわたる勢田の長橋又芭蕉の句に五月雨にかく
れぬものや瀬田の橋とありその風景の佳絶あるを
見るべし
石山寺は亦八景の一にして怪岩奇石名状すべから
ず東に瀬田川を一瞰し山寺の幽邃真に仙境の如し
紫式部の源氏物語を書たる所なり寶塔の東に月見
堂あり秋霞觀月の處とす瀬田夕照矢橋歸帆眉睫の
間に映じ眺望頗る佳なり藤原信尹はまた石山や尚

東山道

も過しにけりな、いとおぞ
かりしわざかき、孝一やい
かに待らわびんいざと急
き下りて、興津川を渡りく
れば孝一待ちつけて、やか
てこゝある茶店に入りて
晝飯さぞものす、南面うち
ひらけて三保の松原前に
つらかり磯の巖に鶴の翅
ほせるなど、わざとならず
面白きわたりなり、庵崎の
こぬみの濱とよめりしも
此ほどりあるべし彌生三

○駿河路

の海こる月影は明石も須磨もほかならぬかはと詠
めり蓋し琵琶湖を鳩の海といへばなり
三井寺は八景の一にして園城寺と稱す大津の西に
在り寺に上れば近く湖中の景色を臨み遠く瞻比
叡比良近江富士一眸の中に見ゆ藤原信尹の歌にお
もふろの曉ちぎる始めぞとまづさく三井の入相の
鐘又芭蕉の句に七景は霧にかくれて三井の鐘とわ
り
唐崎の松は八景の一にして湖の西岸幸崎にあり大
津より一里餘枝葉殆んど百坪の地上を蔽ふて湖面
に映じ頗る奇觀あり天正年間新庄直頼の栽へたる
ものありと藤原信尹はまた夜の雨に音をゆづりて
夕嵐をよりにそ立る唐崎の松と詠めり

地 方 誌

月の潮干にあひて和布刈り貝拾ふなぞ見ゆ、酒くみしも今の心地ぞす、沖津島鶴のゐるばかり残りけり潮干に見えし磯の岩か根、懸けたる一軸を見れば誠拙大徳の筆あり賊やこたひは世に忍ぶ立ちの急ぎにかゝるあたりへはさべて暇申さしことこの暫しのはさかからいと心苦しさを、今こゝに微風吹幽

堅田亦八景の一にして大津の北三里に在り十数間の堂宇あり岸より湖上に突出す之れを浮見堂といふ芭蕉の句に鎖あけて月さし入れよ浮見堂又信尹の歌に峰あまた越路にまづちかき堅田にちびき落る雁がね、比良山は八景の一にして雪を以て有名あり大津より六里餘春晩白雪を戴きて湖上の景色更に趣を添ふ信尹の歌に雪はるゝ比良の高根の夕碧は花のさかりに過るはるかな此の八景は慶長年間近衛信尹公始めて膳所城の爲に撰ばれしものありといふ鐵道は大津より草津に至り更に關西鐵道に移り國の東南鈴鹿山脈を過ぎ伊勢四日市及び宇治山田に達するを得べし又本線は湖岸に沿ふて八幡愛知川を過ぎ

東 山 道

松と書かれたる一くだりを見るにもひろかに心ばかりはろきたの空になんまた普門律師もいかに思ひこし給ふらん、我を君まつは遙かにへたつれを吹きこゝ通へ三保の浦風、なご、ひとりどたる、今日は思ひがけざる薩陞の山々みに、おのゝつかれ困したればまだ早けれど江尻にやどる

彦根に達す鈴鹿山は國の東南隅に在り高峻あらざれども近江及び伊勢の通路に當り所謂鈴鹿嶺は其坂路を云ふ天武帝の時鈴鹿の關を置けり、(彦根)は草津を去る瀛車時程一時間の所に在り井伊氏三十五万石の舊城地にして城址は金龜山に在り今一部公園とあり樂々園といふ湖岸には藍を産し彦根東南八日市には煙草を出す米原は彦根の北數里に在り越前福井に至る鐵道線路の分岐する所なり縮緬を以て有名ある長濱は米原の北瀛車十五分に在り此邊一般蠶桑の業最盛あり大津と瀛船の航通絶へず余吾湖其北にあり其北方ある賤ヶ岳は柴田羽柴の古戰場あり要するに湖畔は山紫水明の地にして其名殊に著はれ地勢低平にして地味香腹頗る米穀に適す此地は所

○駿河路

富士賦

嵐 蘭

不二^{ふじ}は日本の蓬萊^{ほうらい}山なり
 ひかし孝靈^{こうれい}五年はじめて
 現^まず、徐福^{じよふく}も此山に登りて
 仙藥^{せんやく}を求め、かくや姫^{ひめ}も神
 と化^{くわ}してこゝに靈^{たま}をとい
 む峰^{みね}は八葉^{はつえ}に分れて根^ねは
 四州^{ししゅう}に跨^{また}る道路^{だうぢ}は三口^{さんこう}よ
 り登^{のぼ}りて千筋^{せんすぢ}に分れ裾野^{すそ}は
 東西^{とうせい}に長^{なが}うして百里^{ひゃくり}につ
 らなり形^{かたち}けづりたるが如^{ごと}
 く高^{たか}きこと北斗^{ほくとう}に近^{ちか}し、夜

謂^{いわ}近江^{おうみ}商人^{しょうじん}と稱^{なづ}し行商^{ぎやうじやう}を以^もて名^なあり就^す中八幡^{ちゅうはちまん}日野^{ひの}五
 箇^{くわ}庄^{じやう}を商業^{しょうぎや}繁盛^{はんせい}の地^ちとす姉川^{あねがわ}は北高月^{きたかづき}に至^{いた}る中間^{ちゅうかん}に
 在^ありて織田^{おだ}信長^{のぶなが}の淺井^{あさひ}長政^{ながまさ}と戦^{いくさ}ひし有名^{ゆうめい}の古戦場^{ふるいくさば}な
 り

美濃

美濃^{みの}は鈴鹿^{すずか}山脈^{さんみゃく}及び噺吹^{はなぶき}以東^{いとう}の地^ちにして木曾川^{きそがわ}飛彈^{ひだん}
 川^{がわ}長良川^{ながらがわ}及揖斐^{いづひ}川の灌漑^{くわんがい}地^ちなり勝吹山^{かたぶき}は日本武尊^{やまとたけのみこと}毒
 霧^{どくきり}に中^なりたまひし有名^{ゆうめい}の山^{やま}なり古へ蓬^{よもぎ}を産^うす其南方^{みなみかた}
 の平原^{へいげん}には不破^{ふわ}の關^{せき}あり故^{ゆゑ}に此^{こゝ}の平原^{へいげん}を關^{せき}原^{はら}と
 いふ徳川^{とくがわ}氏^{うぢ}天下^{てんか}分^{ぶん}ク目の古戰場^{ふるいくさば}なり近江^{おうみ}の米原^{こめはら}を距
 ること瀛車^{えいしや}時程^{じじやう}四十五分^{しじゅうごふん}の所^{ところ}に在^あり養老^{やうらう}の瀧^{たき}は平原^{へいげん}
 の南^{みなみ}ある多度^{たど}の山中^{やまなか}に在^あり秋^{あき}に至^{いた}れば楓樹^{かへだけ}錦^{にしん}を敷^しく

東 山 道

陰^{かげ}に旭^{あす}をか^かやかし、夏^{なつ}天^{てん}
 に雪^{ゆき}をいた^{いた}く山間^{やまかた}に海^{うみ}
 をた^たえ、山上^{やまの上}は眞砂^{まじさ}を攀^か
 づ和國^{わこく}異朝^{いしやう}類^{るい}するものあ
 く、三國^{さんこく}名山^{めいさん}と稱^{なづ}して義楚^{ぎそ}
 六帖^{ろくてつ}に甚^ただほめたり、日本^{にっぽん}
 武尊^{ぶそん}は東夷^{とうい}を平^{たい}らげて草^{くさ}
 薙^ひの名^なをあらため、右大將^{みぎだいしやう}
 頼朝^{よりとも}はものゝふをあつめ
 て牧狩^{まきかり}をする鳴澤^{なるさわ}の池^{いけ}は
 俊成^{しゆんせい}の仇名^{あだな}をと^とり、人穴^{ひとあな}の
 奥^{おく}は仁田^{にた}の無分別^{むぶんべつ}さうあ
 り、十郎^{じゅうぢやう}の宮五郎^{みやごぢやう}の社西行^{しゃさいぎやう}

○富士賦

○養老瀧 ○岐阜市

飛 彈

(大垣^{おほがき})は關ヶ原^{せきがはら}の東方^{とうほう}瀛車^{えいしや}時程^{じじやう}一時間^{いちじやうかん}の所^{ところ}に在^あり戸田^{とだ}
 氏の城址^{じやうぢ}あり今公園^{いまこうえん}となる長良川^{ながらがわ}其東^{みなみ}を貫流^{くわんりゅう}し霖雨^{りんう}
 の際^{さい}は屢^{しばしば}ば水害^{みづがひ}を被^かる其西^{みなみ}なる赤坂^{あかざか}は有名^{ゆうめい}なる大理^{だいり}
 石^{いし}の産地^{さんち}たり
 (岐阜市^{ぎふし})は大垣^{おほがき}の東瀛車^{とうえいしや}時程^{じじやう}三十分^{さんじふぶん}餘^{あま}の所^{ところ}に在^あり鶉飼^{うずかい}
 を以^もて有名^{ゆうめい}なる長良川^{ながらがわ}に臨^{のぞ}み東^{ひがし}に稻葉山^{いなばやま}を控^{かま}へ商業^{しょうぎや}
 頗^{おほ}る盛^{さか}なり岐阜縣^{ぎふけん}廳^{へい}を此所^{こゝ}に置^おく稻葉山^{いなばやま}の南麓^{みなみかた}には
 名高^{なかつた}き篠谷^{しのや}の梅林^{ばいりん}あり此國^{こゝのくに}は提灯^{ていとう}團扇^{だんせん}及び縮緬^{ちぢみ}の名
 産^{さん}あり又磁器^{ぢき}陶器^{たうき}及び紙^{かみ}の製出^{せいしゅつ}盛^{さか}んにして且^{かつ}つ水利^{すいり}
 に富^とみ米^{こめ}の産出^{さんしゅつ}殊^{こと}に夥^{おほ}し

飛彈^{ひだん}は地勢^{ちせい}高峻^{かうそん}山岳^{さんかく}重疊^{じゆうたつ}し國中^{くにちゆう}至^{いた}る所連山^{すけんざん}起伏^{きふつ}す而

地方地

は五文字をすへかれ、探幽は墨色にわぐむ、煙は古今の序に二流によまれ、雲は廻船に怖れて一尺八寸の號をどいむ、神定の人其冠に頭をつゝみ下向道は小袖の砂をふるふ、純頂の鯨半腹の雀、巢鷹は大心にして伊豫の松山におとし水鳥の羽音には臆病になつて都の方ににぐる、ふじ海苔不盡灰富士甘草ふじ黄蓍、栗柿松檜の木のたぐ

して信濃の境には飛彈山脈北より南に馳せ、鎗ヶ岳、乗鞍岳及び御嶽の秀峰を起す其支脈國の中部を西より東に連亘するを以て本國は更に南北に兩分するを得べし、南は益山川の沿岸地方にして専ら蠶業製糸に従事し北は宮川の流域にして業農製糸の業盛んあり(高山)は飛驒の山中に位し、岐阜を距ること三十四里にあり宮川之れを貫流す此地は海岸を距ること遠く地高きが故に寒暑の差甚しく降雨又多し高山の北西三里に古川あり古川より神原峠を踰れば北東五里に神原山に接近する船津あり西南には一位の木を以て有名ある位山あり白木の澤布は白山裏に在り水煙朦々高サ測り知るべからず生糸春處達一位組工陶器は此の地の名産なり

東山道

ひ往還は竹の下越根原越關は足柄の關横ばしりの關あら井の渡口佐夜越海を隔て峰を重ね三保清見寺の見越宮根鎌倉の姿、日本、兩國の橋上には馬の人のかうべをめぐらし、赤坂駿河臺には乗り物の窓に眸をさく遠くは朝熊山を限り近くは原よし原のあたりなるべし、諏訪の海には倒の影を浸し甲州の府には三峰に見え

○富士城

又礦物及び木材を産し温泉の湧出する所亦多し

信濃

信濃は中仙道の高地にして飛驒山脈東部の地即ち十州に境する大國なり四周は山岳重疊し一帯の山脈東南八ッ岳より西飛驒山脈に連亘し河流は皆南北に分流する等地形は大に飛驒に似たり北は即ち千曲川及び犀川の流域にして南は木曾川に依りて木曾川及び天龍川の流域に大別せらる千曲川谷國の東北隅を占め東南は一般に高くして北に至るに従ひ漸く低下す北を善光寺平と云ひ南を佐久平といふ(長野市)は犀川と千曲川の合流地所謂善光寺平にありて長野縣廳の所在地たり北は越後に南は武蔵に通ず

○白水の澤 ○長野市

て扇の緒はこゝあるべし
昔より詩歌連俳の句數、あ
はせてこれをつまは、大か
た此山の高さは比せむ
されど古今の用、たゞ一首
秀でたるものは赤人の白
妙なるべし、其餘は此山に
對して万が一にも及ばず
わが翁富士吉野の句一生
おしどかや、東路に赴く人
は、かく成りがたきふじの
詠に心力を勞し又東路に
赴かぬ人はかくあり難き

六十八
る鐵路此所を貫通し東京より九時餘にして達するを
得べく市況頗る繁昌なり有名なる善光寺の大伽藍を
るを以て賽客非常に夥しく爲に此の繁華を來すと云
ふ地勢低平にして地味豊饒米穀に適す犀川及び千曲
川の合流地は即ち川中島にして上杉と武田との古戦
場なり
戸隠山 是長野の西北四里餘に在り山は屹然とし
て東に聳え越中の列岳と奇を争ふ北に妙高山を控
へ中に安曇郡を帶て迤に望めば形基石を敷きたる
が如し全山突兀奇石怪岩を以て成り又三十三の岩
窟ありて奇態云ふべからず此山極めて避暑に妙
るを以て夏期に至れば登山する者多し
(上田)は長野を距る瀛車一時間餘の所にあり養蠶紡績

富士を見ずして一生を終
るも、ともに残り多きこと
なるべし

熱海紀行

横井也有

府君の御母公浴させ給は
んとて延享のことし江戸
より豆州の熱海と云へる
所へ渡らせ給ふ御供仕
まつり葉月の二十九日江
戸を出で熱海に至るは長
月二日あり
草の名に月の旅寝も二

○熱海紀行

業盛んなり真田昌幸の築きたる城址あり此所より鐵
道國道共に東に向ひ小諸及び追分の各邑を過ぎて輕
井澤に至る輕井澤はアプト式鐵道を以て來る即ち碓
氷嶺の西坂の中腹高原の内にあり四面山を繞らし遠
く淺間の煙を望み近く離山に對し眺望佳絶あり
碓氷峠は日本武尊東征の時此の嶺に上り東望して橘
姫を戀ひ嘆じて吾嬬者耶と宣ひしかば是れより東國
を吾嬬と云ふと史上に著はる山中に霧積温泉あり極
めて幽邃あり峠の北方信濃上野の境に活火山淺間山
あり凡百餘年前に破裂あり噴煙今に至て絶へず其麓
に淺間温泉あり

姨捨山 是上田の北西千曲川の左岸にあり東鏡盛
山を望み西嶺ヶ岳嶺嶺に連る山下に水田あり毎年

○戸隠山 ○姨捨山

地 方 誌

日から
此里のさま後に山廻り前
に海近くしていさ見ぬ須
磨の景色もかくああらん
と折から秋の賑も心澄
む旅寝にぞありける湯本
は殊に我宿の後に近けれ
ば日夜に六度ばかりかど
ろくしく湧き出づる音
高く山水浦波に響きあひ
て喧しきものから世の中
と波りくらべては如何に
とか云ふべき網引き釣す

70
中秋には月満て銀地に躍り田毎に其月影を映す故
に田毎の月といふ又其地邑名を更級の田毎の月と
もいふ

(松本市)は國の中央に在り養蠶甚だ盛にして市街頗る
殷賑なり松代は舊奥田氏の城下にして有名なる佐久
間象は此地より出でたり
犀川谷は信濃の西北部に在り北に狭く南に廣し松本
平は此廣地に在り木曾川谷は信濃の南西に位し地勢
高峻あるが故に磐谷急峻世に名高き木曾の棧道とは
即ち此磐谷に通ずる道路にして其急湍は良材を輸送
するの通路たり天龍川谷は木曾谷より廣淵にして湖
水近傍は諏訪平といひ其西南狭長の地を伊那谷と稱
す國中最も温暖なる部分にして果實の栽培に適し養

東 山 道

るわざもあれどありたち
て已が世のたつきとする
ものは少し耳かれぬ魚の
名ともうづははまちろう
たきと後には自から覺え
て皆云ふ山田色づく頭に
て鹿追ふ小屋に引板引鳴
すきを珍らしう哀れなり
鹿の聲は夜もすがら聞え
て夕霧の巻きて讀む心地
す
夜は湯にぬれさす袖を
鹿の聲

蠶極めて盛んなり

(伊田)は伊那の中央に在り南の方參、峻に達する要衝に
當り人馬の往來駁繁あり諏訪湖の北方にして温泉を
以て有名なる上諏訪湖の北方に當る温泉を以て有名
なる上諏訪は中仙道の通路に當る夫れより和田峠を
踰へ佐久平に至れば碓氷峠に通ずる鐵道及び國道に
連絡す其以東は即ち關東八州の一部あり
本道の東豊野には琵琶池閑淵深の勝地あり佐久間象
山此の深を愛して雲錦と稱せり又柏原の野尻には絶
勝の湖あり一に野尻の湖と云ふ其形富士山に似たる
を以て文人墨客之れを芙蓉湖と呼ぶ
此國は繭生糸の産額に富むこと本邦第一にして又更
科蕎麥は世に著名あり

○熱海紀行

○琵琶池、芙蓉湖

上野

月は殊に海より出で、山に入る宵々の音がめえおらず浪寄する浦の景色我宿の東面よりもくまなく見えわたれば明若欄干にうちもたれて鳥帽子着たらましかば我を屏風の畫に描くべきをど笑ふ

ほし棹のこれにも月やねれ浴衣
尾花散る方へはひけり
うらの波
打ちませて浪にまけた

上野は地勢北方に廣く東南一帯半島狀をなし下野武藏の間に斗出す東西北の三面は山岳重圍し河流は悉く南に流る
(前橋市)は上野南部の低地にあり利根川に臨む群馬縣廳の所在地たり製糸の業盛にして市況殷富なり両毛鐵道は東方下野の小山より此地に來り高崎に接す古へは此地を厩橋と唱へしが酒井氏が城の時まやばし「まへばし」國音相似たるを以て前橋に改めたり
(高崎)は前橋の西南瀛車時程僅か二十分に在り第一師團の分營を設く東京を距る瀛車時程凡そ三時間にして碓氷峠へは一時間を要す驛の中央に高崎城址あり

東山道

る砧かお
釣舟や案山子乗り行く
波の上
主人の子彦助と云ふ年十四ばかり常に來おれて蟹の喇りきて所の事おと聞き覚えて語る彼に案内させてあたり宮寺など見廻り漁家に茶を乞ひ樵夫に煙草の火かりて吟歩機を忘るゝ程言ひすてたる句をも例の知る人のもとへ書付けて遣はす登歩一

○熱海紀行

元と和田城と稱し和田義盛の八男義國の居城ありしといふ此地四通八達の地にして其繁華前橋に亞ぐ瀛車は西南富岡を経て中小坂鏡山に連絡す
伊香保は高崎を距る七里餘にあり草津は國の東北の極端に在り共に温泉を以て名高く浴客常に雜沓す
赤城山は前橋の東北に在り妙義榛名を并せ上毛の三名山と稱せらる頂上に大小二所の沼あり風色奇絶畫圖も及ぶ所にあらず此の沼を石垣沼といふ拾遺集に「おく山の石垣沼のみこりに戀やわたらんあふよしをのみ」とあると是れなり
榛名山は高崎の西北にありは全山古松老杉蒼鬱として奇巖怪石處々に起伏し溪水潺々として聲あり山上に榛名神社あり

○前橋市 ○赤城山 ○榛名山

地方地

里ばかり日金山に登れば
地藏堂あり職豆の海山眼
下に連り景色言ふばかり
なし富士は西に限なく異
山の秋に別れて雪白き姿
衣錦尙網とかいへるこの
山の徳に比すべきにぞ
四方山の錦や富士には
づかしき
中僧正の社は殊に大きき
る稚の木の本のはま
にあり
御所の色にこりてや稚

妙義山 北碓氷郡を距る二里に在り山は白雲金
洞金鶏の三峯より成り満山老杉古楓多くして四時
の光景に富み奇観云ふべからず
高崎の南に佐野あり船橋の舊跡を以て名ありろの西
北一里に藤原秀郷の築きし唐澤山の城址あり今公園
となり多く松茸を産す國定は俠客國定忠次の生れし
所なり伊勢崎桐生は織物を以て其名高し此近傍に新
田義貞の始めて兵を起せし笠懸野及高山彦九郎の舊
跡地あり而して義貞の城址は太田の北金山の頂にあ
り又桐生の東北一里に高津戸の奇景ありて羽根深瀬
橋の勝あり

下野

東山道

が本
湯前権現に我病を祈る
新蕎麥や痲氣に利生見
せ給へ
伊豆権現奉納
海と山兩部に月のくま
もかし
業平非は里中にあり此處
の男女常に水汲み影うつ
して自から妹春の媒ども
なれば言ひからはしたり
とぞ
豆ひさの影や非筒に豆

○熱海紀行

○妙義山 ○日光山

下野の地勢は大概上野と同じ
(足利)は桐生の東方數里瀛車時程凡う三十分の所に在
り古來織物を以て著名あり此地足利尊氏の起りし地
にして小野篁の建てし足利學校の舊跡あり是より東
一時餘にして小山に達す小山は東京青森間の鐵道及
び水戸鐵道並に兩毛鐵道の會合する所なり
(宇都宮)は小山の北方汽車時程五十分の處にあり栃木
縣廳の所在地にして舊戸田氏の城下あり鐵道は此所
より分岐して二となる其一支は西北に向ひ麻の産地
なる鹿沼を経て日光に至る此地に三奇人の稱ある蒲
生君平の碑あり
(日光)は徳川家康の廟所にして幕府の盛時天下の財寶
を盡して經營せしものなれば金碧燦爛壯麗を盡す男

地 方 誌

男
平左衛門湯といふあり平
左衛門かひさしとよばれ
ば湧き出るとて里の子供
の呼びて旅客に錢きども
らふ
子どもいさ呼ばれ紅葉
に立田姫
中大島は遠くかすかなり
大しまや片目しぐるゝ
遠目鏡
初島はちひさき島の向う
に近く浮べり沖の小島は

七十六
体山は日光山臺の秀峰たり中禪寺湖其南麓に在り水
清くして拭へるが如く景色頗る幽邃なり其溢れて華
嚴の瀑布となり飛下すること四十丈下流を伏谷河と
稱す其他霧降の深裏見瀧等あり山水の秀靈實に海内
無双と稱す此地は日光塗と稱する漆器を産す日光の
南方に有名なる足尾銅山あり其奥に名高き庚申山の
り又日光の近傍今市には二宮尊徳の墓あり東南の眞
岡は木綿を以て名あり鐵道の本線は北方に進み廣漠
なる那須野を過ぎて奥羽に入る

岩 代

岩代は安達太郎諸山國の稍々東部を南北に走ると以
て地勢は二つに分る其西部は猪苗代湖より發する日

東 山 道

是なりといふ又大島をい
へりとも里人の傳もまち
くなり
木がらしや片手にあづ
る島一つ
十月十三日熱海を立たせ
給ひて江府へ歸らせ給ふ
道すがら鎌倉に三夜ばか
り御坐して寺社古跡をも
御覽す從ひ奉りて見廻る
程句など言ふべき處も多
かりけれど事に紛れて皆
洩らしつ道をまもりの神

七十七
橋川及び其支流大川并に唯見川の流域にして地勢北
部に低下す水は悉く越後に入りて阿賀川とある東部
は阿武隈川の沿岸にして地勢狭長南より北に低下す
（若松）は湖の西北に在り日橋川を隔てゝ其東北に盤梯
山峙つ其南麓は維新の際會津の戦場にして史上に有
名あり此地方は地味礪確にして農産物に乏しく隨て
工藝品の製出盛んなり會津塗會津焼鐵器及び蠟燭を
以て有名あり
（福島）は板倉氏の舊城市にして福島縣廳の所在地なり
蠶業最も盛んなり其東一里に有名なる信夫文字摺石
あり其名産たる信夫文字摺布はしのぶ草にて製すと
いふ河原左大臣が陸奥の信夫もじすり即ゆゑに亂れ
るめにし我ちらかくにと詠みたる所あり東京より瀛

○熱海紀行

○福島市 ○信夫文字摺

地 方 誌

に申す
守りたまへ神もかたひ
の道すがら
榎の島
此神の御手にや匂ふひ
はの花
白菊が淵
十月やげに白菊の名も
むかし
龍穴
此の洞を思へば神も冬
こもり
鎌倉にて

車時程九時餘にして達するを得袖を以て著名なる二
本松は其南方流車程一時間の地にあり戌辰の戦地た
り其東方は昔時安達ヶ原と稱せし地にして阿武隈川
の對岸に今尙ほ黒塚の遺蹟あり平兼盛のみちのくの
安達ヶ原の黒塚に鬼こもれりと聞くはまことかど咏
せしは此處あり飯坂は温泉を以て知られ半田は銀鑛
を以て稱せらる其他郡山は生糸を以て須賀川は馬市
煙草を以て安積山は采女の詠歌を以て世に知らる福
島の西なる吾妻山は新火山にして地質學者の視察す
るもの多しといふ
安達太郎山 一名を二本松岳といふ此地有名の
高山にして海面を抜く三千尺蒲山岩石峭立して古
松楓樹其間に繁茂し溪水之れを環り潺湲聲あり山

東 山 道

鎌倉のかまの名さびて
枯野哉
何かしの寺にて重衡の盃
を見る
杯に銚子もそへずさむ
さかな
盛久が首の生
盛久が命やはまのかへ
り花
鶴が尻八幡
御供して鶴も留守なり
神の松
十九日金澤の方にはまはら

○熱海紀行

中に嶽の湯温泉あり風景頗る佳なり
紅葉山 驛の東端にあり阿武隈川の清流其下を
環り秋時楓葉の勝地なり街南には蒲生氏郷の居り
し城址あり又石那坂古戦場は佐藤基治が鎌倉の大
軍に抗して死せし地あり
福島八景 信夫山秋月、洲川落雁、小富士暮雪、福島
晴嵐、信夫橋夕照、里岩夜雨、文字摺晚鐘、阿武隈川歸帆
にして北島顯家の城址は東北四里の處にあり

磐 城

磐城は阿武隈山脈南北に走り東部一帯太平洋に臨む
白川は國の西南部に偏し東京を距る流車時程六時間
の所にあり維新の戦地たり又馬の市場として名あり

○安達太郎山 ○紅葉山 ○福島八景

地 方 誌

せ給ふ能見堂といへるよ
り八景を見わたす奇絶の
勝景言葉にのべ難し折か
らうちしくれしに

八景のうち二つ三つ
しぐれけり
二十一日武府へ歸らせ給
ふ

蘆湖

日下勺水

芦湖は箱根万山の中に在
り神異靈怪終古洩れず能

土地頗る峻険實に奥羽の咽喉を扼す平は一地方の中
心なり交通運輸甚だ便利あり近傍に白水炭坑あり
白河の關跡 白河を距る西南三里に在り松平定
信(樂翁公)此地に一碑を建てみやこをば霞と共に立
ちしかど秋風ぞ吹く白川の關と能因法師の歌を刻
せり白川城址は市の東に在り峨々たる石壁中に感
忠銘の三大字を刻せり

南湖 は白河城の南半里にあり樂翁公の没所せし
所にして周回二十餘町公の名けし十七勝碑あり南
湖の東に關山あり佐竹義重伊達政宗と決戦したる
古戰場なり

勿來關趾 は菊多郡區田村にあり源義家の吹風を
勿來の關と思へども道もせにちる山櫻かきと咏み

東 山 道

く其勝を傳ふる莫し庚辰
歳八月余荒野子賊と畏を
山中に避け堂島の巖瀆樓
に宿す所謂箱根七湯谷の
一也想ふ芦湖を距る遠か
らずと因て其程を詢るに
僅に二里餘矣初め余子賊
及び丸山子堅植松有常と
同遊を約す芦湖月夜の奇
を覽んと欲し余と子賊と
先づ發す既にして數日月
に溪上を歩す夜色朗然た
り倍す芦湖の勝を懐ふ而

蘆湖

し所あり
中村は平に次々郡邑なり相馬燒を以て知らる三春は
産馬地の中心にして所謂三春駒は古來駿足を以て稱
せらる又棚倉は南方山間の一都邑なり

陸 前

陸前は中央大山脈國の西境を劃し北上山脈北より走
りて杜鹿半島をなす是より以西は即ち仙臺灣あり
(仙臺市)は伊達氏の舊城地にして東北地方第一の都會
なり東京を距る瀛車時程十二時間の地に在り宮城縣
廳第二師團司令部控訴院及び第二高等學校の設けあ
り青葉神社躰躰ケ岡及び櫻ヶ岡は市内の勝地あり芭
蕉の辻は市の中央にあり仙臺平八ッ橋織及び名取の

白河の關 勿來の關 仙臺市

して二子未だ至らず子誠も亦歸を促す余重遊の期す可からざるを慮り遂に意を決して遊ふ焉路を小涌谷に取り逶迤として天妃坂を踰ゆ相摸洋忽然として東に在り浦淑匯々是日天晴れて望み豁盡島鎌倉皆指點す可し轉じて孖峰の下に出づ雲樹の間波光一道を見る神益す動く已にして湖上に到る夕陽山に滿ち嵐翠畫くが如し

埋木細工は世に名高し經ヶ峰は正宗の靈廟にして廣瀬川の西に在り愛宕は市の南に峙ち松島の灣金華の峰名取の山野七ッ森の奇峰一々眼中に落つ又林子平の墓は龍雲院境内に在りその他市外に古蹟多し宮城野は榴ヶ岡以東の平原をいふ古來有名の勝地なり今宮城野と稱するは僅々五六町にして陸軍練兵場となれり只古歌の残れるあるのみをもしつる宮城か原の下露に信夫文字摺乾く夜ぞあき匡房宮城野の木の下露に立ぬれていく夜か鹿の妻を戀ふらん雅有多賀城は東南二十町にあり碑あり壺碑といふ神

小艇西より來る者あり之を詢へば則ち姥子よりする也爾時據るに姥子は西北幽絶なる處に在り亦靈泉有りと余嚮きに箱根の七湯谷を記し而して未だ其勝に及ばず子誠銳意往んと欲す是に於て舟を買ふて湖を渉る便風に帆を揚げ四山皆走る余子誠と白を浮べて絶叫し舟子を戒めて少しく棹を緩む忽ち見る奇峯舟に墜つる

○蘆 湖

龜元年鎮守府將軍大野朝臣の置く所あり四境の遠近を示したる者あり古歌あり陸奥のいはて信夫はえろしらぬかき悉して壺の碑頼朝陸奥は奥ゆかしく思はるゝつぼの石ふみ外の濱風西行法師末の松山は八幡村の林中にある高丘をいふ霞立つ末の松山はのゝと浪に花さく横雲のうら遠望浦岩沼の東にあり大洋渺茫眺望極て可あり能因法師の武隈の松は此度跡もなし千歳を経てや我は來つらんと詠せし鼻輪の松の故蹟も亦近きに在りといふ

○仙 近傍の勝地

地 方 誌

を舟子曰く是れを駒岳と爲す函嶺の絶巔也と冠峯并峯左右相峙ち環湖の峰巒突起万狀半は皆な水に入り僅に其頂を露はし島の如く嶼の如く詰曲すること嶼の如く水紺碧色にして底を見ず舟子曰く其深を測るに殆んど九十尋矣と蓋し函嶺は高く雲半に入り芦湖又其上に在り一碧万頃霽淡に泛ふが如し水の深きこと知る可き

仙臺灣は本州東海岸の一大灣にして松島は灣の西部にあり之を松島灣といふ鹽釜は其灣頭にあり製鹽に適す瀛車は茲より岩切に至り東北鐵道に連接す鹽竈は一名千賀浦と稱す夙に松島と共に勝地を以て著はる松島に遊ばんとするものは先づ舟に乗りて行々その勝を探るを順路とす鹽釜八景は鹽釜暮煙、籬島斷雨、社頭賞春、法蓮臨湖、江郷春雪、前津泊舟、松浦秋月、壺碑懷古あり又東の沙汀を翠松磯といひ籬島は海汀を去る十餘町恰も海面に浮ぶが如し皆此の地の勝なり

京 山 道

爾既にして而して峰々雲を吐き天色遽に變し咫尺蒼勁日に没す而して月見る可からず余と子誠と天を仰で悵然たり嗚呼芦湖の勝たる久し矣而して未だ嘗て其幽を聞き其秘を發する者有るを聞かず之れ有るは斯遊より始まる而して亦竟に此くの如し神靈の蘊果して窺ふ可からざる歟舟湖西に達す候煙四合暮氣益々肅冷地

○ 蘆 湖

ふ朝々霧々氣象万千眞に眼迷ひ心飛ぶの奇景あり鹽釜より海上數里群島一々異ありて或は躍り或は舞ひ或は碎け或は突立して青松其上を纏綴せり就中雄島の洞門籬島瑣々崎の魚生巢の如き旅客の嘆賞して已まざる所あり其他宮戸、桂澤、象ヶ鼻、岩青、春磯、經島、福浦、燒島等の諸島皆古人の詠みし島あり又眺望の勝地は松島村の觀瀾亭(村の西月觀崎にあり元仙臺侯の遊館)手樽村にある富山にして世人松崎の景は富山に在りといふ亭の右に幽篁浦あり北畔の水汀を破浪灣荒苦汀といふ即ち松島八景の一にして竹浦夜雨是れかり俊成卿の歌に立かへり又も來て見ん松島やをしまの苦や浪にあらすなどあり(石の巻)は北上河口に在り舟楫の便ありて國內の要津

○ 鹽 釜 ○ 松 島

地 方 誌

ゆ可からず老翁有り火を
茅廬中に擁す就て暖を取
る翁自ら言ふ年八十五と
而して其健あること少壯
の若く然り異境果して異
人有り昏黒姪子湯に抵る
戸惟だ一家四顧皆峻壁壘
障矣明日冠峰の麓に道し
大涌谷の背を攀ち富岳を
左に顧みる其勝愈よ奇に
して愈よ陰なり

畫 島

あり萩の濱は其東南にあり小樽横濱の航路に當り船
船の出入少からず金華山は遙かに犬吠崎に對す此處
に燈臺の設けあり
金華山 は鹽釜を距る海路二十里山は宛も洋中に
聳立し五峯々嵒六十八區溪間四十八山腹天女堂を
立つ寺を大金寺といふ北岬を二王崎といひ東岬を
大箱崎と云ひ南岬を蛇穴崎といふ山水の美なるこ
と古今名勝無双の靈地といふべし
北上平原は頗る廣く米の産額多し然れども其良質あ
るは宮城野の産なり國の西北なる細倉嶺山は我國鉛
鐵の冠たり

陸 中

東 山 道

川田斐江
卅日三晴晨起して舟に上
る杜戸を過ぎ北のかた小
坪浦を指し帆を揚げて西
馳し鵜島に達す又江島に
作る周圍許り巖壁へて
林密に神祠佛宇茶肆酒樓
各勝地に倚る北は區瀬郵
と一衣帯を隔て白沙平敷
し以て徒行す可し猶ほ其
潮溢れて路沮せんことを
恐れ架するに長棧を以て
す乃ち棧を渡り磴道を登

○番 島

陸中は北上川中流以上の地にして南より北に開く盛
岡は殆ど其中央に在り
(盛岡)は舊南部氏の城邑にして岩手縣廳の所在地たり
青森に通ずる要路に當り仙臺より汽車時程六時三十
分間に達するを得べし袖鉄瓶の産あり市の西方に
南部富士嶽つ岩手山といふ風色絶美なり一の關は盛
岡に亞ぐ都邑にして國の南方に在り
安倍貞任が討死せし衣川柵は衣川村にあり又義經の
討死したる平泉館は何れも一の關の北方に在り有名
ある中尊寺は古來日光に比すべき塔宇なりしが中古
燒失に罹り今僅かに金色堂經藏堂の二字を残せりそ
の西北嚴美村の五串流は景致の幽邃なる殆んど木曾
の野覺に似たり

○金華山 ○盛岡市

陸奥

る祠宇有り下宮と曰ふ又
登れば上宮に詣る華表を
過ぐ右に一字を見る是れ
を本社と爲す並に辨財天
を祀る社外は地平に西南
の一隅に小亭を設く俯し
て滄溟に臨み遙嶂起伏し
富峰殊に雲表に聳る而し
て大磯小磯亦水煙渺茫の
中に在り縮遠鏡を取て之
れを望めば孤嶼波間に浮
び頭に白石を戴き上尖り
て下直く形古烏帽に類す

陸奥は本州の北端に位し西は日本海に臨み東は大平
洋に面し津輕海峡を隔て、遙かに北海道に對す斗南
半島及び津輕半島は北方に斗出して内に陸奥灣を擁
す斗南半島の恐山は其脈延いて南に走り八甲田山を
起し更に南に赴く故に國の地勢は自ら東西に分る東
部は低平にして馬淵相坂の諸流は東に流る
十和田湖は相坂川の水源にして周圍十里あり西部に
は岩木川北流して十三瀉に注ぐ沿岸は稍平坦地味は
豊饒にして頗る米穀に適す瀛車は盛岡より來り國の
東岸に沿ひ野邊地港を過ぎ西に折れ小港を経て青森
に至る

地方誌

東山道

呼んで烏帽巖と爲す近日
世人喜んで洋服を着け其
舊制を守る者は目して頑
夫と爲す則ち此れ亦頑と
謂ふ可き耳亭下に蟠石風
潮吞吐す而して斷崖削立
す晴窟有り焉亦辨財天を
祀る東鏡に之を龍穴と謂
ひ北國紀行に之れを蓬萊
湖と謂ふ炬を把りて而し
て入るに左右兩穴金剛界
と曰ひ胎藏尊と曰ふ各石
佛石獅等を安ず相傳ふ弘

○書島

○青森市 ○外ヶ濱

(青森)は青森縣廳の所在地にして第四旅團司令部の設
けあり東京より瀛車時程二十六時十分間にして遠す
るを得べし縣下第一の良港にして東京及び函館間に
瀛船の便あり野邊地の北に馬門あり戊辰の役津輕兵
と南部兵と激戦せし所あり
外ヶ濱は青森海内上磯より野邊地までをいふ此
の瀛海頗る名勝に富み風光明媚古來歌人の咏唱す
る所なり西行法師の歌にみちのくのわくゆかしく
も思ほゆる壺のいしふみろとの濱風とあり
青森より西北の山を越ゆれば二十四哩にして弘前市
に達す
(弘前)は國中第一の都會にして津輕氏の舊城地たり今
第八師團の衛戍あり岩木川に臨み商賈繁盛漆器を産

仁中僧空海唐より歸て法を此に修む種々の石像は即ち空海が造る所也此間泉瀉たりて氣冷炬火將に燃せんとす暗中摸捉頭觸れ足厥づく衆懼れ匍匐して穴より出づ時に漁夫群集して客を呼ぶ客錢を與ふれば輒ち没溺して餓を捕ふ錢多ければ則ち没すること深くして餓大なり少なければ則ち是れに反す阿堵果して神佛より

す岩木山は其形富嶽に似たるを以て世に津輕富士と稱し休火山に屬す鐵道は是より南して碓ヶ關に終る奥羽地方は一般に石器時代の遺跡に富み地中よりして石器土器骨角器等の精巧あるものを出す殊に青森の西北にある龜ヶ岡は古來より遺物を出すを以て有名なり

羽 後

羽後は山脈國を南北に分つ北部は能代川及び其支流阿仁川の流域にして南部は御物川の灌漑地なり何れも田野開け米穀に適す(秋田市)は御物川口に在り佐竹氏の舊城地たり秋田縣廳を此所に置く商業頗る繁盛又機業地たり秋田

靈あり矣初來る時列肆叫んで貝器を賣る喧鬧厭ふ可し因て別路より還り岩本樓に憩ふ日方に亭午舟師歸を促す七里濱に傍ふて東行す

武藏野紀行

北條氏康

天文十五年仲秋の頃武藏野を見んとて此の年月思ひ立ちぬることなれば、人々數多打連れて小鷹狩し

○武藏野紀行

羽 前

八丈綱等を出す又秋田露の名産あり(能代港)は能代川口に在り市況繁盛春慶塗を以て有名なり(土崎港)は秋田の北二里に在り船舶の碇泊に便なり金銀山たる院内は南方にあり銀銅山たる阿仁は北方にあり男鹿半島は勝區舊蹟多く陸前の松島と共に風光明媚を以て名あり旅客島廻りと稱し西南海岸を巡遊す羽前は北部の西面一帯に日本海に瀕し南方は半島狀をなし岩代の方に斗出す最上川谷は最も開け人文活潑なり酒田は最上川口にある要港にして船舶の出入

地 方 誌

て遊ばんとて、皆々狩の装束して馬に打乗りまづ鎌倉に詣でけるあなたの古跡を眺め、八幡山より四方の景色を眺め、小磯大磯を見わたせば、鷺鷥や鴈の波に立ち騒ぐを見れば、をしきもの立つ白波のいろべよりあまのみるめを袖にかけはや大磯の波路をわけて行く舟はうき世を渡るたつきあるらん、

○北陸道地方

多し (山形)は元と最上町と稱せし地にして山形縣廳の所在地なり米澤は機業盛んにして米澤織及び精好織を以て有名あり 新庄は秋田より山形に通ずる要路に當り龜綾織を産し般賑の地あり鶴岡は酒田の南方七里最上川の一支流に臨み又繁華の都會あり 本道は土地高く山岳多き故に寒氣強し殊に信濃及び奥羽は五寒なり極暑凡三十四度極寒凡零下十一度なり 北陸道は日本海に沿ひたる一帯の地にして東南に山

北 陸 道

過ぎにし庚子の歲宿願のことありて此の宮に詣でけるがやうく八年あまりにやありぬらんと覺え侍る、若宮の御前にまゐりて、 左のみ來し身はものゝふの八幡山いのる契りは萬代までも さて此處彼處の谷々山々由比の濱、大鳥居古寺古跡を眺めあぐれば藤澤の北松井の庄に、三田彈正忠氏

○武藏野紀行

○新直市

越 後

脈蜿蜒起伏し西北は山陰道に界す地勢は概して背後に高くして日本海岸に至るに従ひ緩斜をきし殊に越後の中部は大なる低地にして謂ゆる越後の平野是れなり海岸は出入少く良港に乏し獨り若狹の地灣入して鋸齒形をなすものと能登半島の海中に斗出して富山海七尾灣を抱くあるのみ 越後は本道の最大國にして東南及び西方に山を負ひ信濃阿賀兩河の流域は最も廣濶の沃野をきし地味膏腴にして米穀に適す (新瀉)は信濃川口に在り新瀉縣廳の所在地にして五港の一なり内外水陸の運輸共に便利にして市況頗る繁

地 方 誌

宗が宿所に一夜を明して行くに、此亦ん小綾の磯といふ、きのふ立ちけふこゆるぎの磯の波いそいで行かん夕暮の道、頃八月上旬朝霧深く、分入りて行くに山あり、岩山と云ふ此の山の後は甲斐の山、北は秩父と申し侍るるれより武蔵の國勝沼といふ所に著きぬ齋藤加賀守守元此の所の領主也

榮を極むれども信濃川の泥砂年々沈積すること夥しく爲めに河口は遼淺にして船舶の碇泊に便ならず大なる流船は殆んど一哩外に止まり小流船を以て荷物を運送するといふ故に碇泊中と雖も風波起るときは難を佐渡の夷港に避けざるべからず従て冬日波暴き時は船舶の寄港するもの稀なり新瀉の東南に五泉平あり糸織を以て名あり東方阿賀川の北方に新發田あり第二師團の分營を置く頗る盛んなり長岡は信濃川の右岸新瀉より十七里の上流に在り日々流船の往復あり維新の戦地たるを以て今世上に著はる絹織物を以て名高し南に小千谷あり縮布透綾を産す(高田)は西部中央の平原にありて東京を距る汽車時程十一時四十四分の所にあり新瀉に次ぐ都會にして元

北 陸 道

り、つねつね道々のこと申しかよはしければ、山海の珍物敷を盡し饗應ける、此の所に二日逗留してそれより武蔵野を狩り行くにまことに行くともはてのあらばこゝ萩、薄女郎花の露に宿れる虫の聲々哀れを催すばかりなり武蔵野といづれを指して分入らん行くも歸るもはてしなれば古の草のゆかしもあつか

○武蔵野紀行

徳川家四天王の一人榊原氏の城下あり壽永寺に上杉謙信の軍扇ありといふ此近傍は石油を産するを以て名あり又深雪地として知らる此所より北の方十三分時に直江津あり(直江津)は北方海岸に面し關川の西畔に位す船舶の出入多く運輸の業に従ふもの少あからず其西方春日山に上杉謙信の古城址あり汽車は此所より柏崎に至りて終る直江津より西方越中に至るの地は妙高燒山の諸山南北に馳せ山岳起伏して地味肥沃からず其越中との國境には飛彈山脈の北端海中に突出して有名なる親不知子不知の難所をなす又直江津より東方の海岸には出雲崎あり佐波に渡るの要津あり

しければあり、此も紫の一
本ゆゑなるべし
隔つちよ我が世の中の
人なれば知るもしらぬ
も草のひともと

あくれば八月十三日、秋霧
いよ／＼深くして道もさ
だかに見えわかず、馬にま
かせて行くに長井の庄に
も着きぬ、まことや若紫の
巻に、かゝる朝露をわけ入
らんとあるも是あるべし
大澤の庄なぞを行くに、や

荒川の谷には臭水又は草生水と稱し石油の地中より湧き出る所多し又火井とて地中より自ら石炭瓦斯の噴起する所あり土人はろり火を唱へて竹筒を以て之れを屋内に引き火を點して燈火の代りに用ふと云ふ草生水と共に越後七不思議の一に數へられ又後にては清酒を醸造する者多くろの高播津に次ぐ

佐渡

佐渡は海上に在る孤島にして出雲崎の北方十二里餘に在りその形恰も分銅の如く南部北部共に東西に走る山脈あり其中央は低地にして米穀の産出に適す有名なる鐵山を有する相川は西南に在り金北山は北方に在り

地方誌

北

陸

道

う／＼隅田川にも着きぬ
河面を見れば、まことに白
き鳥の嘴と足と赤き鳥の
群れ居て魚をくふありさ
ま、昔を思ひ出で、

都鳥すみだ川原に船は
あれをたゞ其人は名の
みありはら、

向は安房上總、まのあたり
に見えわたる茲に葛西の
庄淨興寺の長老年八十餘
に及べるが、迎ひに出でら
れ寺内に立寄り、一宿すべ

○武蔵野紀行

(相川)は眞野の入江に臨み島中第一繁華の地にして金銀の産出夥しく人民又漁業に従事するもの鮮からず其近傍眞野に順徳天皇の御陵あり金北山の東北には夷港ありて灣に臨み對岸の港町と相對し泊舟に便あり島の南岸には亦泊、小木の二港あり共に本州との交通盛んあり

越中

越中は東西南の三方は山岳重疊して國境を劃し北方一面は日本海に向て低下し海岸一帯沃野をなす故に河流は悉く北に流る越後の界に大連華山あり此國第一の高山なり其西南に立山あり高さ之れに次ぐ此等の諸山脈は延ひて信濃飛彈の境上に及ぶ所謂飛彈山

地 方 誌

き由申されければ河を渡り彼の寺に行きて一宿するに夜に入り風冷かに吹きたり松風入琴といふ事を思ひ出で、松屋の吹く聲聞けばよもすからしらべ巽ある音こそかはらぬ

脈是れあり (富山)は神通川の下流右岸にあり越中の都會にして富山縣廳の所在地たり第三師團の分營あり古來藥種商多く又鐵器を以て名あり富山の北神通の河口に東岩湖あり富山附近の物貨は概ね此の港に依る是より東數里の海岸に魚津あり海陸の運輸便利にして商工及び漁業盛なり (伏木)は國中第一の要港にして莊川の末流射水河口に在り船舶の出入多く特別輸出港の一たり東岩湖魚津等を経て直江津に通ず燈臺あり對岸に新港あり漁業甚た盛なり莊川支流小矢部川を上げれば西に高岡市あり (高岡)は國內第二の都會なり商工業大に開け鐵器及び

北 陸 道

ころ着きにけれ

武藏古戰場記

淇 園

武を崇め嶽の高きに藏して神威を承平に和にしめし、文を黎民の際にやわげ、徳を國家の仁政にしきぬる、ひさしの國御嶽の山は叔倉子義を違へぬ標有梅の青梅の里まで、江戸を去ること十有三里にして、行程に山河橋陵かし青梅村

○武藏古戰場記

漆器を産す其以西は昔源義仲が平維盛を破りたる俱利迦羅峠(礪波山)あり峠を越ゆれば加賀に入る

加 賀

加賀は南方には有名なる白山雲表に聳え其脈東西に延き國の東部は山岳重疊し地勢稍く西北に低下す故に河流は悉く西北に流る (金澤)は舊名を尾山と稱し國の東北部に在り北陸道第一の都會にして前田氏累代の城市たりし所なり犀川及び淺野川に跨る石川縣廳の所在地にして第九師團の衛戍第四高等學校の設けあり工職商業等頗る活潑にして象眼細工陶器銅器等は殊に著名なり 金澤の西北二里の海岸犀川の河口に接して石港あり

○富山市

金

地 方 誌

中金剛精舎古樹の梅あり
四時實を結び、熟すればも
緑の色をかへざるが故に
青梅の名あり、連山西北を
めぐりてさながら絶壁に
似たり、閭巷を過ぐるごと
十町ばかり、貉澤を下れば
溪路斜にして、棧あり、村落
に流をいれたり、ひかたの
和田といふ、朝日にむかふ
名なるべし、一顧すれば多
摩川の流を隔て、山々水
にそばだち、石にむせぶ流

り頗る繁華の地なり、然れども海淺きを以て大船を碇
泊するに便ならず、又此地より敦賀に達するを得べし
西南八里餘の所に小松あり、昔の安宅の關は西北に在
り、雖も加賀の海岸は一般に土地の降下作用行はる
ゝ所にして、今陸を距る一里許の海中にありしといふ
陶器木綿を産出す尙ほ西南五里越前の境に近く大聖
寺あり、繁盛の商地あり、其北に篠原古戰場あり、海岸に
して青松蒼々たり、又北方九谷より出づる陶器は殊に
著名あり

能 登

能登は日本海沿岸の最大なる半島にして、寶達山脈の
支脈國の中央に連亘す、其北方に西南より斜に東北に

北 陸 道

の音谷にひいき、人のあら
そひかたるが如し、山河す
べて紫糾して、數里の間に
屈曲し、峯にかくれ谷にあ
らばれ、さらす調布さらさ
らにと詠じたる、昔の歌の
姿なり、山笠えては、頂に露
臺のあとをといめ、岸崩れ
ては石に楯澤の名を残し
往古に戰場の樞要たるも
陰鬱たる叢澤となりて、僅
に山がつの樵路をわかち
露深くして、草菴壘の礎を

亘る平地あり、耕作に適す、是より以北は火山質にして
地味頗る礪確なり、従て製鹽及漁業盛んあり
(輪島)は北海岸に在り、國中第一の都會にして精巧なる
漆器輪島塗を以て有名なり、是より半島は遙かに北方
佐波に向て突出す、其先端は即ち緑剛岬にして、燈臺の
設けあり、是れより南方珠洲岬に至る間は、近海暗礁多
く、舟行頗る危険なり、西南に宇津港あり
七尾灣は南岸にあり、水深くして、大艦巨舶を容るゝに
足り、市街頗る繁盛を極む、特別輸出港の一たり、近傍に
和倉の温泉あり、灣の西邊に曹洞宗の本山總持寺あり
此の國は海中に突出して、土地豊饒からざるを以て、人
民は専ら工業若くは海産の業に従事す、就中食鹽は我
國第一の産出地たり

○武蔵古戰場記

○金澤市

越前

地 方 誌

埋め月さびしうして尾花
白刃のひかりをまじへ、旌
旗にびるがへりて松に
白鷺を宿し翠桃枝をたれ
て丘に弓絃の糸をたち利
鉄いたづらに田園にくじ
け、寶刀ひなしく壤の中
うづめり、花鳥に時を感ず
れば歌舞の榮華もまのあ
たりにして、月にひかしを
のべるときは、錦織にほこ
れる盛衰も紅葉の色の上
つらふに見えたり殺氣を

越前は東北南の三面は山脈重疊し西方一帯日本海に
向て緩斜をさす故に河流は多く西に向て流る海岸の
出入極めて少く獨り南方若狹に近き所に敦賀灣ある
のみ
(福井)は金澤に次ぐ大都會にして足羽川に跨り國の北
部にあり海岸より四里を距る往時は北の庄と云ひ柴
田勝家の居城ありしが其後結城秀康此に封せられ福
井と改む東京より濱車時程十五時間餘の所に在り東
方數里に曹洞宗の本山永平寺あり其北端に義貞を祀
れる藤島神社あり南方五里日野川の沿岸に武生あり
福井より京都に通ずるの要路に當り蚊帳及び鳥の子

北 陸 道

がく昇平の日影に消えて
戰塵に似し雲もなく、人家
軒をならべて路に窺のに
ぎはひをつらぬ、ゆくかた
く、に踏み分けし數多の
道も街とあり、ありといふ
なる逆水も俊成卿の比興
とはなりぬ

記 遷 堤 花 夕 之 遊

高 雲 外

雪耶雪に非ず雪耶雪に非
ず漢々たる一色吾其花爲

○記 遷 堤 花 夕 之 遊

○足 羽 山

紙の製造を以て有名あり
足羽山 是市街の南に在り山の中腹に足羽神社あり
り左右に酒樓を列ねたり招魂社は戊辰の役戦死者
の靈を祀る其他社殿堂宇所々に點々す山頂に男大
迹皇子(繼體天皇の御事)の石像を立つ樹木鬱鬱とし
て櫻楓を交へ殊に光景たり花期來遊するもの頗る
多し
三國は九頭龍川口の東岸に位し其港を既井港といふ
灣内水淺くして巨船の投錨に便ならずと雖も福井に
上るの咽喉を扼し國內の物貨常に輻輳す敦賀へは流
船の往復するものあれども冬季は時々杜絶すること
あり三國社は境内古樹繁茂し樹間より港口及び北洋
を一望し風景最も佳なり九頭龍川上に大野あり奉書

地 方 誌

るを知る也月光水を射波
光花を浮べ月花水と映發
す之れを水晶宮と謂ん乎
將た之れを銀世界と謂ん
乎一身飄々恍として鶴に
跨がりて風に御し玄圃闕
苑の間に遊ぶ者の如き也
光色空明の中四顧徘徊
として人を見ず唯だ冷香
肌骨に沁するを覺ゆる而
已

鹿島紀行

芭 蕉

袖羽二重の産を以て知らる
(敦賀)は國の西部に在り敦賀灣に臨み灣内水深く北陸
第一の要港にして船舶常に輻輳せり是より瀛車時程
十六時十五分にして東京に達するを得べし其北端の
金ヶ崎に新田義顯の戦死せし城址あり東に氣比の松
原あり一勝景にして万葉集にも此地を詠せし秀吟多
し古へ渤海使の客館ありしといふ

若 狹

若狹は東西南の三面は山脈重疊し其海岸は岬灣出入
して犬牙の交るが如し國內狹くして平地少く地味ま
た礫礫なり
(小波)は敦賀を距る十二里餘にして常に涼船の往復あ

山 陰 道

洛の眞室須磨の浦の月見
に行て、
松かげや月は三五夜大
納言」といひけむ、狂夫の
昔しもなつかしきまゝに
此秋鹿島山の月見んとて
思ひ立つ事あり、伴ふ人二
人ひとりは浪客の士、一人
は水雲の僧、僧は鴉の如く
ある墨の衣に三衣の袋を
襟にうちかけ、出山の尊僧
を厨子にあがめ入れて脊
中にせおふ柱杖曳ちらし

○鹿島紀行

り若狹塗を以て知らる此國は魚族に富み殊に鯛は此
國の名産なり
北陸道の氣候は西南諸國は稍暖なれども東北は寒氣
強し殊に越後は有名の雪國あり概ね極暑三十四度極
寒凡零下四度なり

○山陰道地方

山陰道は中國山脈を以て山陽道に接し北方に向ひて
漸く緩斜す故に河流は悉く此山脈より發して日本海
に注ぐ道内山多くして平地少し海岸は平直にして關
崖多く港灣に乏し要するに本道は山嶽各所に起伏す
と雖も高山の稱すべきもの亦く又長流に乏しく獨り
江の川あるのみ

丹波

て、無門の關もさはるものなく、天地に獨歩して出でぬ今ひとりは僧にもあらず俗にもあらず、鳥鼠の間に名をかうふりの、鳥さき島にも渡りぬべくて、門より船に乗りて、行徳といふ所に至る、船をあがれば馬にのらず、細腰の方ためさむと歩行よりぞ行く、甲斐國よりある人の得させる、槍もてつくれる笠を、おのく、轡さよろひてやはた

丹波は本道の東端に在り山脈は國の南部を東西に亘り丹後の境には有名なる大江山あり河流は東南北の三方に流出す保津(桂川の上流)佐治(加古川の上流)及吹和知(由良川の上流)三川是れなり國産には牛煙草栗等あり
(龜岡)は明智光秀の築きし城地にして舊名を龜山と稱す保津川町の北端を流れ京都大坂に通ずる舟楫の便あり京都を距る六里餘あり福知山は山陰道の衝に當り音無川其西を貫流して舟筏を通じ商業隆盛の地なり龜岡を距る十五里餘あり篠山は西南部の名邑にして佐治川の支流ある久下川の流域にあり

地方誌

山

陰

道

と云ふ里を過ぐればかまがいの原といふ廣き野あり春旬の千里とかや目も遙に見渡さる、筑波山むかふに高く二峰ならび立てりかの唐士の雙劍の峯ありと聞えしは、盧山の一隅あり
雪は申さず先むらさきの筑波かな
とは、我門人嵐雪の句なり、すべて此山は日本武尊の言葉をつたへて、連歌す人

○鹿島紀行

丹後

保津川は桂川の上流にして源を丹波桑田郡に發し山城葛野郡にて清瀧川と合し西南に流れ瀬に至りて淀川とある急流にして水清く玉の如し瀬あり瀧あり且つ巨岩水中に起伏す初夏の頃は西岸の躑躅咲き亂れて風景佳絶あり
丹後は與謝海深く陸地に侵入し成生岬と鷲岬とは東西相對して灣口を扼す河流は悉く南より流れ來りて海に注入す由良河域最も大あり
(宮津)は國中第一の都會にして灣の西部に在り特別貿易港にして市況頗る殷賑あり灣の東部に舞鶴港あり舊名を田邊といふ港内水深く大船巨舶の碇繋に便な

○保津川

地 方 誌

のはじめにも名づけたり
和歌なくばあるべからず
句なくは過くべからず
に愛すべき山の姿なりけ
らし秋は錦を地に敷けら
んやうにて爲仲が長櫃に
折入れて都の土産に持た
せたるも風流にくからず
さちかう女郎花かるかや
尾花みだれ合て小男鹿の
妻戀ふ聲いとあはれなり
野の駒所得かほにむれあ
りく又あはれあり日既に

り海軍鎮守府の豫定地にして其繁華宮津と並び稱せ
らる宮津の東方六里にして京都を距ること二十五里
なり此國は蠶業盛んにして縮緬は殊に有名なり
天ノ橋立は宮津の附近にあり海水西に向ひて深
く入る故に入江といふ一條の砂洲遠く海中に斗出
し蒼松一帯之れを被ひ遙かに之れを望めば浮橋の
如し故に天の浮橋ともいふ風景佳絶我國三景の一
なり

但 馬

但馬は海岸小屈曲ありと雖も良港に乏し國內又山多
く朝來河谷は南山陽道に通ずる街道にして稍々平な
り

山 陰 道

暮れかる、程に利根川の
ほどりふさといふ所につ
く、此川にて鮭の網代とい
ふものをたくみて、武江の
市にひさぐものあり、宵の
程その漁家に入てやすら
ふ夜の宿屋し月くまなく
暗れけるまゝに、夜船さし
くだして鹿島に至る、晝よ
り雨しきりに降りて見ら
るべくもあらず、麓に根本
寺のささの和尚今は世を
遁れて此所におはしける

○鹿島紀行

(豊岡)は京極氏の舊藩地にして神戸を距ること三十九
里此地専ら柳行李を製す出石は其東南にあり陶器を
以て著名なり
豊岡の北方に湯島温泉あり有名ある立武洞は其南方
にあり生野礫山は朝來河谷にあり金銀を産すること
夥し牛は此國の特産物なり但馬街道の傍ら白國村の
山腹には白國梅林あり

因 幡

因幡は土地狭長にして南方には山又山を疊み海岸は
平坦にして出入極て少く従て良港に乏し河流は短く
且つ急にして賀露川(千代川)の流域稍開く此谷は山陽
道に通ずる通路にして姫路に至る三十里あり此國海

○天ノ橋立

産物多く殊に白珊瑚を著名ありとす
(鳥取)は池田氏の舊藩地にして鳥取縣廳の所在地なり
其西方に湖山池あり周回三里餘風色佳絶市人の杖を
曳く者多し鳥取の東北に岩井の湯治場あり賀露港は
加露川口にあり

伯耆

伯耆は中央に大山の秀峯聳立し天神日野の灌漑地は
地勢平坦なり夜見ヶ濱は出雲の島根半島と相對して
西に内海東に美保灣を分つ其先端は即ち中江海峡に
して島根半島を距る僅かに數町なり
(米子)は國內第一の都會にして國道の衝に當り夜見濱
の南部出雲の境に接し中海に臨む此地の近傍は平地

地 方 誌

といふを聞きて尋ね入て
ふしぬ頗る人をして深省
を發せしむと吟とけむ、暫
く清淨の心を得るに似た
り曉の空いさゝか晴れぬ
るを、和尙おどろかし玉ふ
れば人々驚き出でぬ、月の
光雨の音、たいあはれある
景色のみ胸に満ちて、いふ
べき言の葉もあし、はるば
ると月見に來たるかひな
さこそ、はいさきわさきれ
ど、かのちにかしの女すら、

山 陰 道

時鳥の歌得讀まで歸りわ
づらひしも我爲にはよき
荷擔の人あらむ如し
月はやし梢は雨を持さ
がら 芭 蕉
雨に寝て竹かきかへる
月見哉 曾 良
御嶽新道 中村敬宇
余江戸に在りし日より久
しく已に御嶽新道の勝峽
に甲たるを聞く矣丁巳の

○御嶽新道

にして米穀に適す境は夜見ヶ濱の西北端に在り市街
頗る賑はにして其港灣水深く大船巨舶直に岸に着す
べく東は致賀伏木新瀉等は馬關と流船の往復あり
(倉吉)は天神川の流域にある都會にして木綿及び飛白
を以て名あり其西方に船上山あり其脈西に延びて此
國第一の高峯大山を噴起す其山麓は即ち大山の原と
稱し毎年牛馬市を開く京坂地方の牛は此地方より輸
送するもの多し日野川其西を流る此谷は又山陽道に
通する要路なり

船上山 大山美徳山と並び稱して伯耆の三山と呼
ぶ後醍醐天皇の隠岐より遁れて伯耆に入り給ふと
き名和長年擧族奉戴して山上に行宮を建て遂に近
國の王師を招致せし古戰場あり北は大山に連り斷

○船上山

崖峻坂要害の地たるを以て其名殊に著はる

出雲

出雲は山峰波濤の如く國內に起伏し三瓶山は其脈を南北に延き岩見どの國境を劃す島根半島は山多く西の方杵築の近傍より東北に向て起り十六島を突出す其れより折れて東方に斗出すること十餘里にして地藏岬に終はる三保瀨は其南端に在りて美保灣を抱く神門川及び簸川の下流沿岸の地は稍々平坦にして地味肥沃あり

中海は周回十六里夜見濱及び島根半島より包圍せらる内に二島を入る半鹹半淡の湖水にして貝類鰻鰺章魚鯖等を産す中江の瀬戸を経て美保灣に至

地方誌

十一月命を蒙りて峽費に督學たり翌年二月任に至り屢ば往遊を欲すれども輒ち事の礙ぐる所と爲り歳を経て未だ果さず蓋し余の御嶽に於ける鬼神有て之れを斬む者の如し石野鳳岳は峽人也常に謂て曰く子若し行かば吾請ふ導を爲さんと松浦子基も亦以て言と爲す遂に戊午正月某日を以て依田某鳳岳子基と偕に行き質明

山陰道

に寓を發し府城の北門を出で行くこと數里地勢坦夷北に方りて衆山有り甚だしくは高峭あらず而して重沓回互隱秀致有り中に一條の路を通じ轉環登る可く老松蒼蔚山谷に彌滿す和田嶺と曰ふ嶺頭に至るに比び朝暎を漏し天氣清朗なり顧みて芙蓉を見れば秀色亂松參差の間隠見す矣嶺を踰て北望すれば眼界忽ち濶く田

○御嶽新道

○中海○松江

る往昔は安海湖と中海と相通して意宇の海と呼びしが現今は泥砂其間に沈積して川を以て相通す(松江)は宍道湖の東岸にあり松平氏の舊藩地にして山陰道第一の都會なり島根縣廳の所在地にして商賈繁盛鳥取を距ること三十里東西漁船の往復あり湖水の鱸鰻白魚等は松江と共に其名高し此地の四近は土地平坦にして其近傍は陶器を出す東部には安來廣瀬の諸邑あり廣瀬は松平氏支藩のありし所に於て其東西に富田城址あり尼子氏が據て勢威を中國に振ひし地なり是より南方は山岳夥しく人參を産す神門川及び簸の川の灌域は山陰道中の最大なる平原にして所謂神門十万石とは此流域地に生ずる米の産出高を謂ふなり此平原の西北隅杵築に出雲の大社あり

地 方 誌

膝の間を行く敷峯前に當り拱する如く揖する如く中に玉立壁微雪を戴く如き者有り高砂山と曰ふ漸く近づけば則ち山皆な白石而して碎けて沙渚と爲り徑間に遍布す余依田某と攀ちて而して上るに砂流れて足を受くに堪へず一足將に舉らんとして一足己に送す手を引て傍邊の石を攀づれば則ち石轉して而して下る鳳岳子基

石 見

り参拜の旅人輻輳し此地爲めに繁昌す美保關は半島の東端に在る港にして船舶の碇泊極めて便されども灣内水狭きが故に其繁華は對岸ある境港に劣れり
石見は山嶺國中に起伏し平地極めて少く交通頗る不便なり獨り江の川及び高津川の沿岸のみ稍々開け又水運の便を助くるのみ
(濱田)は石見第一の都會にして海に臨み馬關及び境港の間に漁船の往復あり大森は三瓶山の西に在る山間の都會にして往時より銀を出す温泉津は其西方海岸にあり西北温泉津港に接するを以て水陸の交通便利にして浴客殊に多し

山 陰 道

山行に慣れ早く已に上頂に在り俯して吾輩が顛顛狼狽之狀を視指して以て笑と爲す也是れより山麓を繞つて而して行く左右回環して東西を辨せず忽ち一潭を得兩岸皆な石蒼勁にして皴有り小松其罅に交絡し直下數仞水勢甚だ峻旁溢して潭と爲る長潭と曰ふ余奇々と連呼して已ます鳳岳曰く猶ほ未だし也と更に數折す不動瀧

隱 岐

津和野は北方に笹ヶ谷と稱する銀山を控へ山間の小都會あり津和野川に跨り防州山口に至るの要路にして一商區をなす高津は其河口高野川の西に在り長州に至る街道にして其高津山に柿本人麿を祭る神社あり眺望殊に宜し
隱岐は出雲の北方に在る群島にして其骨格は火山岩より成り島根縣に屬す西島知夫島及び中島島後の四大島より成る後醍醐天皇の黒木御所の舊趾あり中島には後鳥羽上皇の御陵あり島後の南岸には西郷港あり灣内水深く出雲の美保關を距る十八里あり此の地は地味極めて礪確にして耕作に適せざれども魚族夥

○御嶽新道

地 方 誌

と爲す水中大石横はる馬
十人を坐す可し前に巖崖
有り高低相錯る猿巖と曰
ひ寒山拾得巖と曰ふ昔な
形に由て名を得水其下を
経流々として懸有り行く
こと數折嶺斷へ望開き一
水前に當る橋有り渡る可
し有年橋と曰ふ又迂廻し
て而して進む水有り巖足
よりして而して來る橋有
り柴橋と曰ふ遙に左に一
峰の雲表に突兀たる者有

しく繁殖し殊に鰯は此の地の名産にして朝鮮支那等
に輸出すること盛んあり其他海草類又多し
山陰道は南に山を負ひ北は海に向ふを以て寒氣強く
山間の地は積雪深し極暑凡そ三十三度極寒凡そ零下
二度あり

○山陽道地方

山陽道は中國山脈を以て山陰道と脊を合せ南は瀬戸
内海に臨む地勢は大抵山多くして川は北方の山脈よ
り發して南に流る平地は極めて少く海濱に稍々廣き
平地あるのみ海岸は出入甚しく頗る港灣に富み海上
には大小の島嶼甚布せり

山 陽 道

るを見る覺四峰と曰ふ橋
を渡りて而して左するに
水益々駛くして巖益奇か
り鳳岳曰く是れよりして
而して石門に至るまで最
奇絶の處と爲す巖足を繞
り水に沿ふて而して行く
に一路蒼崖束ねたるが如
く對峙數丈翠松類石延蔓
際落、丹青綺繡、明淨愛す可
し而して向に見る所の覺
圓峰時に左し時に右す路
の迂徐宛轉して定らざる

○御嶽新道

播 磨

播磨は山陽道の東端を占め海岸一帶播磨灘に臨む加
古川市川楫保川及び千草川(有年川)の流域地開け運輸
の便あり
(姫路)は國中の都會にして市川に跨る汽車時程二時
十五分の所にあり市の北端に舊姫路城あり天主閣雲
表に聳え老樹之れを圍みて白鷺常に群を爲す故に古
へより白鷺城の名あり第十師團の衛戍部を茲に置く
是れより北は播但鐵道によりて二時十一分にて但馬
の生野に通す可く西北は鳥取及び津山に通する要衝
にして市況頗る繁華革細工を以て名あり市街の北方
に書寫山あり辨慶學問所の硯水及び鳥帽岩あり土地

○氣 候

地 方 誌

者と爲す奇なる哉行くこ
と數百歩接待亭有り左は
深淵に臨み右は巖壁に迫
る亭に登りて而して望む
に景極めて多く樓記する
に逸わらず傍に碑有り七
十許りある老人の像を刻
す骨格匪凡かり乃ち新道
を開く所の圓右の像也圓
右は黒暈爲り自ら錢財を
捨て斯道を開く豈に巨靈
手を斯人に假り以て千年
未發の奇を抉する歟路又

幽雅にして夏口暑を避くるもの多しといふ
姫路より西揖保川を越えて瀬油に有名なる龍野あり
龍野の西有年河口に赤穂あり佳良ある製鹽を産す此
地は又四十七士と共に其名高し姫路の東方瀛車時程
一時十七分の所に明石あり我國中央標準時の子午線
に當れり帆木綿及び明石縮を産す港内船舶の出入に
便あり

舞子の濱 は海濱の名にして古松蟠屈し或は起て
舞ふが如く或は臥して眠るが如し翠色は白沙と相
映じて風光明媚眞に天然の美術を盡したるものゝ
如し春夏の二季遊人の來りて其景を賞するもの頗
る多し
高御位山 は中國街道に當れる阿彌陀村の北に在

山 陽 道

左右に轉じ巖腹を度りて
而して下る石壁突出して
道に當る墜つる若くにし
て復た倚る左に巨石あり
て之れを受く其の數人の
來往を通す可し青苔紫草
石上に繁絡す數十年の物
あるを知らず是れ所謂石
門也石門を過ぎて而して
左すれば大石礫河溪上に
横たはる者其幾ばくなる
を知らず而して石壁峻絶
にして削成する如く仰ぎ

○御嶽新道

り山は悉く巖石より成り頗る怪巖に富む山頂に到
れば南海を隔て、阿讃の巒峯を遠望し風色また秀
麗かり又阿彌陀の近傍海濱は所謂播州名所巡りと
稱する尾上の松尾上の鐘會根の松高砂の松石の寶
殿等巡覽すべきもの多し
姫路の南に飾磨あり商業繁昌の地たり瀬油を以て有
名ある龍野亦名邑なり其南に室ノ津あり

美 作

美作は四境山嶽を以て圍まれ旭川(西大川)の上流(高田
川)及次吉井川(東大川)の上流(津山川)は流域稍々開け灌
漑運輸の便あり
(津山)は國の中央に在りて津山川の北岸に位す姫路を

○舞子の濱 ○高御位山

地 方 誌

視れば丈を計らず左に奇峰有り拔起して頭上を壓し猿鳥も亦攀づる能はず乃ち覺圓峰也此れを過ぎて而して北すれば巖徑狹深蜿蜒として而して上る華表有り朝天門と曰ふ是れよりして而して下る左して林中に入り荆榛を披いて而して進む雪虹瀑を觀る又少しく北して而して左せしに巖石突怒し水流交衝し左邊右激響林壑

距る約二十一里松平氏の舊城地にして足袋製造を以て名あり津山の西一里に院の莊あり兒島高德が櫻樹に詩を題せし舊蹟なりといふ作樂神社あり和氣は津山川と吉井川との合流地にあり其北七里に鷺ノ湯温泉あり
天神山 は津山川を遡る一里餘にあり川に臨み奇巖峨々として山をなし岩石の間に青松綠樹雜生し風致清雅を極む夏日舟を其流れに泛べて奇景を賞するものあり
津山の東南五里に倉敷あり津山川の支流なる倉敷川に依り備前に通ずる舟楫の便あり

備 前

山 陽 道

に霞ふ巖を眩巖と曰ひ深を仙娥と曰ふ余石上に攀ぢ以て其注射の勢を觀んと欲す而して足を置くの所無きに苦む風岳雙手を以て吾趾を握り揪して而して上々予石を抱きて而して上瞰す焉激湍飛流湖海怒溢大ある者珠の如く小なる者沫の如く毛髮爲に悚す又行くこと數折則ち地忽ち夷かに景忽ち曠く田疇繡錯遠山數片畫圖

備前は海岸出入多く就中小島半島は國の西南隅廢戸の地頸より東方に突出する山多き地にして内に小島灣を抱く吉井川及び旭川の流域は土地開け灌漑交通の便に富む

(岡山)は舊池田氏の城市にして山陽道屈指の都會なり旭川に跨り北に岡山城あり此の城は一に鳥城と稱す岡山縣廳の所在地にして第三高等學校醫學部の設けあり氣車時程五時六分にして神戸に達するを得べし市の東隅に後樂園あり河口は即ち三番港にして神戸との往復盛んなり

後樂園 は元と借樂園と稱し日本三公園の一にして西に旭川の清流を瞰下し西南に鳥城の天主閣を望み東北は平夷にして園外の諸峰を遠望し風景の

○御嶽新道

○天神山 ○岡山市 ○後樂園

地 方 誌

の如く茅舎竹屋處々に點綴す猪狩村と曰ふ一路曲々人を引て勝に入る所謂千巖競ひ秀で万壑争ひ流るゝ者已に厭に屬す是に至て忽ち遠山の淡岩田家の蕭散なるを見反つて風光一新せるを覺ゆ造物者布景の妙一に斯に臻る嘗て左氏が大戦を紀するを讀む龍戰虎鬪風雨交も馳せ讀者色動く而して未段は間淡の筆を以て之れを

佳絶あること宛然畫圖の如し又國內には三勳祠あり和氣清磨楠正成兒島高德を祭る四時遊歩を試むる者頗る多し
牛窓は其東に在り國內の要津なり三石は國の東に在り蠟石を産し又盛に煉瓦石を製す其東播磨の界に有名なる舟坂山あり又三石の西長船は刀劍を以て伊部は陶器を以て世に稱せらる

備 中

備中は東西狭く南北に長し其北方は地勢平坦ならずと雖も大川(阿邊川)其中央を流るゝが故に灌漑の利多く頗る舟楫の便に富み大川の沿岸は綿及び蘭蓆を産すること夥し又海岸は製鹽業盛んなり一種の團扇を

山 陽 道

結ぶ何等の神品を豈に此等の山水を以て粉本と爲す邪予嘗て謂ふ文章の妙は一の轉字に在りと今新道の勝を觀るに其妙も亦然り行くこと里ばかり忽ち石燈數百級廟宇嚴整にして樹林の間に掩映するを見る乃ち嶽祠也歸路は故道を取る故道は未だ開かざるの前嶽祠に至るの路也風景淡冶愛す可し右には信濃の衆山を望み翠

以て有名ある庭瀬の北に吉備津神社あり結構頗る洋麗偉觀にして山陽道中嚴島神社に亞ぐ大社あり玉島港は水深くして船舶の碇繋に便あり岡山市を距る瀛車時程五十分の所にあり北は高梁川邊の諸川と舟楫相通し運送至便にして岡山に次ぐの商地なり笠岡港は水淺く船舶の投錨に便ならずと雖も亦國內の要津なり國の中央高梁川の東岸に高梁あり昔しは松山と稱し板倉氏の舊領地あり倉敷は備中南部の商區にして小島半島の咽喉に位す

備 後

備後は山脈國の中央を東西に連亘するを以て地勢自ら南北に二分せらる南部は即ち蓋田川の流域にして

○ 網 嶽 新 道

地 方 誌

屏を列ねたる如く而して
左は則ち新道所經の山爲
り覺園峰時に其頂を樹林
の間に露はす余體羸弱に
して遠行に堪へざるに此
日健歩甚だしくは疲れず
舎に歸れば則ち初更あり
嗟余峽に官して殆んど且
つ一歳而して御嶽の勝今
日始めて吾手に落つ矣任
滿ちて東歸するも復た憾
み無し是夜頽然として寢
に就き無魂猶存し猶ほ巖

北部は三次川の流域あり
(福山)は蘆田川の東畔に位し市中般富線綿の産を以て
名あり岡山より汽車時程二時十二分の所にあり此よ
り西方に尾の道あり向島因島等其前灣に楸はり自ら
一港をさし船舶の出入多し輦の津は福山の正南五里
の海岸にあり前に仙醉辨天玉津の諸島を擁し内海の
要津にして保命酒を産す
三原は尾の道を距る西方三里餘に在り山陽道中名港
の一なり
西野梅林 は三原の西に在り昔し菅公筑紫へ謫遷
の途次手づから一株の梅を植えしものなりといふ
地は三原の舊城と對し東南は向島院島佐木島生口
島其他大小の島嶼を望み其の間の一海峡は宛然小

山 陽 道

壁の間を繞るこどき也

姨捨山賦

橋 良

更科の月明らかなる八月
八日の夜姨捨山に登れば
鏡臺山は冠が岳のむかふ
にたてたり筑摩川花やか
に麓をめぐり雲井の橋は
名のみして水上の月をや
とす田毎の水の音はひめ
へに山の松風にしらべあ
へり寶が池蛙池更科近く

○姨捨山賦

湖水の靚をさし風景頗る秀麗なり又三原市街の後
山愛宕山は眺望開豁にして近傍十勝の名あり
北部三次は三次川の沿岸にあり山間の小都會をれど
も出雲及び石見より廣島尾の道に通ずる咽喉に當り
交通頗る頻繁あり

安 藝

安藝は國中連山浪の如く起伏し南部太田川西條川の
沿岸稍平夷なり北部は吉田川の流域にして山間の豁
谷あり海岸出入極めて多く港灣に富めり
(廣島)は淺野侯の舊城地にして太田川に跨る廣島縣廳
の所在地にして第五師團司令部を置く又控訴院の設
けあり中國第一の大都會なり神戸より汽車時程十二

○西野梅林 ○廣島市

地方誌

流れ、稻荷山入橋の里川中島は白雲のたち居に見え隠る吹く風精神をせめり粥をすゝり香を炷してしばらく石上に心をすませず、

日光街道

佐藤一齋

十三 間雨霽鶏鳴に發す前夜宿 監橋伊軛忽ち睡り忽ち覺め東も亦漸く白し堤に循ふて而して行く堤外は即ち利根川あり時に

時四十分の所に在り北部の可部を経て出雲石見に入るの要路に當り交通頻繁市街頗る殷賑を極む綿織帳傘藥罐を産す明治廿七八年の役あるや 聖上親しく此の地に大營を進させ給ひ且つ臨時帝國議會をも徵集し給ひしを以て其名益す世に知られたり

(宇品港)は廣島の南に在り汽船神戸馬關間を往來し山陽道屈指の要津あり西に宇品島あり曾て石川丈山が風月無邊塵外境晚來江上喚舟還と其景を賞せしことあり港の西南に嚴島あり

嚴島 日本三景の一にして市杵島姫を祭るを以て宮島と通稱す周圍七里餘紅樞溪を蔽ひ青松枝を交へ風光佳絶筆紙に盡し難し社殿は崖側に靠りて水に架し潮満るときは殿廊は皆水面に浮ぶが如く

山陽道

帆橋を看る栗橋驛に抵れば關津有り是れを武總の界と爲す關南ある伊坂村に静女の墓有り老杉輪囷大さ七抱高さ九仞可り枝條旁午鬱蟠し中身科空なり試みに其根を鋸して之れを喚ぐに氣烈し蓋し六百年外の物既にして杭渡す中田驛たり驛北に光了寺即ち静女香華の處舞衣一領護身刀一口馬籠一雙を藏す舞衣は紺色の絹に

○日光街道

殆んど歴中樓の觀あり平清盛の造營する所にして毛利元就が陶時賢を討ちし古戰場なり 江田島は其東廣島灣の中央に在り海軍兵學校を置く其對岸は吳港にして海軍鎮守府の所在地なり灣内水深くして能く風波を防ぎ實に我國第一の良港ありといふ其南に倉橋島あり倉橋島と本地との間を音頭迫門と云ふ平清盛の開鑿したる所あり

周防長門

周防長門は南は周防灘西は櫻灘北は日本海に瀕し其中央には中國山系の餘波東北より西南に馳せ地勢從て東西に分る東に在るものは周防にして岩國川及び佐波川の流域稍々開け西に在るものは長門にして地

○嚴島

地 方 誌

して肩背に日月七星蓬萊の雲鶴を繡す傳へて後鳥羽帝の賜ふ所と爲す然否を審にせず刀は銹澁甚だしく鎧剣は全木をもて之れを爲る材楓に類す蓋し武藏鎧と稱する者傳へて以て源豫州の物と爲す氣ふ可し寺は舊と伊坂村に在り後此に徙す驛東迂路して大山村に入る香取祠有り古櫻大さ六抱舊幹頗小し葉已に抱可り傳へて

勢甚だ狭く山峯起伏し従て長流大河を成さず然れども阿武隈川域は灌溉の便あり(周防、山口)は廣島を距ること三十二里山口縣廳の所在地にして山口高等學校の設けあり其東南五里に三田尻港あり汽船往復盛んにして近傍に鹽田多し東方の海岸に毛利氏の支藩徳山あり此より海岸は東南に向ふ室津港は其南端に在りて長島と相對す其東方に大島あり其對岸に柳井津村あり故に周防の東南端を柳井半島といふ(岩國)は岩國川に在り元吉川氏の城市にして街道の要衝あり西南に錦川あり錦帶臥龍の二橋を架す岩國縮は世に名高し錦帶橋 一名を算盤橋と云ふ岩國町より横山村

南 海 道

平將門の第四子傳眞の手植と云す古河驛東に銚延寺備人熊澤蕃山の墓有り線らずに石欄を以てし碑面に熊澤息游軒伯繼之墓と題す側に一碑有り息游軒妻矢部氏之墓と題す共に筆法勁雋なり驛の北を總野の界と爲す間田驛に宿す潮春雨點と夜露れ月朦朧たり

に涉り川中に石を疊みて四個の橋臺をなし上に半月形の五橋を架す頗る奇觀の名橋あり(長門)は國の東北にある都會にして毛利氏の舊城下あり其の西南隅に赤間關あり六港につぐ要港にして馬關或は下の關の稱あり下ノ關とは舊時周防の南端長島の上の關三田尻の西なる中の關とに對したる名にして之を合せて防長三關の港と稱せり内外の船舶常に輻輳し市況頗る繁華なり良質の硯を産す市内赤間宮あり又安徳天皇の御陵あり東に檜浦の古戰場あり本道の氣候は概溫和あり西部長門の北海に向へる地方は寒氣稍強し極暑凡三十三度極寒凡零下二度なり

南海道地方

○日光街道

○山口市 ○錦帶橋

地 方 誌

城有と聞き土人を賃して導を爲さしむ壠畝の間を穿てば邱樹の鬱然たるを見る前陲に後峻く敗溝水無く殘壘に老松茂密之れを望むに馬鬣の如し内城最も高く頂に鴨脚樹有り高さ七仞に餘る余近づき觀んと欲するに荆棘蹤を無す導者挺を執て左右披拂して而して前む余二生と之れに躡して遂に登り更に其大を試みんと欲す

紀 伊

南海道の紀伊は本州に連続し山多くして平地少きし四國は山脈東西に走り國土の脊梁をなし地勢南に向て漸々緩斜をあす故に河流は四方に流る吉野川を本道第一の大河とす海岸は出入多く北方内海には島嶼散布せり
紀伊は東南西の三面海に臨み北方一部本州に接す吉野山より發する紀の川の谿谷は頗る平坦にして地味肥沃あり又舟楫の便あり其他日高有田日置及び熊野の沿岸は稍々開け何れも舟運の便あり
(和歌山)は徳川氏の舊城地にして現今和歌山縣廳の所在地たり南海道第二の都會にして市街は大坂を距る

南 海 道

導者阻むで曰く樹身の朽空なる處蛇蝎の窟と爲る選づく可からずと乃ち齧らす所の火繩を聯結し逼つて而して之れを圍むに長さ二丈餘を得たり邱北は斷崖際際迅流其下を過ぐ思川と曰ふ源は鶴嶋山に發す西南に流れ栗橋に至りて利根川に入る邱東は稍平なり傳へて廢園とあす巨石有り榛莽の間に臥す凡ろ七皆奇狀を異に

○日光街道

○和歌山市 ○和歌の浦

約十八里紀の川口に位し水陸運輸の便に富み頗る繁華の地あり有名なる紀州密柑綿フランネルを産す和歌山より紀の川を溯ること一里にして高野山あり其金剛峯寺は弘法大師の開基に係る市の西南に和歌の浦あり其東岸に漆器を以て有名なる黒江あり
和歌の浦 は紀伊國の勝地にして謂ゆる日本三景に亞ぐ所とす此浦西に向ひ在田河口と相距ること二里灣の沿海二里許名草山其東を限り洲崎前前に遮り風光明媚畫くが如し聖武天皇此に行幸し名を明光浦と改め給ふ又舊寺の有名なるものは紀三井寺及び粉川根來等あり
田邊港は安藤氏の舊城地にして瀬戸岬其南に斗出し内に田邊灣を抱く是より海岸に沿ふて南進すれば紀

地 方 誌

す其中に扁然不正なる者あり袤五尺廣二尺厚一尺に餘り質極めて堅緻青鐵色にして紫斑一點の蘇苔を受けず碑材に充つ可し聞く城天正二年七月七日を以て陥る故に土人今に至るも星夕に讎を擧げずと云ふ宇都宮驛に抵りて宿す士素の郷たり其父透ひ請し妻と子女とを見る饌頗ふる豊あり又藩人松下周輔來候し話するこ

伊の南端潮の岬に達す此の岬の東西海上は俗に紀州沖と稱し常に風波暴く航海頗る危険あり岬の東ある大島の東端に燈臺の設けあり其東北に新宮あり水野氏の舊城地紀州東南部の小都會にして熊野川の南岸にあり

那智瀑布は大塔峰の東南に聳ゆる那智の山中に懸り其水流れて那智川となり海に注ぐ直下するこ
と八十四丈幅員十八間水岩崖に激し響き數十里に達す是れ日本第一の瀑布とす紀州灘を航行する者天晴れたる時は遙かに雲煙瀰茫たる間に之れを望むを得べし

淡 路

南 海 道

と半夜亦旅中の一適也是日陰翳晚に雨ふる
十五 陰路岐して二とある東は奥州北は日光東驛に抵る山三面を圍み雲冉冉として岫を出づ余佇立して之れを久看し乃ち謂ふ雨山は皆雲山見ること可からず晴山は雲無く山態を成さず但た雲煙流動乍ち顯はれ乍ち隠れ始めて活景と爲る耳と大澤驛に抵る聞く北に入ること

○日光街道

淡路は瀬戸内海の東端を要する一小島あり北は明石海峡を隔て、播磨に對し東は由良海峡によりて紀伊及び和泉と隔り大坂灣を扼す西は鳴門海峡を以て四國に臨み南は紀伊海峡に面す國內山多く平地少きを以て村落は皆海岸に在り然れども地味膏腴にして頗る農作に適し人口の稠密なること本邦第一に居るといふ
國の東南に洲本由良の兩港あり西北に福良港あり國の北端を岩屋といふ明石海峡を隔て、明石及び須磨と相對す此所に燈臺の設けあり此の國は四周水を以て圍まるゝを以て漁業の利少なからず又伊賀野燒は殊に著名なり

○那智瀑

阿波

地 方 誌

三里絹川とさす籠巖ある者有り因て迂路して往て觀る平原を經る者二大谷川を涉り又一原を經大渡驛に出で絹川を得たり兩岸は盤石疊出し高さ者は厦屋の如く平ある者は牀第の如く隆起する者は象背の如く中陷する者は船艫の如く縱横亂整各其態を逞ふす是れを籠巖と爲す溪水其れが爲めに盤束し奔放して龍蛇の勢を

阿波は四國中の東南隅に位し東岸一帯紀伊水道に臨めり吉野川(四國三郎)の流域は土地開け交通運輸の便極めて大あり内地は四國山系重疊し其最高峰を劍山といひ國の西部中央に聳え國中第一の高峰あり吉野川の流域は地味肥沃にして農作に適し殊に我國第一の産藍地たり

(徳島)は蜂須賀氏の舊城地にして本道第一の都會あり現今徳島縣廳を此處に置く市街は吉野河口に沿ひ水陸運輸の便あるを以て商業頗る殷賑あり此の地の阿波縮は其名世に高し此より數里北方の海峡に撫養港あり淡路に渡るの要津にして齋田掘田は殊に著名あり

南 海 道

成し衝激して雪を噴く溪北に三螺巖を見る月山と爲し釋迦峰と爲し鶏嶽と爲し溪西に紅葉爛然たる者を關迦擲山と爲し景佳あり乃ち縮遠鏡を出して之れを望み徘徊刻を移して今市驛に出づ薄暮日光山に至り法王の殿廡に寓す是夕月朗に溪聲淙然たり

大 瀧

○大 瀧

り鳴門海峡は潮流甚だ急にして岩礁に激し爲めに渦を成す其響き雷の如し航行尤も危険の所とす

徳島の南海岸に勝浦那須の諸流ありその沿岸に小松島富岡の諸邑あり更に南海岸に沿ふて西に巡り土佐の境に至れば瀬浦あり數多の小嶼出沒す沿海の地は農商業及び漁業盛んにして兼て製鹽業に従事する者多し

讃 岐

讃岐は東北西の三面は瀬戸内海に臨み讃岐山脈西より東に連亘するを以て地勢漸く北方に傾き諸川は皆北流して瀬戸内海に入る然れども水淺くして舟行に便ならず此等の流域は地味肥沃にして米麥甘藷綿藍

○高松市

地 方 誌

齊藤竹堂

仙臺府城之西八九里峯巒相接し溪水盤桓し皆以て遊覽す可し而して秋保の大瀧を最勝と爲す羽山の麓に發して名取川の源と爲る凡そ此の間境僻にして而して勢阻幽澗隱逸の士の樂む所也相傳ふ往時平氏の將士西海沈没の餘或は迹を此に晦まし子孫相繼ぎ世と接せず數百年を閱して始めて我藩の版

等の産出に適す

(高松)は此國沿岸の中央部に位す現今香川縣廳の所在地にして水陸運輸の便あるを以て百貨輻輳し商業頗る盛んなり市の東北に五劔山あり山西に屋島あり源平の古戰場にして安徳天皇内裡の蹟今尙存せり屋島以東の海岸は出入甚しく觀音岬大串岬等内海に斗出す觀音岬の東北海中に醬油製造を以て有名なる小豆島あり (丸龜)は高松より西七里餘海岸平野の内に入り第十一師團司令部を設く瀛車は此所より發して西多度津を経て琴平に至る琴平の西に象頭山あり山形象の頭に似たるを以て名く山上に琴平神社あり(金比羅宮)賽客陸嶺として常に絶へず市街之れが爲に繁華を極む

南 海 道

國に入ると世以て之を漢土の武陵桃源に比す焉余天保某歲を以て往て遊ぶ某日府を出で湯本に至て宿し翌名取川に沿ふて而して行く坂路崎嶇乍ち上り乍ち下る二驛を経たり長袋と曰ひ馬場と曰ふ山愈よ深く地愈よ僻不動祠を得祠北は透迤として而して降る忽ち洶々として聲有り海濤驟かに作るが如きを聞き驚て而して之

伊 豫

伊豫は四國の北部に在り地形は南西より東北に延長す四國山脈東より南に連亘して土佐の境を劃す地味は東部は一般に肥沃かれども西南は概ね肥瘠相半ばす海岸は出入多く島嶼の海面に出沒すること讚岐に同じ (松山)は久松氏の舊城地にして現今愛媛縣の所在地なり市の東方一里の所に道後の温泉あり四時浴客絶へず又市の西北一里半の海岸に三津ヶ濱あり船舶の往來頗る頻繁あり此等の地方は鐵道相通じて市街極めて繁華なり三津ヶ濱の海上には幾多島嶼相列り風光佳絶あり

○大 瀧

地 方 誌

を願みれば四山環翠万木
參天陰寒晦冥奇鬼毒龍の
窟に入る如し其西石壁東
立して瀑布懸る焉直下二
十餘丈廣さ三の一なり簾
の垂るゝ如く玉の碎くる
如く銀河天に落つる如く
其初尙ほ小中間石に觸れ
一激して而して大再激し
て而して倍す大再激の後
は散じて雲霧と爲り紛紜
混蒙碧潭其下に在り竊然
底無し激賞の際清風乍ち

三津ヶ濱の東北の海岸に今治あり船舶常に輻輳し國
中必要の商地たり是より海岸を東北に巡れば西條あ
り其東南四國山脈の麓に別子銅山あり西南に八幡濱
宇和島あり宇和島は佐田岬以南佐賀關海峡に而する
處に在りて宇和島灣に臨む伊達氏の舊城地にして商
業頗る繁盛西海岸第一の要港たり紙及び織物を以て
名産とす

土 佐

土佐は四國第一の大國にして弓形をなし北方に張る
國內山峰重疊起伏して平地に乏しく殊に東北の國境
は峻峻なり河流は概ね細流にして南流土佐灣に注ぐ
獨り吉野川の上流のみ東流して阿波に入る海岸一帯

南 海 道

至り飛抹人に獲ぎ衣襟之
れが爲めに淋漓毛沫髮堅
蒼海の底を穿ち而して雪
山の頂に登る如し余又林
樾を排し峻巖を躡る近く
瀑下に就て彷徨し縦覽以
て其勝を悉さんと欲す而
して天方に暮れ溪路險惡
歩を措くに由無し悵然と
して歸る均しく是れ勝境
也桃源は漁郎歸棹の後一
人の至る者有る靡く而し
て淵明の文能く後世をし

○大 瀬

○高知市

の地は平夷なれども却て礫礫にして内地は肥沃なり
(高知)は境川の三稜洲に在り山内氏の舊城地にして現
今高知縣の所在地たり水陸運輸の便に富み商業頗る
殷賑あり其西岸に浦戸あり一小津なれども往昔長曾
我部元親が四國全島を統治せし所なり此に燈臺の設
けあり

高知の東方物部川の河口に赤岡あり其東南に安藝の
名邑あり室戸岬の西は即ち土佐灣にして天武天皇白
鳳十三年四國の地大に震ひ土佐の南部一帯陥落し因
りて此の灣を造れりといふ高知の西南に高岡須崎の
兩邑あり其東南に突出する岬角を龍岬といふ其海上
には幾多の島嶼出没せり此國は水産物多く殊に鹽節
珊瑚は名産たり且つ鯨鯨の如きも紀州と並びて國益

地 方 誌

て目を拭はしむ今此地や
高貴造り焉士庶遊ぶ焉而
して未だ文以て之れを傳
ふる有らず則ち幸不幸果
して如何ぞ哉抑も造物者
の此地に於けるや之れを
愛惜して而して世に顯は
るゝを欲せざる耶然らず
んば何ぞ之れを數千年の
前に設け而して之れを數
千年の後に發し又高貴士
庶をして至らしめ而して
未だ一能文の士をして至

をなす鮮からず又内地の山間には茶樟腦甘藷煙草藍
綿等を出す
本道の諸國は氣候概ね温暖なり但紀伊伊豫の山地は
稍寒冷なり極暑凡三十三度極寒凡零下三度あり
○西海道地方
西海道は我國の西南に位し琉球諸島と相連り列島長
く南に延びて新領土臺灣に至る九州は古へ筑紫の島
とも云ひ或は之れを鎮西とも稱せり地勢は一般に山
多くして平地少し河水は四方に流れ海岸は出入多く
港灣に富み西南の海上には大小の群島散在せり平野
は筑後肥前及び肥後にあり是等よりは多く良米を産
す

西 海 道

らしめざる也然らば則ち
其記以て淵明に匹し而し
て愧ぢ無る可き者知らず
將に幾千年の後何人の手
を待んとする

若らぬ火

橋 南 谿

筑紫の海に出づるしらぬ
火は例年七月晦日の夜な
り昔より世に名高きもの
にて今も九州の地にては
諸國より此夜は集り來り

○しらぬ火

筑 前

筑前は往昔太宰府を置きて全島を統治せし所にして
其舊跡尙ほ存せり又古來外交の衝に當り其故跡甚だ
多し

(福岡)は博多灣に臨み博多と合せて一市とし黒田氏の
舊城地にして今は福岡縣廳の所在地たり此地古へ屯
兵を置き外寇に備へしことあり故に博多を石府城と
も云へりちとりなく袖の濶をどひこかし唐船のよる
の寢覺めに定家の詠みしを以て証するに足る
箱崎は博多を距る十八丁近傍名勝多し箱崎八幡宮は
神功皇后玉依姬命を奉祀し其額の敵國降伏は延喜帝
又は醍醐帝の宸筆なりといふ會て工作に釘を用ひず

○福岡市

地 方 誌

て見る事なり京都の人に
見ること少きは益後の故
あるべし京より九州に下
る人々も多くは皆商人の
類なれば益前に京都へ歸
るやうに上り來り又下る
時も京都にて益を仕舞ひ
て後下る故に八月に入り
てやうく九州に下り着
く此故に七月晦日の頃は
上方の人の彼の地に止り
居る者甚だ少し予は期か
る奇異の事のみ探らんと

社殿の壯嚴舉て盡し難し
香椎には又神功皇后を奉祀す本社は日本四所宗廟の
一に居る椎茸を名産とす近傍に草場山温泉あり
名島は香椎を距る十八丁許にあり多々良鉄橋よ
り海岸を望めば松栢の茂れる所即ち名島の辨天祠
にして近傍名島城址あり多々良川は建武元祿の兩
度激戦ありし地なり名島は博多八景の一なり博多
八景は濡衣夜雨、箱崎晴嵐、若杉秋月、奈多落雁、博多飯
帆、横岳晚鐘、萌山暮雪、名島夕照あり
又太宰府には菅原道真を祀れる天満宮あり殿堂美を
盡し庭園また風趣亦到れり公の遺愛たる飛梅は神殿
の前に在り又近傍に遊覧の地多く東に籠山西に天拜
山北に天城山南に葦屋の宿等あり名物梅ヶ枝餅を饗

西 海 道

めばかりに下れる事あれ
ば益後早く長崎を立ち出
で、雲仙が嶽に登り夫れ
より島原に出で、城下よ
り舟に乗り天草に渡り天
草の惣象と云へる山の峰
にてしらぬ火を見物せり
先づ島原にてしらぬ火見
るは何れの地よるしきや
と尋ね問ふに肥後國宇土
八ッ代松ばせの邊の浦々
よし又殊によく見ゆるは
天草の島奇りと云ふにぞ

○しらぬ火

天拜山は山路峻険にして滿山櫻楓を以て封する
に似たり春秋の好景賞すべし博多灣の白帆點々波
穩かなるの日白國と交叉して一幅の好畫圖たり山
嶺巨松天を突く故に遠く數里の間より望むを得べ
し山上に天神の社あり昔菅公麓の瀧に齋戒し寃を
天に訴へしかば山の名に天拜の字を冠すといふ
刈萱の關は水城村に在り天智三年大堤を築て水
を貯へ水城と號く今尙ほその趾を存す夕ぎりや立
へだつらむ岩垣の水城の關に舟もかよはずと光俊
の詠みしは爰の事あり刈萱の關は太宰府守衛の爲
に置かれしが今は纒かに其趾を残す世俗劇場にて
知る佐藤左衛門繁氏石盃丸は此地に居れりと

○名島及博多八景 ○天拜山 ○水城址 百四十三

地 方 誌

然らば天草に渡るべしと
便船尋ねるに邊土故に便
船もなければ小さき獵船
を借りて渡る此日天氣殊
に長閑やかまして海上風
静おれば四方の詠め殊に
よし雲仙が嶽は後ろにあ
り向ふ遙かに東南に連り
て天草の島青み渡りたり
此海は高山の麓は殊に深
く百五六十尋も立つると
ぞ乗れる船は獵船おれば
斯かる事をよく知り居て

奄門山 是筑後の高山にて國の中央に聳ゆ大宰府
を距る二里俗に寶滿山と稱す大江匡房の歌にかま
と山また夜をこめてふりつもの峰の白雪明てこそ
見ゆとあり險峻にして霧濃かあり頂上より望めば
壹岐對馬筑紫の近海模糊として眼底に映じ奇絶の
勝景言ふべからず且つ滿山奇岩怪石突起し春は櫻
樹の白雲驟變き秋は紅葉綿を織て天工を街ふ此他
四天玉山觀音寺等あり二日市の近傍に極寺ありま
た太宰府十二勝區の一に數へらる
又博多灣の北には海の中道といへる名所あり九州鐵
道は門司及び博多を過ぎ南して久留米熊本を経て松
橋に達す物産は米麥大豆石炭を出し博多織は夙に世
に知らる

西 海 道

語り聞かす尤も面白かり
しは此船頭今日も銚とい
ふものを以て魚を取れり
其銚の形鎗の如く柄の長
さ三間先は鐵にて作りて
三つに割れかへり有りて
長さ一尺程なり石炭の所
に長さ綱を付けたり船頭
この銚を使ふ事妙にして
海上浮める魚は小さきも
のどいへども是を突く事
鳥さしの鳥をさすが如し
大きかる魚の船に遠きは

筑 後

筑後は九州の最小國にして面積八十一方里而して九
州第一の大河筑後川(千歳川)は源を豊後の山中に發し
肥筑の間を流れ若松港に於て遂に筑紫太郎の名を負
ふて海に入る延流實に三十里日本三大川の一なり筑
紫平原の灌漑は主として此川に由る河口に太刀洗ひ
石の古蹟あり昔南朝の臣菊地武光が少貳大友と戦ひ
笑て血刀を洗ひし所あり
(久留米)は筑後川の沿岸に在りて鐵道は西南に連る有
馬氏の舊封地なり久留米耕は其特有産物たり久留米
より三里に船小屋礦泉あり山水の美あるを以て浴客
群集す又元寇の時一大難所と唱へられし船橋の古蹟

○しらぬ火

○蒔菫ノ關 ○奄門山 ○筑後川

地 方 誌

此鉾を投ぐるに矢を射るよりもたしかあり今日も鉾を持ちて船端に立ち居たりしが向ふの波間に黒く見ゆるものあるをやがて伴の鉾を投げかけたりしに其魚高く躍りてのがれ行く船頭したり顔にかの網をたけ長くゆるし遣る船をもあやどりて其魚に従ひ行き暫くして静に網を引き寄せたるに其魚彼鉾のかへりにどぢられ

は御井郡神代村に存す市の遍照寺には高山彦九郎の墳墓あり柳川は立花氏の舊城地あり其繁華は久留米に亞ぎ絹織物を産す大牟田は元と寂莫たる一村落到過ぎざりしが三池より石炭を出すを以て近年漸次繁華とされり

岩ヶ崎の奇勝は大牟田の南三川村にあり四ツ山の山脈蜿蜒々海中に滑脱せる尖端は西南海波漫々遙かに肥前の温泉杵島の高山に對し奇石怪巖聳立する間岩ヶ鼻と唱ふ遊士の杖を曳くもの如し

豊 前

豊前は面積百三十六方里餘山は英彦山其主なるもの

西 海 道

て段々船近く寄り来る船頭鉾の柄を取り上げるまゝに船の中にはね上げたれば其たけ八九尺餘の魚の形細くして口吻恐ろしく京都にてさよりと云ふ魚に似たり早魚と云ふものなりとぞ口吻の長さ二尺六七寸も有らん末鋭く肩鉸の如く只獸の角の如く魚にあるべきものとは見ぬすかの一角の魚吻ありといふも此魚にて信ぜ

○しらぬ火

にして嘉麻川源を國境より發し筑紫瀉に注ぐ灌漑の利あり小倉は國の北部に位し小笠原氏の居城あり現今第十二師團司令部の所在地なり馬關より九州に渡る要港たり南に嵐山あり慶長の頃京師の嵐山に模して築く所あり風色その名に耻ぢすその他中津宇佐の名邑あり宇佐には有名なる八幡宮あり(同司)は九州鉄道の起點にして近來繁華となれり港内水深く東に門司山あり南に三角風師止聳ち其狀湖の如し故に硯海の稱あり往昔百濟新羅入貢の港にして地名に今尚ほ遺趾あり特別輸出港の一たり硯材の礦物小倉織を産す

速戸の瀬戸は北に周防灘西に玄海灘を控へ流瀨常に河灘の激浪に浚帖され急湍滾々として捲くに

○岩ヶ崎 ○早吸の戸

地 方 誌

り餘り珍らしければ船頭に此口吻ばかり求めて歸れり肉は油を取るといふ餘り大魚故に食用には成り難しと云ふさて計らざる得物に心慰みて數里の海上も程近きやうに望みてはや天草の地方に近づけり天草の砥石山と云ふ所を右に見せし三角と云ふ所より山の間に船さし入れて行く左右七町に過ぎしと見え水清く山峙

似たり故に一名を早吸の戸と呼ぶ其東方門司關山の嶺に門司古城址あり現時砲臺を築き海峽防衛の爲め第六師團之を管守す此近傍に古代又關を置きたり入道前關白の歌に「春秋の雲井のかりもとゝまらす誰が玉章の文字の關守」とあり海上に一小島あり岸柳島といふ宮本武藏か佐々木岸柳を討ちし所にして人口に喰炙す

豊 後

豊後は面積三百四十四方里餘あり山國川は源を豊後の境より發し中津平原を経て海に入る九州有名の勝地なる耶馬溪は其上流にありて彦山山麓の河水の浸他作用を受けたるものにして奇石怪巖相屹立し懸山

西 海 道

ち風景又他に異あり北へくしけ南へまがりて霧ね入るに緑に續く小松の間に藪屋の軒いと静かなり何人の住みけらしとゆかしくも見る右の方は波打際所廣く砂子の清き事霜を置けるが如くあればいざや此處にて船暫しと云へばやがて渚に船さしつめて碇おろす船頭云ふは此濱邊には小さき蛸多しかりたちて取り給へと云

○しらぬ火

○耶馬溪

肥 前

陽をして溪山無と激賞せしめたる所にして是れよりろの名天下に轟けり又筑後との境には御前山三國山(大分)は大分縣廳の所在地にして市況繁華なり其他海岸には杵築臼杵佐賀の關等あり内地には竹田あり産物の重なるものは米麥烟草礦物墨表豊後絛等あり肥前は山脈國の中央を貫く重なるろの山は背振山黒髮山經ヶ峰等にして領布振山は佐用姫の故事を以て知らる嘉瀬川は筑紫瀧に注ぎ松浦川は唐津灣に入る海岸は屈曲甚しく又島嶼の多きこと實に本邦第一にして大小島嶼の數は一千餘に達す

地 方 誌

ふに潮は淺し利は清し皆々下りて蛸見ありく田舎には珍らしからぬ事も京都に住める身はいと心慰めり船頭は例の鉾打ちかたげつゝ松さし行きしが程なく二尺に近き鱸一つ突き得て歸れり取りあへず料理て煮る鮮けくして味の美なる事さらにもいはすやゝ時移りぬれば船さし出して急ぐに暮近く天草の懸象と云ふ所に

(長崎)は五港の一にして三山を負ひ海水深く入りて風波の患なし古來の外交埠にして泰西の學術始めて我國に入りし開門なり現今長崎縣廳の所在地にして控訴院又此地にあり内外の船舶港内に輻輳し貿易盛に行はれ市況甚だ繁盛なり(佐賀)は鍋島氏の舊城下にして今は佐賀縣廳の所在地あり有名都會とす九鐵の支線此地を通過す唐津口の津の兩港は特別輸出港にして輸出品は石炭あり名護屋は豊臣秀吉征韓の役に本營を置きし所なり其他佐世保は我國屈指の軍港にして高島は炭坑を以て著名なり又伊万里有田は陶器を以て世に名高く農産は米麥煙草を重要あるものとす水産は五島近海の鯨特に有名なり

肥 後

西 海 道

到る此處は少し民家あり多くは漁夫なり此村に上りてしらぬ火見るところの案内を頼みしに百姓一人よろうけがひていたく汚れぬ薙一枚携へ先に立ちて登る東の海の岸にさし出でたる山あり高さ七八町もや有るらん此あたりにての高山あるが此峰よろしと薙打ち敷きて坐す真向ふに肥後國ありて只一望につくす宇土熊本

○しらぬ火

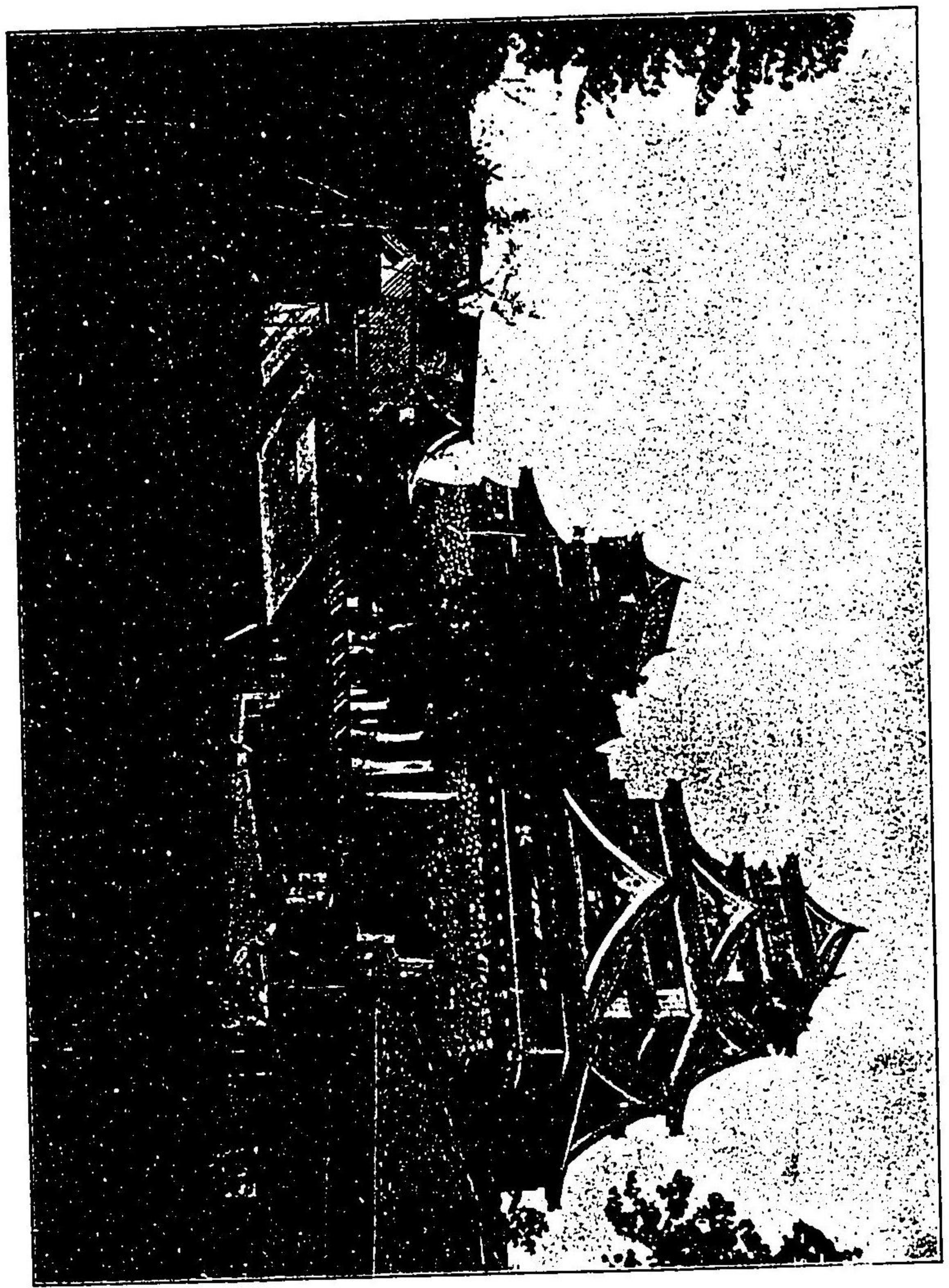
肥後は阿蘇山の峯嶺甚だ高からざれども一國の主山なるを以て壽安鎮國山と號す此山は有名の噴火山にして其溪流は西流して熊本に至り海に注ぐ又高瀬川白川緑川球摩川の四大河あり殊に球摩川は有名なる急流にして富士最上の兩川に合せて我國の三急流と稱す(熊本)は九州第一の都會にして白川坪井川市内を貫流す往昔菊池氏加藤氏の領せし所にして中古以來は細川氏の封土たりしが今は熊本縣廳の所在地たり熊本城は加藤清正の築く所にして結構壯大九州第一の偉觀と稱せられ西南の役賊軍之れを圍むこと數月な

○熊本市

地 方 誌

は少し左に見えたり右に日奈久向ふに入代其の海上わたり五六里より七八里に過ぎず南北は入海數十里にして其限り見えず案内の人指さして右なるは鼠島なり左は大島あり夫は三つの島是は幾島と數々教ゆげに海上三里ばかりにいと少く島々見ゆしらぬ火は何れに出づるやと問ふに島々見ゆるあたりにと云ふ初の程は

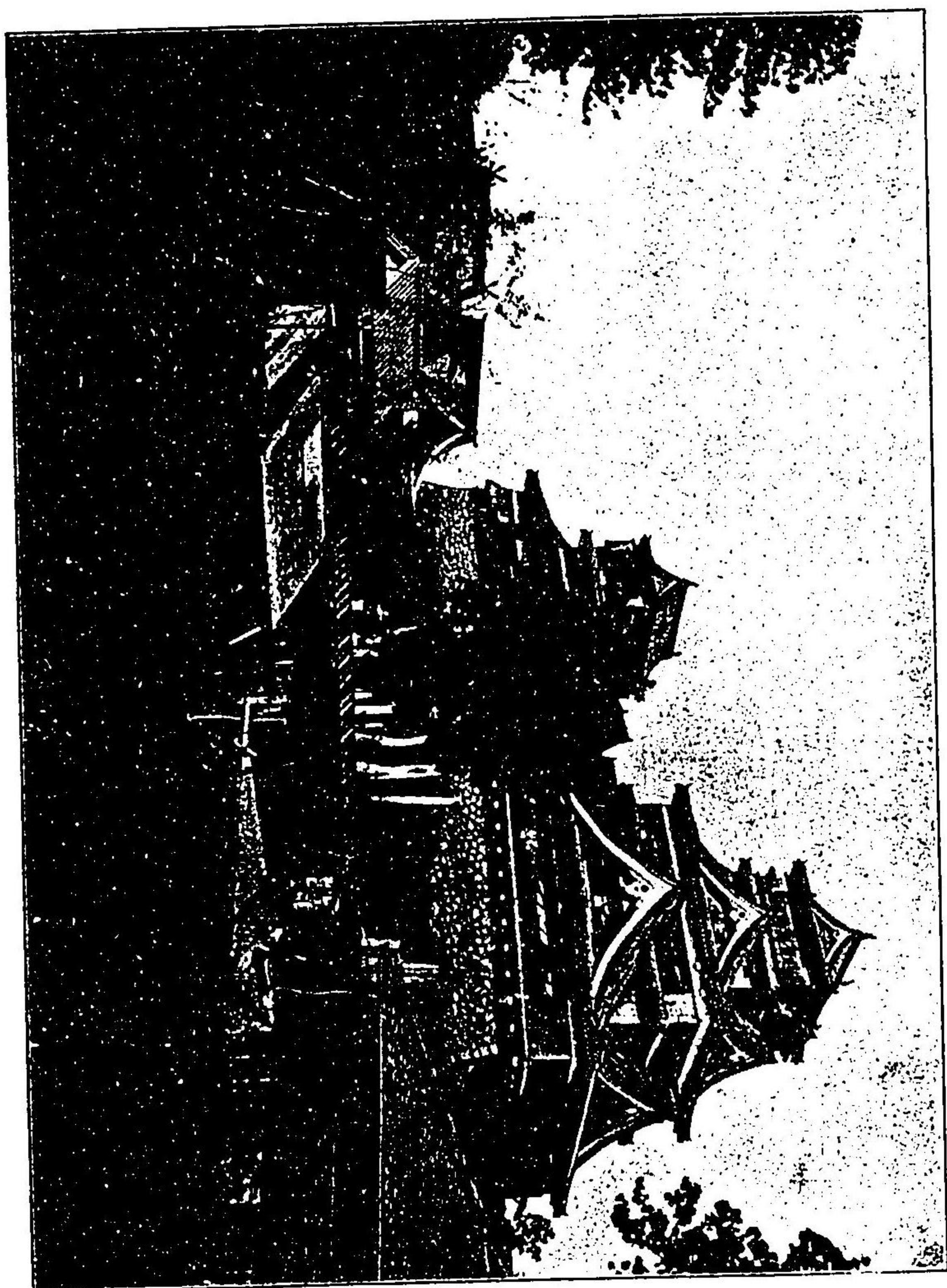
りしも遂に之れを陥ること能はざりし今第六師團の在る所なり市街は十年の役大抵兵燹に罹りしが爾後宏壯の家屋建築せられ却て面目を一新せり第五高等學校も此の地に設置せられ九州學術の中心たり九州鐵道は此の地を經過し停車場は市の南北兩端にあり門司との間流車七時間にて達すべし城北に錦山神社あり眺望風光の佳絶なるを以て遊覽の客絶へず社は加藤清正の靈を祀る本妙寺も清正の廟地なり隈府町には菊地氏歴代の城址あり此他山鹿川尻宇土八代佐敷人吉等の名邑あり



地 方 誌

は少し左に見えたり右に
日奈久向ふに入代其の海
上わたり五六里より七八
里に過ぎず南北は入海數
十里にして其限り見えす
案内の人指さして右なる
は鼠島なり左は大島あり
夫は三つの島是は幾島と
數々教ゆげに海上三里ば
かりにいと少さく島々見
ゆしらぬ火は何れに出づ
るやと問ふに島々見ゆる
あたりにと云ふ初の程は

りしも遂に之れを陥ること能はざりし今第六師團の
在る所なり市街は十年の役大抵兵燹に罹りしが爾後
宏壯の家屋建築せられ却て面目を一新せり第五高等
學校も此の地に設置せられ九州學術の中心たり九州
鐵道は此の地を經過し停車場は市の南北兩端にあり
門司との間涼車七時間にて達すべし城北に錦山神社
あり眺望風光の佳絶なるを以て遊覽の客絶へず社は
加藤清正の靈を祀る本妙寺も清正の廟地なり隈府町
には菊地氏歴代の城址あり此他山鹿、川尻、宇土、八代、佐
敷、人吉等の名邑あり



岩戸山 是金峰山背後に聳え山下に一大岩窟あり
靈巖洞といふ洞中百人を容るべしその奇怪人目を
驚かす鼓ヶ瀧は北洲の小瀑なり水聲鼓音を發すと

西 海 道

人里も遠くいと物凄き島
山ありしが追々に知らぬ
火見物の人々出で來りて
數十人に及ぶ皆此近國よ
り二日路三日路をも來り
て見物する人々あり程な
く海の面もや夕煙引き
渡して人顔もさだかあら
ねば所々松なども明かして
酒など取り出し思ひく
に小唄浄瑠璃太鼓三味線
或は誰狂言など各藝を盛
して戯れ遊ぶ夜陰の事を

○しらぬ火

南に山下庵あり拾垣女が棲みし所といふ
水善寺は熊本を距る一里出水村に庭園の美を以
て誇る舊藩主細川氏の別荘あり規模結構備前の後
樂園に一步を輸せず風光九州第一と稱せらる
花岡山は横手村に在り花季尤も行遊に宜し俗に
祇園山と稱す昔時此山頂に祇園社の在りしを以て
あり景色の佳なる遠く阿蘇の山嶽益城の連峰を雲
烟の際に望み近く江津湖本妙寺指呼の間に在り
此國は肥後米とて良米の産地を以て有名なり又馬を
出すを以て名あり其他煙草石炭綿布朝鮮鮎等を名産
とす

古は肥前肥後を併せて火國といふ前後兩國の間に
當る海上に燐火現はる之れを不知火と呼ぶ是れ國

○岩戸山 ○水善寺 ○花岡山 ○不知火 百五十三

地 方 誌

れば計とは知らず殊に諸方より集りたる事あれば遠慮はあし彼坐に登り此庭に列り隔てなく陸ひ照らう事有馬但馬も温泉の場の交りの如し今年は例より残暑強けれど其る海邊の高山に殊に空はよく晴れたり小夜風おもむろに吹きていと涼しければ夜の更くるも知らずはや夜半にもなりしかども知らぬ火の沙汰なし今年

號の因て起る所あり其火宇土八代及び天草と相圖みたる内海中に於て初秋の頃暗夜に會へば最も明に見ゆ土俗之れを龍燈といふ來り觀る者多し實に一奇觀たり不知火は海中の動物の光を放つものなるべしといふ

日 向

日向は海岸屈曲少く殆んど一直線をちし只東に細島南に志布志灣あるのみ其沖を日向洋と云ふ此國は本邦太古の歴史に大なる關係を有する所にして神代にて尊等の住み給ひし所なり宮崎は宮崎縣廳の在る所にして宮崎の宮は神武天皇を祀る又都城には高千穂の宮址あり其他延岡佐土原和島高鍋等の名邑あり物

西 海 道

初めて見る人は今宵は如何なる事ぞ知らぬ火は出でざるや但し空言なりやなど口々に云ふ予も怪しみ居たりしが八つ近き頃に遙か向ふに波を離れて赤き色の火一つ見ゆ暫くして其火左右に別れて三つになるやうに見えしが夫より追々に出づるほどに海上わたり四五里ばかりが間に百千の数を知らず明らかなるあり幽かな

○しらぬ火

産は椎茸甘藷日向半紙半切等あり

大 隅

大隅も亦大なる都會に乏しく僅かに國府加治木あるに過ぎず物産は國府の煙草大島の黒砂糖甘藷農馬等にして鑛物は金銅を産す此國には屬島多く概ね火山岩より成る佐多岬は南端にあり燈臺を設けて航海者の便に供す

薩 摩

薩摩は九州南部山脈西南より來り國見岳御岳等となる川内川は本道第一の大河にして長サ四十六里に達す既島長島獅子島は天草群島と共に九州に斗出して

○宮崎市

るあり滅ゆるあり燈ゆるあり高きあり低きあり賦に見事にして目を驚かせり其色皆赤くして提灯の火を遠く岬が如したとへば大坂の天刑祭を夥しく集めて見るに異ならず食に諸國より來り見るもいたづらならず所の人に問ふに年によりて多き事も少き事も定まらずとぞ今年は勝れて多く出でたるも予が幸と云ふべし廣き

其内に鹿兒島灣を抱く灣内の一島を櫻島と云ひ活火山にして山上常に硫黄を噴出す(鹿兒島)は甲突川畔に在り北に城山を負ひ東に鹿兒島灣を控へ島津氏の舊城地にして肥後熊本と共に西陲の雄藩なりしが今は鹿兒島縣廳の所在地たり文久年間英人と戦ひたる古戰場なり城山は維新の豪傑西郷隆盛討死の所にして墳墓あり其他川内阿久根谷山出水等の名邑あり物産の重あるものは甘藷煙草馬等とす

壹 岐

壹岐は九州の西北に在る孤島にして肥前の北端を距ること海上七里あり我國の最小國にして面積八万里

海中に出づる事あれば天草に限らず肥後地よりも何れの浦にても皆よく見ゆるあり然れども如何なる譯にや高山に登る程多く見事に見ゆるとて此山なども群集せるなり此夜は此邊の者海中に龍神の燈明を出だし給ふなりとて招れみて渡海の船を禁ず獵船といへども此一夜は乗る事おし過ぎし年肥後の士密に小船に乗りて

〇しら火

餘に過ぎず勝本の名邑あり物産は甘藷海草魚類等とす

對 馬

對馬は壹岐の北に在り朝鮮海峡に横はり古來朝鮮と往來の要津に當るを以て津島と稱したりといふ上島下島の二島より成る嚴原は下島にあり元と宗氏の舊城地にして今は長崎縣の島司廳あり海岸は實に夥しけれども陸産は馬の外記すべきものなし

琉 球

琉球は薩摩の南西に碁布する大小十五有餘の島嶼を總稱して琉球列島といふ島勢自ら三に分れ北にある

地 方 誌

彼の火の出づる所に到り見
るに只其火前後に遠くあ
りて我船近くは一つも見
えざりしとぞ予も今宵ま
のあたり見しかども如何
なる火と云ふ事を知るべ
からず昔の人の知らぬ火
と名づけ置さしも尤もの
こと、覺わし唐土には桃
江の神燈を是に似たる
事もありとぞさて夜明く
るまで斯くの如くにして
旭出づれば火の光海々に

を沖繩とし南に在るを石垣とし中央にあるを宮古と
す地勢は一般に山多しと雖も高山なく地味は肥瘠相
半ばするも灌漑の便を缺くを以て五穀に乏し
(首里)は沖繩島にあり往時藩主尙氏の居城地にして現
今は第六師團の分營たり那覇は其海港にして琉球第
一の都會たり沖繩縣廳師範學校及び中學校あり西南
に宮古島あり近海には暗礁多く舟行危険なり唯西岸
の張水港舟を繋ぐべし
石垣島は宮古の西にあり琉球諸島の極南に在るを涉
照間島といふ又八重山群島とは石垣島以西の諸島を
云ふあり此國は初め薩摩の屬地たりしが其王尙氏は
支那に通じ殆んど屬國の如くなりしが明治五年詔し
て琉球藩を置き王を華族に列し次で縣を置かれたり

北 海 道

薄く成り行きて星と共に
消滅す昔し火の前の國火
の後の國と名づけられし
も故ある事あり中古の世
火の字をおみて肥前肥後
と改められしとぞ又歌の
言葉などにも知らぬ火の
筑紫を昔書けり九州に遊
ばん人は必ず此折を考へ
て行くべき事あり

耶馬溪圖卷の記

頼山陽

○耶馬溪圖卷の記

物産は甘藷砂糖を第一とし又藍を産し琉球絨を出す
其他上布芭蕉布等の製品あり沿海には魚介の利多く
殊に夜光貝を有名なりとす
西海道の北部諸國は寒氣強けれど南部は暖和あり
殊に琉球は炎熱にして終歲寒さを知らず九州の極暑
は凡三十五度極寒凡零下三度にして琉球は極暑凡三
十七度極寒凡零下六度なり

○北海道地方

北海道は我國の最北に位し古へ蝦夷と稱せし地にし
て一大島及び數十の羅列したる群島の東北に散布連
延するものより成る本道は山岳多けれども險峻の者
少く河は四方に注流す東西の海岸は出入あれども南

○那 覇

地 方 誌

余嘗て世人の書を讀み其山貌木だ奇峭あるを疑ふ恐らくは天壤間に在る所に非ずして壽人の一時興到り其筆墨を鼓舞するのみと豊の耶馬溪を觀るに及んで乃ち造物奇怪畫手も亦寫して到らざる者有るを知れり、歲は戊寅、鎮西に遊び、流を過ぐるに、南彦山を雲際に望み、己に其異なるを覺えたり、既に肥薩隅を経て、還つて豊後の隈

北は屈曲少く概ね平坦あり平野は石狩川天竺川十勝川の近傍に於て廣大ある所あり内地は未だ開けざる處多く概ね人跡絶て道路なし此地明治二年北海道と改稱し爾來本土の人民移住するもの日に多し土人を「アイノ」云ひ無智にして文字を知らず言語風俗も亦本土に異れり現今は其數漸く減し僅々一万五千人に過ぎずといふ

函 館

(函館)は渡島國函館灣隅にあり津輕海峡の口を扼し青森を距る二十餘里にして箱館山を前に控へ我國五港の一にして港内廣く且つ水深きを以て船舶の碇泊に適し北海道の貨物は一に此に集る故に貨物の往來頻

北 海 道

村に寓す臘月五日、豊前に入り、一水の北より來るに遇ふ、蓋し源を彦山に發する者、沿ふて東する數十里、昏黒にして左右の峯巒皆凡にわらざるを覺ゆ、山海相迫る處、山腹を鑿つて道となし、人窓を穿つて明を取る余炬を買ひ以て入る廂に遇へば、月の溪水に在り朗然たるを窺ひ見る民家に宿す、翌大霧なり、露るを待つて乃ち發す、復た

○耶馬溪圖卷の記

繁なり此の港は徳川氏の世未だ隆盛に赴かざりしが明治維新以後は頗る繁盛に至り現今北海道支廳また此處にあり
五稜廓は箱館の北一里にありて幕府の經營に係る砲臺あり形五稜を爲す維新の際板本武揚大島圭介等之れに據りて劇戦せし所にして現今は氷の産出頗る盛んあり
(福山)は函館の西南白神崎の西北にあり昔松前と云ひ松前氏の舊城地たり昔時此所に首府の設けありて遙か函館に優りしが今は之れに劣るに至れり
其南方海岸には燈臺の設けありて航海者に便にす江刺も渡島國にありて日本海に面し船舶の往來多し露都は辨慶岬の東南に在りて碇泊に便あり森港は室蘭

溪に沿ふて東す愈東すれは愈奇あり群峯水を狭んで撥棘せるは春笋の矗立するが如く土の石を載する者石の土を挟む者全く石あるもの全石の破裂して洞穴を成す者兩石相闕ひ其一作れんと欲する者石數層累なつて夏雲の状を成す者あり而して樹は石罅より横生し縦生し倒生して上指し叢生して石を蔽ひ石と勢を争ひ而し

の對岸にありて國道に當る要津なり

室蘭

(室蘭)は膽振國にありて噴火灣内に位す給鞆岬長く海中に突出して港を蔽ふ波島に渡る要津にして港内水深く船舶の碇泊に適す此地は第五海軍鎮守府の所在地たるべき豫定なり鐵道は本港より起るものは東海岸に沿ふて苦小牧に至り千歳を過ぎて岩見澤に至り札幌線に通ず本線は軍事上必用の鐵道なり千歳は鉉の繁殖最も盛んなり支笏湖は千歳川の發源地にして洞爺湖は湖中に一小島ありて風景に富む共に膽振にあり

て之に勝たんと欲するが如し石又樹中より奮躍して出で而して石陰皆苔紫緑相間はる或は石の半面を没し或は全面を没す又樹を援け石を攻むるが如き者大抵峰勢石叢巨刻意圖の如し時に窮冬多くは老木の葉脱し槎牙瘦古倪黃の筆法而して苔枯歴し蒼潤する者は王叔明なり古人の筆墨我を欺ひかざるなり柿阪に至り孤店

札幌

(札幌)は石狩國の西南にありて豊平川の下流に跨る小樽港を距ること凡そ十餘里の所に在りて本道第二の都會なり北海道廳の所在地にして市街繁華宏壯の建物亦多く有名なる札幌農學校其他炭鑛鐵道會社及び製糖製麻會社等の設けあり街路は井然たること殆んど西京に似たり市の附近は牛馬の牧畜盛んに行はれ鐵道は西小樽港より來り東京知幌内炭山に達す又新設の第七師團司令部此所に在り又東北ある上川は石狩川の上流に在る原野の中央にあり地勢平坦近傍は農産に富み屯田の事業盛んなる上川郡の忠別は將來離宮を設けらるべき地ありとい

○耶馬溪圖卷の記

○洞爺湖

地 方 誌

に憩ふ、店は石壁數丈に面し飛泉懸る仰げば更に高峰あり是幾十丈あるを知らず余急に佩ふる所の酒瓢を釋き命じて之を煖めしむ、窺突蕭然會々獵射新に豪猪を獲たり割いて之を煮る肪脆水の如し連りに數大白を引き又往く、溪又數曲峰勢に隨ふて上下す或は激雷雪を吹き或は淨香碧を凝らし峰影之が爲めに或は碎け或は全し

小樽

(小樽)は後志國の北海岸小樽灣内にあり函館に亞ぐ要港にして其箱館港に於けるは恰も東京の横濱に於けるが如き關係あり鐵道は北方手宮を起點とし札幌を過ぎて幌內に至り二脈に分れ一は郁春別の炭山に至り他は幌内炭山に達す

釧路

(釧路)は釧路川の河口にあり此地より船にて釧路湖に至るを得べし湖は阿寒湖と共に北方山中にありて頗る山水の景に富むといふ又釧路には硫黄山と標茶を

北 海 道

水山を妬んで其影を亂す如し屈智林に至る溪稍開く、小村あり一櫓を過く、是より溪北を行く聞く者は益聞く數十里古城正行寺に詣る寺主舎公は余の故人なり余を待つ事既に久し余先づ詫げて曰く、君が州の山水大に奇ありと、舎公曰く、更に奇ある者あり余をして之を目せしめんと居る事二日余公と南行す、田勝の間を行き仙人巖

連接する鐵道ありて硫黄の運搬に便にす

根 室

根室は極東地方の都會にして根室灣口にあり辨天島其前に横はり千島諸島に渡る要津にして辨天島には燈臺の設けあり海上を安全にす又道廳の支廳を爰に設く
厚岸は根室の西南に當る一市場にして厚岸灣内にあり大黒島其前に横はり風波を拒ぐ此地蠟産を以て名あり又大黒島には燈臺の設けありて航海に便にす

天 鹽

(天鹽)は國の北部天鹽川の河口にあり鱈の漁業盛んを

○耶馬溪圖卷の記

地方誌

に至る巖石山頂に突立す
舎公指して余に示す余甚
だ賞せず寺前の逆旅に宿
し燈を挑げて談す余曰く
山は水を得れば生動せ
ず石は樹を得れば蒼潤
からず余が馬溪を賞して
仙巖を賞せざる所以羅漢
に至つては人工のみ然れ
ば馬溪の支裔あり且馬溪
は溪山相迫り田塍の目を
礙ふるなし而して其路坦
夷真に近ぶべきなり然れ

り天鹽川の流域は頗る廣く多く農産物を産す河流濁
流殊に甚しといふ増毛も天鹽に在り石狩の國境に近
き良港にして小樽との交通甚だ頻繁あり又十勝の大
津は昆布の採取盛んなりと云ふ
(宗谷)は本島の最北にありて一葦水を隔て魯領樺太島
を望むべく咽喉の地たり

千島諸島

本島に屬する者は千島群島及び其他十二の諸島あり
千島群島は根室の東北に羅列する三十二の島嶼より
成る就中其大なるものは國後島色丹島擇捉島新知島
捨子古丹島恩稱古丹島幌筵島占守等とす占守島は最
北に在り地勢平夷にして池沼に富み又良港に富む會

北海道

とも二疊の通道となつて
過ぐる者慣看す孔んや公
等此土に成長す宜なり其
奇を覺えざるや余は再遊
期すべからず將に復た之
を廻り以て之を諦観せん
とすと舎公袂を奮ひ與に
偕に早發す一水を過ぎ北
して馬溪の口に出つれば
峰容樹色忽ち他り別るを
覺ゆ淺より深に入り平
より奇に入る前數曲の者
を折れば一曲は一曲より

○耶馬溪圖卷の記

て郡司大尉の報公義會員數十人あり一意開墾に従事
せり此等諸島の面積は四國と畧同一にして近海霧深
く風波常に高く海岸は斷崖多くして船舶を寄するに
便ならずといふ
北海道は國の最北に位するを以て寒氣強く殊に北部
は河海共に氷を結び盛夏と雖も恰も西南地方の仲春
の如し極暑三十度極寒凡零下二十度あり而して北部
と南部とは極寒に於て三十度の差あり
物産の著名あるは海産物は鮮鮭昆布にして臘虎臘肭
膾は本道特有の産なり鑛物は現今硫黃石炭の二種の
み
本道は中央に峻嶒重疊するを以て交通困難ありと雖
も四周の地は道路稍開け又鐵道も已に中央を貫通し

○氣候及物産

地 方 誌

奇なり、諸を前遊に比すれば更に喜ぶべきなり、復た絶壁下の孤店に至る店主余が面を識り驚いて曰く是前に猪を喫うたる客あり、何の幹あつてか再び此に来るや、余曰く、山を看んと欲するのみ曰く山に何の好看か有る、吾は子の看るを禁せざるなりと遂に溪畔に席して舍公と瓢を傾け一醉す、山寺に酌す、明くれば雨あり橋を假り西

稍々便利あり道路は皆海岸を繞りて諸方に通ず其内背森より輕津海峡を渡りて函館に至り夫れより北方森港に至り噴火灣を渡りて室蘭港に至り海岸に沿ふて苦小牧に至り北進して札幌に至る者之を札幌街道とす而して苦小牧より海岸に沿ふて歌別に田で襟裳崎を横断して猿留に出で又海岸に沿ふて十勝國大洋に出で釧路を経て苦多に至り厚岸灣を渡りて根室に至るものを根室街道といふ其他海岸のみならず内地に通ずる者數多あり

臺 灣

臺灣は支那海上の一大島にして東北は琉球を控へ西南は支那の福州に對し南方はフィリッピン諸島と相

臺 灣

に還る、山峰雨を得て皆變幻態をなす或は前に以て一山と爲せるものは、分れて數峰と成り群仙の肩を駢べて其半身を露はし、萬松の叢を振ひ雲中に鼓蕩するが如し、又二十五菩薩の樂を奏して至るが如し、還つて屈智林に至る、舍公吾が酒の盡くるを慮り、豫め家僮を戒めて、樽を馬に馱し來らしむ、醉を取り阿保村に宿し翌寺に歸る又

○耶馬溪圖卷の肥

對す山脈は本島の中部より南部に著しく連亘し地勢は南北に長く東西に狭し北部は數多の高山錯雜して蜿蜒起伏す東岸は斷崖をなして海に入り近海は非常に深し西岸は淺くして良港に乏し河流は大なるもの少く多くは溪流の類なり而して海上は浪暴くして航行危険なり
臺灣は久しく未開人民の住居せし地なりしが其初めて支那に知られたるは明の世にして明の鄭成功國姓爺此地に據りたり後康熙年間清國の領地となり明治二十八年日清戦争の和約成りて我邦の版圖に入れり臺灣の住民には生番熟番の二種あり生番は東部の深山幽谷に棲息し全く野蠻の民にして産業を知らず性殘忍殺伐を好み鹿を狩り魚を捉へて生を營み僅かに

地 方 誌

三日にして辭し去り、海を
踏えて東歸し、海雲中より
鎮西の山岳を願望すれば
其豊前に屬する者は皆別
態あり、彦山は其尤も大な
る者、耶馬山脈水理蓋し皆
彦山より發す、故に獨り絶
するのみ余が足跡殆んど
海内に半す、弱冠なるとき
東遊して妙義山を得、以て
無雙となす、今馬溪百里妙
義の如き者幾十峰なるを
知らず、之を海内第一と云

農を務む熟蕃は平野に住する蠻民にして頗る勤勉愚
直なり常に兵器を有すれども防禦の爲にして頭顱を
得んことを希はず永く支那人の下に在りてその感化
を受け現今は舊套を脱し稍文化を知るに至れり
臺灣は地勢に依りて自然に東西南北の四部に區分せ
らる即ち北部に屬するものは臺北淡水苗栗宜蘭基隆
にして南部に屬するものは臺南安平鳳山恒春澎湖な
り而して臺灣彰化嘉義雲林埔里社は西部に屬し臺東
は東部に屬す

北部地方

北部は山岳丘陵多く淡水河其内部を流れて數多の支
流を南北に出し其流域は稍廣濶ある沃野を有す

臺 灣

ふ、或は巫ひざるあり已耶
の臘葉を眩き、爾時山を寫
し粉本數紙を得、戯れに意
を以て之を接屬し、横長一
巻となす、又其由を記し併
せて得る所の詩九首を録
す余が詩文笨拙、其髣髴を
狀するに足らず況んや畫
をや、後能者董巨倪黃の流
の如きもの有りて、其境を
踏み而して之を補成せば
庶幾くは此山水に負かさ
らん、然れども此山水目し

(臺北府)は北部の都會にして四面山を繞らし淡水河
の來り流るゝありて殆んど我西京に似たり南方は新
店大姑陷兩河の流域にして沃野曠く開け北西に大屯
觀音の諸山を望む府城は劉銘傳の築く所にして周圍
皆石壁を繞らし要害頗る堅固あり市街は廣大にして
所々に噴水を設く現今我總督府の所在地にして我國
民最も多く住居し臺灣鉄道は此地を基礎として東西
に走り交通便利あり
(臺南府)は臺北府の西南に在り一に舊街と稱し新店河に
臨み商業頗る繁盛にして巨商多し又龍山寺ありて修
觀頗る名あり大稻埕は一に新街と稱し新店大姑陷兩
河合流の地にありて商店櫛比し殊に製茶の業盛んか
り